
魔王との冒険記

天見酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王との冒険記

【Zコード】

Z0474M

【作者名】

天見酒

【あらすじ】

英雄の親を持つ才能溢れる非凡な青年刀士が、優しき魔王な女の子を召喚してしまったことにより巻き込まれる異世界の英雄物語。

世界を渡り歩く彼らが行き着く先とは？

どんな違いが有っても、人は繋がっていく！

天見酒、『冒険記シリーズ』第一弾！

出来れば第一弾の『勇者との冒険記』を読んでからの方が分かりやすいと思います。

逆に、この小説を読んだ後に第一弾を読んだ方が面白いかも知れません。

賢者と勇者の出会いの地

出会いの森。20年前、この地で賢者ライシス・ネイストと勇者アレン・レイフォートは出会った。

魔物によつて薬草の生える泉を占拠されてしまい、困り果てた村人達を救う為にその魔物退治を引き受けたライシス・ネイスト。

数百を越える魔物の群れに流石の賢者も危機に陥る。その危機を救つたのは後に勇者となる男だった。

偶然に通りかかった残虐非道な“同士殺し”と呼ばれたアレン・レイフォートだつた。しかし、その賢者が村人達の為に奮闘する姿を見たアレン・レイフォートは改心し、賢者とともに数多の魔物を退治する。

それがこの地に残る父上とアレンさんの伝説である。

しかし、俺はこの伝説が大いに間違つてゐることを知つてゐる。

それは、あのアレンさんが極悪非道だつたといつ事実は全く無かつたと言う点だ。あんなお人好しな人が極悪非道に走つっていたなんて事がある訳が無い。

この点だけは父上の嘘話の中で信じられる。

父上はこの森で魔物から逃げていただけでアレンさんに命を救われただけだと言う。アレンさんの活躍を立ててはいるが、あの人は自分の偉業について謙遜して語る癖があるので、父上が自分の事を語る時だけはあまり信用が出来ない。

とにもかくにも、今、俺はその父上達の伝説が始まった地にいるのだ。少し気分が高揚している。

俺は仕事で来たのだ。少しばかり落ち付かねばいけないな。

「おつと、坊主。どこに行くんだ？」

木の影から現れる三人の男達。やつと出たか。

「悪いがここからは素っ裸になつて帰つて貰うぜ」

こういう輩は20年前から増えたらしい。父上達が魔王を還した後に、ガンデア連邦国が崩壊した。ガンデアは当時の貴族領がシーベル工の庇護により独立し、シーベル工のノースと現ドーグ自治領間にあつた国境は撤廃された。

そうしたことでのガンデアから大量の人が流れ込み、人口増加による就職難が犯罪の増加をも引き起こしてしまったのだ。

「俺はシーベル工騎士団准尉リセス・ネイストだ。抵抗せずにお縛りにつけ」

激しく笑われた。まあ仕方ないだろう。俺も青年騎士団員ただ一人。大した敵には見えないだろう。仕方がない。カタナに手を掛ける。

「おつ、坊主やるつてのか？」

三人の中で一番大柄な男もにやけながら腰の剣を抜く。

それと同時に俺はその男の懷に入り、喉元に鞘に収まつたままの力

タナを叩き込む。全く隙だらけな奴だな。

倒れた男に驚く残り一人。一人が慌てて拳銃を俺に向ける。遅いな。
しかも、銃ならばもう少し間合いを取るべきだつたな。
拳銃の引き金が引かれる前に拳銃の上半身が地面に落ちる。そして、
怯む男の鳩尾に蹴りを入れる。

俺から距離を取つた最後の男が火魔法を放つた。俺に当たる筈がない速さと威力だった。その男への返しに雷魔法をお見舞いする。避ける間もなく紫電に貫かれて男は悲痛の叫びをあげて氣を失つた。

その後、この森の近くの村に駐留している騎士団員にこの山賊どもを引き渡した。

騎士団員の一人が俺に馴れ馴れしく話しかけてくる。

「いやあ、さすがは賢者殿の息子様はお強いですね~」

「父上はもつと強いですよ」

それだけ言つと俺はこの地を後にする。煩わしい世辞は嫌いだ。

それにもしても、山賊三人ごときにあんなに時間をかけるとは、俺はまだ父上やアレンさんには及ばないらしい。もつと己を鍛えなければな。

の人達のような英雄になるために!

英雄の終焉の地で始まった

ナールスエンド。かつて、初めて魔王を倒した大勇士リンセン・ナールスが眠る地。

『えー、リセス君はナールスエンドに居るのか？良いなあ。彼処には美人が多いらしいじゃないか！よし、僕も視察を目的に今からナールスエンドに行こうじゃないか？』

「陛下、そろそろレッドラート総長にお代わり下さい」

この魔導話機は騎士団総長執務室に繋げた筈なのだが、何故かクーセリング・シーベル工国王に繋がってしまい、無駄話を聞く羽目になってしまった。

『もう少しぐらりい良いじゃないか、リセス君。僕にジンサが冷たい仕打ちをするのだよ。忙しい僕がせっかくこいつして遊びに来てやつてるのに全然構ってくれないんだよ、アツ』

『すまないな、リセス。少し部屋を離れていた。ナールスエンドに着いたんだな？』

魔話機の向こうから聞こえる不機嫌そうに感じる声。この人は普段からこんな感じの声を出すから別に不機嫌という訳では無いのだが。追加情報はあるでしょうか？』

今回の任務は、このナールスエンドの大商人バックス邸にて、何やら良からぬ武装集団が集まっている情報を得たから調べて来いと言

うことだった。

『その事だが、お前はそこで増援が来るまで待機だ。明日には着く筈だ』

一人で仕事をする気でいた俺は少しこの命令が気に障つたが、ジンさんの判断が間違つ訳は無い。何があるのだろう。

『この件に関して何か新たな情報が入ったのですか?』

俺一人では無理だと言う理由を聞いておきたい。

返答が無い。息を吐く音が魔話機の向こうから漏れて来る。煙草を吸いながら話すべきか話さるべきかを考えていると推察する。しばらくして応答があつた。

『…オルセン・ハシュカレらしき人間がナールスエンドで目撃された』

俺は息を飲んだ。オルセン・ハシュカレ。魔王の再臨を望み、奸雄クレサイダに従つた男。今なお、魔鎧エウレクイと共に姿を消し、世界的に指名手配されている大罪人。

『分かるな?オルセン・ハシュカレがお前がライから譲り受けたセレミスキーフ手に入れたらどうなるか』

俺は無意識にベルトに提げている小鞄に触れる。

『分かりました。大人しくしています』

『早ければ増援が今夜には着くはずだ。…一つ頼みたいことがある』

「何ですか？」

ジンちゃんの真剣味を帯びた声に俺の胸は高鳴った。ただ待つよりは良い。

『実はルクが増援部隊に勝手について行ってしまった』

俺の胸の高鳴りは急激に治まった。

『そちらに着いたら危険な事をしないように見張ってくれ。そして、早めにシーベルエンスに連れて帰ってくれ』

魔話機の向こうで陛下の“親バカ”という単語が聞こえた。俺も言つてやりたいところであるが止めておく。

「……はい、分かりました」

『詰つまでも無いと思つが、絶対に手を出すなよ』

魔話機の向こうから伝わる威圧感。流石は歴戦を制して来た騎士団総長。しかし、その威圧感を有効活用するべきではないだろうか…。

魔話機を切り、ナールスエンドの街中を歩きながら、今後の行動を検討するために提供された情報を整理して置くことにする。

溜め息が漏れた。

あの性悪女が来るのか。昔は可愛かった。とても大人しく照れ屋で父親であるジンさんにべったりだつた。しかし、ある時期を境にルクの性格は急変した。性格は逞しく、陰険になり、人をからかうことが生き甲斐となつていった。

子は親に似ると言つが、あの少し親バカではあるが謹厳実直なジンさんとあの心が澄み渡るほど綺麗な聖女ニーセさんという素晴らしい両親から、どうしてルクのよつた性悪が育つのかが全く分からぬい。本当にルクは誰に似てしまつたのだろう？

下らん」とを考えてしまつた。

俺の目の前には、バークス邸。あのオルセン・ハシュカレがここに居る可能性がある。

父上やアレンさんの好敵手だつたと言われるオルセン・ハシュカレ。是非、自分の実力を試す為に闘つてみたい。

そんな俺の隠しきれなかつた欲求がジンさんの命令に打ち勝つてしまつた。

少し情報を集めるだけならば良いだろ」と言い訳を作る。

俺のこの軽はずみな行動が父が守つた世界を危機に陥る騒動に巻き込まれる結果になるとは思つていなかつた。父上よりも長き旅路になることも。

そして、これが彼女との出会いになるといふことも

英雄の終焉の地で始まつた（後書き）

さて、主人公リセス・ネイストの名前ですが、気付いている方もいると思いますが、設定上、リセスの父上が大好きな英雄を略して付けたということですぞ。

では、問題です。名前だけ登場したルクちゃんは、母親の尊敬する人の名前から取つたという設定です。さて、誰でしょう？

『魔王との冒険記』からの新規読者の皆様には分からぬだらう問題失礼しました。

魔王の降臨 そして彼女と出逢つ

バークス邸。潜入したは良いが拍子抜けだった。オルセン・ハシュカレどこのか人っ子一人いない。

しかし、それが異質さを物語る。こんな大きな屋敷に誰も居ない。更には既に日が暮れているのに明かりを灯さない。まだ、良い子が寝る時間だぞ。屋敷全体が静まりかえるには早すぎる。

暗い屋敷の中を歩き回る中で唯一一つ床から昇る光を見つける。そして、その僅かに漏れる光に映し出される床に積まれた数々の血にまみれた人形。おそらくここで生活をしていただろう人間だったもの。

血が沸き立つ。俺は今、怒っているんだ。冷静になれ。怒りで行動すればミスを犯すぞ。

地下へと導く階段。足音を消して降りていく。階段は三十段程、そこまで深くはない。

行き着いた先にそいつらは居た。まだ魔写真機が開発されていない時に行方不明になつた為、未だに手書きの手配書だが、絵師の腕の良さを評価せざるを得ない。オルセン・ハシュカレだ。他に伸びる影で、他に一人の人間がここから確認出来る。

「では、始めます」

女性の高い声。何を始める気だ？

「ああ、やつとだ。やつとの世界を変えられる。待っていてくだ

さい。二ーセ様

オルセン・ハシュカレの言つていることが分からぬ。どういづことだ。二ーセさんが関わつてゐると言つのか？

「チツ、オルセン。ネズミが居るぞ」

しまつた。話に聞き入り過ぎた。その男が俺を視界に捉え、その男が力タナを抜くのを確認した俺も抜刀する。

黒髪の黒目、併せて力タナ。カイナ人か？顔には斜めに古傷が入つてゐる。

速い！基礎動作を繰り返すカイナの剣術。大陸式の剣術と違ひ力と技だけに頼らず、体技を用いた剣術。

その鋭い攻撃には守備に回るしかない。

同じカイナ剣術の俺の師である母上と同等、もしくは母上を越えるかも知れない。

とにかく足場が悪すぎる。段差が俺の足さばきを邪魔する。相手もその段差で攻めきれないが、このままではジリ貧で負ける。

俺がわざと力タナを大きく弾かれる。相手が俺に止めを差そつと僅かに大振りになる。その隙を狙つていた。

相手の足の横を通り部屋へと転がり込んだ。

相手の背中を取る。俺の虚を付いた行動に振り返つたところを横つ腹に一閃。

相手を殺るには少々浅かつた。しかし、相手の猛攻を止める一撃を加えた。

自分にも敵にも死角の無い場所に立つた。

この地下室は予想より幅が広かつた。影と声のみで確認した人数より三人多かつた。

中央で何かを胸に抱きながら祈る女性、おそらく魔力を何かの魔具に溜めているのだろう。その背中を守るように立つオルセン・ハシュカレ。

そして、壁際に立つ三人。

シーベル工人はカイナ人を見たらニンジャと思う偏見があるらしいが、カイナ人の血を半分引く俺ですら、先程の顔傷の男を含めてこいつらがニンジャであると思った。気配の消し方が出来ている。

そして、そのニンジャ共は侵入者である俺を排除しにかかる。しかし、剣術はお粗末だ。先程殺り合ったニンジャ男に比べて剣速、太刀運び、何に関しても劣っている。その三人が血を流しながら床に倒れるのに大した時間はかからなかつた。

俺の後ろに腹を斬られたばかりの顔傷の男が立ち上がり、カタナを振るう。一撃目は避ける。一撃目を利用した切り返し。その鋭い刃をカタナで受ける。急に顔傷が俺から一度距離を取る。

俺の腹部を貫く鎗先。オルセン・ハシュカレは一步も動いてなく手に持つ鎗の間合いの外だった。俺がその鎗が魔鎗だということを失念していなければ。

「それで、君は何者何だい？」

俺から引き抜かれる鎗。足の力が抜けて地面に倒れ落ちる。このままではカタナを振るえそうに無い。

ここで俺は終わるのか？いや、諦めまい！

「俺の名前は、リセス・ナイスト。あなたの宿敵の息子だ」

氣付かれないように魔力を練る。何としても話を伸ばす。腰のセレミスキーリーに手を伸ばす。

「ナイスト…。貴様、ライシス・ナイストの息子か…」

七つのセレミスキーリー。今は、確認している暇も氣力も無い。どの世界の鍵かは賭けだ。頼むからファイフレカクーレであつてくれ。

「貴様の親父は俺の一番嫌いな人間だったよ。今は、ジンサ・レッドラーートが一番嫌いだがね。あのクソ男は俺の二ーセ様を！」

ジンさんをクソ男呼ばわりとは随分人を見る目が無いことだ。こんなことを考えるとは、思考能力が落ちて来ているようだ。

「まあ良い。それも今日で終わりだ。この世界は変わる。魔王の降臨だ。クレサイダのようなミスはやらない。ヘブヘルから最強で凶悪なる者を喚ぶ。君も見ていくが良い。ライシス・ナイストが如何に無駄な時間稼ぎをしただけだったかを！」

そんな馬鹿な話があるか！セレミスキーリーを用いずにヘブヘルに繋げられる筈は無い。

しかし、その定説は打ち破られる。祈り続けていた女性の前に現れた召喚門。

門が開くと同時に召喚された青年。外見はこの世界の人間に似ている。大きな違いは赤毛に赤い瞳と言うこの世界ではまず見ない髪と目、背中から生える漆黒の羽がある。

「「」は異界なのか？私は召喚されたとこ「」とか？」

すでに何日も着替えて無いような服装。髪の手入れもしないだらう顔。しかし、その風貌とは異なる何かの脅威をこの男は持つていた。

「私の名はオルセン・ハシュカレです。ここはクーレ。陛下にこの世界を支配して頂きたくお喚び申し立てました。対価として私は貴方様にこの世界を捧げます」

オルセン・ハシュカレが頭を下げる。
その青年はその言葉を聞き笑った。

「あの魔王に負け、牢に幽閉されたこの我が陛下とはな。面白い。まずはこの世界を落としてみるとしよう。フフフ、久しぶりに暴れられるな」

危険だ。こいつらを何とか止めなければいけない。世界が危ない。悔しい。俺にこいつらを止める手が無いことが。父上のような強さがあれば…。

だから、父上から受け継いだこのセレミスキーに最後の希望を託す。

どうか、対価は身体の一部だらうが命だらうが何でも良い。この世界の為にアソツを倒せる奴を喚んでくれ！
腕に力を込める。俺の真横に召喚門が出現する。

「何、貴様セレミスキーを持っていたのか！」

気が付くのが遅いな。すでに門は開く。
出てこい。この世界を救う救世主。

「私、もしかして君に召喚されちゃた?」

まだ成長途中だらう女性の声が響く。俺を見つめる赤い瞳。華奢な体つきに白い翼がゆっくり上下している。愛くるしく笑う笑顔が戦いを知らない子供に見える。歳は俺と同じくらいか?

失敗したのか?いや、人を外見で判断してはいけない。これでも凄い戦闘能力を持つているのかも知れない。腰に帯剣している。凄い剣士かもしれない。

「どうして、今喚んだの?」

とても悲しそうな目で俺を見てくる。その彼女の悲痛な瞳に俺は罪悪感を覚える。

「すまない。手を貸してくれ!」

そして、頷くと彼女は手を俺の腹部に当てる。傷が塞がる。速い。この世界の医術士ではこんなに速い治療は無理だ。こいつ、凄い医術士だ。同じくらい高度な魔法を扱えるのかもしれない。

直ぐに立ち上がり力タナを向ける。敵はこの被召喚者を黙つて観察していくくれたようだ。

「フォローを頼む

「うん……」

とても元気の無い彼女を横目で見る。もしかしたら、この少女には、いきなり異世界に喚ばれて戦えは酷なのかもしれない。
しかし、今はそんな同情を懸けてはいられない。

何かとても辛いのだろうが彼女が顔を俯き加減に今にも泣きそうに眼を潤めて俺に向かって言った。

「夕ご飯の前だったのにイ～。仕事が終わって、やつと楽しみにしてた夕ご飯だったのにイ～。何で今なの～？」

彼女のお腹の虫が騒ぐ。

俺は召喚する相手と時間をとても間違えてしまつたらしい。

魔王の降臨 やして彼女と出逢つ（後編）

物語の中核を担うヒロインが格好良く登場、とほほせません。

それが天見酒クオリティです。

腹が減るつゝ生きている中で一番の苦行ですよ。

魔王 vs 魔王

「後で夕飯を死ぬほど食わせてやるから手を貸せ」

これが対価ならば安い上がりだ。実力は未知数だが俺一人よりはマシだろう。

「死ぬほどは食べたくないよ。生きてるほど食べたい！」

今はそんなおふざけはいらない。

何故か俺たちの行動を見守る敵がいる。さすがに無事に帰してくれはしないだろうが。

「今は敵が前にいる！前を見ろ！」

いきなり喚び出して手伝えと言つておきながら、少し強く言い過ぎたか？無言になる彼女の驚愕の顔。そして、彼女は剣を抜いた。

「久しぶりだな。魔王イルサテカ」

俺にやられた奴からカタナを拾い上げこちらへ向ける赤髪の男。しかし、あいつが魔王ではなく、こいつが魔王なのか？

「誰がそいつを喚んだの？」

声、雰囲気が冷淡へ豹変していた。彼女から伝わる重い感覚。俺の顔に流れる冷や汗。俺は危険な奴を喚んでしまったかも知れん。

赤髪の男曰く、魔王イルサテカ。先程までの威厳の欠片も無い姿は

今は無い。本当にこいつは魔王なのか？

「そいつは……カイムはとても危険な奴なんだよ。何で喚んだの？だから牢に入れてたんだよ。誰が喚んだの？」

俺の隣から来る強い圧迫感。彼女はかなり頭に来ているらしい。

「だから、我を殺しておけと言ったのだ。甘迺^{あまね}ぎる自分の自分を悔いるのだな、イルサ」

どうやら因縁深き仲と言つことか。少なくともカイムという男の危険性は分かつた。

「素直に牢に帰る気は……無いよね、カイム？」

「フフフ、我がそんな柔順な人間に思えるのか。せっかく出れたのだと自由に暴れさせてもらいたいな」

彼女の翼が一回羽ばたく。

「…分かつたよ」

その言葉が開戦の合図だった。

イルサテガがカイムへと一気に距離を詰める。カイムも同じく突き進む。一人の刃が合わさる。

「ウウ、クウー！」

「やはり、純粹な筋力では我が上か」

鍔迫り合いに対し力む呻くイルサに、カイムは涼しい顔を見せている。一人の顔が近付いて漸く分かつた。

この二人は似ている。ヘブルでは在り来たりかもしけないが赤髪と赤い瞳、そして端整な顔立ちが何處と無く似ている。

力の均衡が解かれる。カイムが彼女の腹部へ蹴りを入れる。彼女が俺の側へと床を跳ねながら転がった。

呆けてこの二人の関係について考えている場合では無かつた。

素早くカタナを鞘へ収め、右足を前に出し、腰を少し落とす。

彼女へ止めを差そうとするカイムを見る。

一撃必殺。これを使うしかない。鞘走りの勢いを利用した最高速度と最高威力を誇る刀技。必殺。しかし、外せば出来るその隙は大きい。母上に下手に使うなと言われた手段。

タイミングを外すなよ、リセス・ネイスト。

「居合いだな」

横から急に現れたカタナ。それを防ぐのに俺のカタナは使われる。傷顔の男。くそ、邪魔だ。カイムを倒せるだろうイルサを失う訳にはいかんというのに…

向かって来るカイム。痛みに咳き込みながらイルサが手のひらから光の玉を売った。

止まるカイムと爆発。その隙に傷顔の男に鞘を叩き込んでやる。

その近距離からの魔法にカイムがやられてくれば良かつた。魔法防壁か、あの高威力でピンピンしてやがる。

イルサの魔法は別の効果を産んだ。

カイムの頭上から落ちる砂と石くれ。この地下室が軋みをあげる。こんなところで高威力の魔法を使つた結果だ。

「チヨ、何するのオー！ カイムー！」

うるさい。お前の馬鹿のせいだ。樽担ぎされ騒ぐ彼女を無視して階段をかけ上る。後ろからは倒壊していく地下室の音。彼女の翼が中々触り心地が良かつたのは、この場では関係無いと割り切ることにする。

崩れる可能性のあるバークス邸から外へ出たといひで彼女を下ろす。あいつらは出て来ない。

「…生き埋めか？」

「怪我をしたのか？」

本当に生き埋めなのだろうか？ これで終わりなのだろうか。

イルサは隣で自分の身体を隈無く手で確認している。

「お父様がね、男の人に余り密着しちゃうと身体が腐っちゃうから、男の人には余り触れたらいけないって言つてた。ねえ、私の身体腐つて無いよね？」

それはそのお父様とジンさんを会わしてみたいものだな。

これから、どうするべきか？ 増援を待つてからあいつらの生死を確

認するか？

バークス邸を眺めながら煙草を一本取り出し口に加える。

「何それ、食べ物？」

興味津々な彼女の言葉に張り詰めていた俺の気が緩む。こいつの住む世界には煙草は存在しないらしいな。

この楽しみを邪魔されたくは無い。彼女の顔を見ながら火を付ける。

轟音。バークス邸に炎が上がり、崩壊が始まる。

「凄い！その白い棒は魔道具なの！」

彼女の勘違い通りならば良かつた。しかし、これは俺や煙草の為す術では無い。

炎の中から現れたカイム。その後ろには、ハシュカレと顔傷の男、謎の女。そう簡単にくたばる奴等では無かつたか。

俺はこいつらに勝てるのか？

魔王 v/s 魔王 （後書き）

書けない！戦闘描写が全く上手く書けないよお～！

番外編 幕開けに間に合わなかつた大名優

ここに来るのは20年ぶりか。あの人とあの時、訪れて以来は來ていなかつた。

僕の大きく変えた。あの時からもう20年が経つたんだ。本当に大きく変わつた。

このナールスエンドに初めて訪れた時に、また僕が騎士団に入り、まさか一隊を任される隊長になるとは思つてもみなかつた。一人で感慨に耽つてはいけないな。僕は今、隊長だ。

「レクス君、宿を探してくれ。僕はリセスを探して来るよ」

この時間ならば彼も宿で休んでいるかもしれない。いや、彼の真面目な性格からすると勝手に動いているかもしれない。頼むから、無理をしてないでくれよ。

ルクが僕の手を掴んだ。僕が上から覗くと顔色が悪い。ジン隊長に無断で付いてきたとはいえ、もう少し彼女の足にペースを合わせるべきだつただろうか？

ルクは街中の方を指で示す。

「あつちで何か大きな魔力を持った動くモノが一つあります。この世界の生物だとは思えませんよ」

彼女が真剣な面持ちで指を差す方向で異変は起きた。

爆発音。そして、暗い空を照らす炎。

「レクス、テド、周辺住民の避難の誘導と救護を…」

「「ハイ、隊長!」」

うちの医術隊士と銃隊士は直ぐに動き出した。

「ミシャとルートは僕の援護を頼む。行くぞ…」

「私はあー？」

「ルクはここで待機！君に怪我をさせたらジン隊長に殺される」

走り出した僕の命令にルクが素直に従ってくれるとは全く予想していない、予想したように彼女は僕に後れて走っている。

今はルクに構つてゐる場合では無い。頼むから怪我をしないでね。君に怪我をさせたら、ジン隊長どころか二ーセさんに顔向け出来ない。

僕の頭に巡る二人の人名。

オルセン・ハシュカレ、何をしたんですか、貴方は！

リセス・ネイスト、頼むから無事でいてくれよ！

僕らが目指す場所に彼は居るだろ？ 確信を持つてしまつ。この騒動の中心にいる。

この場面に合わない苦笑いが溢れた。

大舞台の中央へ立つてしまふ主役。
それがあの人から受け継いだりセス・ネイストの宿命のように感じ
た。

勇者、再来す

炎を背景に地上に現れた4人の影。絶望を見た。

「イルサテカよ。中々頭を使うようになつたではないか。しかし、あんなことで我が倒せると？」

ヘブル人は化け物なのか？

「思つてないよ。そんなこと」

剣を構えられる彼女が羨ましい。

力タナに触る右手も震えている。力タナを握れない。

闘えない。

逃げたい。

怖いんだ。俺は。

こんな奴等に無謀に立ち向かえつて言うのか。

無理だ。俺には無理だ！

父上に憧れた。魔王に勇敢に立ち向かう父上。ライシス・ネイスト、勇敢なる父を持つその息子はとんでも腰抜けだ。

身体だけ強くなつたつもりだった。こんなに怖い相手と会つたことが無かつた。

「無理しなくて良いよ。付き合わせて『ごめんね』

イルサの言葉。俺は怯えを隠しきれてさえいなかつた。

イルサが光の弾丸を放つ。カイムの前でそれは弾かれる。

先程のイルサの物言いに、カタナが握れた。

その要因は廃棄すべきちっぽけなプライドだ。

無理をするなど。あいつの相手で手一杯の癖に。一人でやらせられるか！

付き合わせて悪い。付き合わせたのは俺の方だ。

悪いが俺のプライドに反する。

女一人で戦わせられるかー破れかぶれでもってやるー。

俺はどうやら父上のような崇高な精神は持ち合わせていいないらしい。

カイムが此方へ来る。

速い。だが、母上のカタナよりは遅いー身構えるイルサの前に俺は出る。

一撃を繰り出す。

反応した。カイムのカタナと合われる。

それで良い。俺では無理でも盾ぐらになつてやる。

イルサのカイムを貫く風の矢。カイムが僅かな傷を追いながらも俺と離れる。

「どうだ！」

何を誇つているんだ、俺は。かすり傷を愈えただけだ。しかも、俺ではなくイルサの功績だ。

俺一人では何も出来なかつた。イルサが居たから出来ただけだ。なのに、何故俺はこんなに気分が良いんだ。

「フム、やつてくれるな。ハシュカレとやら手を貸せ」

顔傷は俺の一撃による出血が徐々に効いているようで戦線不可能だ。カイムを召喚した謎の女に抱えられている。

魔鎧工レウクイは侮れない。一対一か、不利には変わらないが何とかしなくてはな。父上のように世界を守る為に！

「イルサ、やるぞー！」

「うんー！」

心強い、隣にこいつが居るだけで。

の一人でも強い父上が、アレンが居なければ俺はダメダメだと言つていた気持ちが謙遜では無いと今は分かる。どんなに自分が強くても隣にこいつが居ないと心が弱くなる。

そういう事だろ、父上！

カイムが仕掛けて来る。イルサが迎え討とうとする。イルサへと魔鎗が伸びる。俺はハシュカレの攻撃を防ぐ為に動き出す。

「そこの子お、退いてえー」

聞き覚えのある間を抜けさせる独特な声だ。イルサが身を翻す。カイムが声の方を見た。

カイムの足を貫く銃弾。

カイムが危機を感じ空へとその翼で逃げようとする。

俺の横を通り抜ける風に靡く金の髪。

カイムを襲う輝く剣、魔剣ペグレシャン。

カイムは交わした。左翼を犠牲にして。

「カイム様！」

その女がカイムの側に寄る。ハシュカレと傷顔も集まる。

「本当にやつてくれる…。大丈夫だ。この程度そのうち治る

立場が逆転した。勇者が来たのならば負ける訳がない。

「全員大人しくしてください」

「また貴様か。また邪魔をするかアレン・レイフォート！」

ハシュカレが怒鳴る。

その時、謎の女の手から光が現れる。

そして、その女は消えた。顔傷の男、ハシュカレ、カイムも。残ったバークス邸の瓦礫。

「カイム——！」

この女の叫びだった。

「ルク、近くに居る？」

「居ませんよおー。転移魔法ですかねえー」

樂に言ってくれる。転移魔法なんて簡単に出来る代物では無いだろう。成功例は数件しか無いぞ。

アレンさんがそんなことを考え込む俺を見た。この人では見たことの無い弱々しい顔だった。

「リセス。勝手に動くな。心配したよ」

心配をおかけしながら、申し訳なく思うより嬉しく思つてしまつた。

「それでえー、そちらの異常に魔力の高い翼の生えた子はリセ君の『レムー？』

小指を立てながら如何にも愉しそうに聞くルク・レッドラー。

「彼女は危険では無いよね？」

アレンさんに彼女を召喚した経緯を説明する。

「危険かどうかは計りかねています。しかし、無闇に攻撃をしてくるような奴では無いです」

イルサには悪いと思うがかなり強力な力を持っているのは確かだ。

そういえば、先程からイルサが静かだ。イルサは地面に仰向けに倒れていた。

「おい！イルサ、どうした！」

まさか、何らかの怪我を負っていたのか？

「死ぬほどでも良いから御飯食べさせてえー」

この涙声が周囲の人々の警戒心を根引き消した。

魔王の語る事情

「これは、何？」

何故にスプーンとフォークを知らんのだ。おい、それは食い物じゃない。ええい、飯を手で食うな！ バターはそのまま食うものじゃない。パンに付けるよ。いや、パンにフォークは使わんぞ。それは手で食つて良いんだ。

俺が飯を食べる暇が無い。

「リセス君、何かとつても楽しそうだね」

「ヤツクルクほどでは無い。今まで弟妹が欲しいといつ願望が合つたから少しは楽しく感じてしまつが…」

「少しはお前が教える」

イルサの食事マナーはあまりよろしいものでは無かった。といづりもイルサにとつてここには見た」とも無いものが多くあるといふことか。

「それでイルサちゃん。そろそろ、君のことについて聞いても良いかな？」

今まで俺たちの同行を温かく見守っていたアレンさんが、ステーキにかぶりつき始めたイルサに聞く。

「良じよー」

イルサは腹が満たされてきて大分ご機嫌なようだ。

「君はヘブヘルの出身でリセス君に召喚された。間違い無いよね？」

イルサはステーキを頬張りながら頷く。

「イルサちゃんはヘブヘルで何をしていたのかな？」

「魔王」

イルサは一言で答える。また、隣のレクス兄さんがナイフで丁寧に切り分けたステーキヘフォークを刺す。レクス兄さんはまるで妹を見守るようにステーキを頬張るイルサを見ている。見られているイルサ、自称魔王様はとてもご満悦だ。

「それなら、シールテカさんはどうしたんだい？僕はあの人に会つたことがあるなんだけど？」

アレンさんと父上の魔王退治の話だ！是非、聞きたい！
俺の胸は高鳴る。

しかし、イルサは…。

「…お父様は殺された。カイムに…。お母様も」

彼女の一筋流れる涙が俺の昂つた気を鎮める。申し訳無い気がしてきた。

「カイムは危険。止めなくちゃいけない。リセス、私は帰らないよ。

」

それだけ言つとフォークを動かし出すイルサ。泣きながらステーキをもの凄い速さで平らげる。

ミシャさんが自分のステーキを差し出す。

「イルサちゃん、ゆっくり食べてね？お姉さんが奢つてあげるから一杯食べて良いよ！」

ミシャさんには分かるのだが。親を失う気持ちが…。

「そうか…。君のお父様はとても良い人だったよ。とても奥さんと君を愛していたよね？」

涙で顔を崩しながらもステーキを食べながら一つ頷くイルサ。

勇者が魔王をとても良い人と評価するほど、その魔王は善人なのか？

「それでどうしますう〜？」

ルクはこの重い空気を恐れることを知らないのか。

「カイムを見つけないといけない。居所は全く分からない。取り敢えずシーベルエンスに戻つてジン隊長の指示を仰ぐよ」

アレンさんの判断に賛成だ。一人を除いて。

「ええー！嫌ですよオー。お父様に捕まつたらシーベルエンスから出れなくなっちゃいますよ〜」

ルクはジンさんに首に紐でも付けて貰え。

「シーベルエンス？ それどこ？ 面白いものある？ 美味しいものはある？」

先程までの落ち込みようは何処へ行つたやら、魔王様はこの世界に興味津々な御様子だ。

こいつは本当に魔王かと思えてしまつがまあ良こそ。凶悪な魔王より扱い易い。

「おい、イルサ。ピーマンを残すな

子供か、お前は。いや、こいつは子供か。

「だつて、これ苦いんだもん」

「そのピーマンは農家の人が魂を込めて育て、料理人が魂を込めて調理したものだ。しつかり食べろ！」

「リセ君、ライシスおじ様みたいー」

それの何が悪い。父上の言葉が正しい。

「これに人の魂が…。これの為にその人達が死んじゃつたんだ。分かつたあ。食べるうー」

いや、死んでは無いだろー、だから泣くな。

魔王は涙脆くても勤まるのだろうか。

俺の魔王像は今日から、長き旅を共にするこ^レにつに徹底的に破壊されていくことになる。

魔王の語る事情（後書き）

ダメだ。シリアルスが書けない。

イルサ、リセスよ。

なぜ、お前たちはそんなに素晴らしいボケとシラコバコのコハラク
内変換されてしまうのだ。

まあ、序盤は気楽にコメドี้多めでこきましょり。

ついでに。

この世界を代表する貿易港。世界中から様々な物品が集まり、世界中から様々な人々が集まる地。

往来に溢れかえる人々が喧騒を極めている。

そして、一人で喧騒を極めるこいつ。

「あれ！あれは何？」

ヘブルでは見たことの無い世界中の物が溢れるこの都市はイルサに飽くことの無い好奇心を抱いた。

この好奇心に支配されたイルサを見て、アレンさんが宿や船の手配を済ませてくれるから街を見て来なと勧めた。

俺もイルサを一人で解き放す訳にいかず付き合つこととなつた。

おい、勝手にそっちに行くな。怪しい人に関わるんじゃない。だから立つ行動をするな！

結果、俺とレクス兄さんはこの無尽蔵に動き回る女が腹を鳴らすまで振り回されることになった。

「リセスは食べないの？」

がつづくイルサの前にはいくつかの皿が並んでいる。俺の前には口

「ヒー一杯。疲れて食つ氣にもならない。」

「お疲れ様、リセス」

俺の向かいの席で笑つて俺たちを眺めているレクス兄さん。

「レクス兄さんもな」

本当に俺たちは親切すぎる。少しは労れ人の金で食いまくるイルサ。

「リセスとレクスさんは兄弟なの？」

そう言えばまだ話してなかつたな。何せルクがイルサに質問するか、イルサの興味を満たすのに忙しかつたからな。

「従兄弟ですよ。母の兄がリセスのお父さんです。まあ、一緒に生活していましたから本当の兄弟みたいなものですけどね」

俺もこの従兄弟を本当の兄として慕つてゐる。昔は一人でつるんで色々悪さをしては、お祖母様や母上、叔母上に散々叱られたものだ。その中でお祖母様が一番怖かつた。

「良いな、良いお兄ちやんが居て……」

「お前には兄弟は居ないのか？」

この何気なく発したこの質問を後悔した。イルサが忙しなく動かしていた食器が止まる。

「双子のお兄ちやんが居たよ。今は…居ない」

また、こいつに聞いてはいけない事を聞いてしまったか。

「ちょっと待つてくれ！もしかしてその双子の兄つて」

レクス兄さんが慌てて言おうとした言葉は途切れる。

甲高い悲鳴。

何事かが起きた。

まるで、津波のように動く人波。

人垣越しに現れた魔熊。 ガンデアグリズリー。

「うわあ、熊さんまで観光に来るんだ。凄いね、ターシーって！」

「馬鹿言えーそんな訳あるか。止めるぞ！」

寒冷地に生息するはずのこの魔物がこんなとこに出現する訳がない。

誰かが連れて来なければ来るはずが無いんだ。

突然の来訪者はガンデアベアーだけでは無かった。
魔狼の群れまで居やがる。

「うわあ、狼さんまで観光に…」

「少し黙つてる」

そのお花畠思考は何処から来るんだ。

統率されているだと。ただ、人を襲っているだけでは無い。攻撃を仕掛けて来る人間を中心に襲っているのか？

まあ、良い。ならば、俺たちが的になつてやる。

俺が敵陣に深く斬り込む。イルサがやつと事態を重く見出したのか俺に続いて来るのが分かる。

まずはガンデアベアーからだ。俺は中心に切り進む。魔狼の牙と振り下ろされるその豪腕を交わす。

俺の刃がその魔熊に深く突き刺した。

その時、急に俺へ飛び掛かる魔狼。何だ、この動きは…こいつは魔狼らしくない。

そいつをレクス兄さんの魔法が貫いた。
助かったよ、兄さん。

周囲を見る。イルサの魔法で魔狼は全滅していた。

これで終わりか。

しかし、俺の足元で動く気配。

先程のおかしな動きをした魔狼。

「リセスー離れて！」

イルサの声が遅ければ危なかつた。

俺の頭上に降り注いだ氷の刃。

「魔狼が魔法を使うだと！」

有り得ない。有り得なすぎる。

俺の隣へとやつて来たイルサはその理解出来ない事象に答えた。

「あの狼さんはシャプトが乗つ取つてる」

「あのヘブヘルの魔力構成体生物か？魔法が強いとは聞いたことがあつたが生物の身体を乗つ取るとは聞いたことが無いぞ」

この俺の疑問に答えたのは魔狼の背中から黒い物質。その蠢く生物は硬そうにも見えて、軟らかそうにも見える。

「この世界の生物がこのように軟弱過ぎて取り付く価値があまり無いだけですよ。ヘブヘルでは様々な生物に取り付けますよ」

魔狼から完全に分離したシャプト。

「お久しぶりですね、イルサテカ様。魔王の証を頂戴しにヘブヘルより参りました」

そのシャプトは、イルサにはつきりと敵意表明をした。

「これはとっても大変だなあ……」

そのイルサのぼやきは虚しく響いた。

魔力構成体生物シャプト、そして奸雄再び現れる 2

魔力構成体生物シャプト。その脅威は計り知れない。あの大奸雄クレサイダを始めとして、異界ヘブヘルから召喚されたこの生物の犠牲になつたこの世界の生物が多い。

魔法のプロ。しかも、その相手の十八番である魔法でしか効果あるダメージを「えられない」と言われる。俺が相手にするには厄介過ぎる。

だが、こちらには、同世界出身の魔王様がいる。何とかなるか？

「ウニアだよね？」

「そうでございます。イルサテカ様」

異様な物体であるシャプトに平然と話し掛けるイルサという異様な光景。

シャプトでの悪名高きクレサイダで無いだけましなのだろうか。

「よくやつた。ウニロイダよ」

「カイム！」

イルサが叫ぶ。翼の羽音。空に羽ばたく男。俺たちはまんまと炎り出された訳か。

「さて、イルサよ。魔王の証を渡して貰おうか？」

「絶対に嫌だ！」

魔王の証。名前からして相当重要なものらしいな。カイムに渡す訳にはいかないな。

「我が儘を言わずに状況を見ろ。ウニロイダと私を一人で倒すとうのか？」

俺は戦力として頭数に入らないようだ。舐めてくれたものだ。しかしカイムの言っていることは正しい。アレンさんが来るまで時間稼がなくてはいけない。

セレミスキーを使おう。出し惜しみしている場合ではない。
「使わせんよ」

「リセス！」

カイムが手をこちらに向けた。波動。それだけで俺は後ろへ飛ばされた。数個のセレミスキーが地面に散らばる。くそ、フィフレの鍵が！

「さあ、どうする？あのペグレシャンを持つ男はハシュカレが足を止めている。しまじく来んよ」

万事休すか。

この状況に対してもルサは剣を抜いた。全く馬鹿だな。だが、俺も馬鹿な方だ。唯一、手に残るはヘブヘルの鍵。

「レクス兄さん。時間を稼いでくれ」

俺の安否の確認に近付いて来たレクス兄さんに耳打ちする。

カイムがイルサに剣撃を繰り出す。カイムが一旦引くとすかさずにウニロイダの氷魔法が飛ぶ。それを交わすイルサ。イルサもう少ししだけ踏ん張れ。

「ウニロー！ イルサは我がやる。そこの小僧の相手をしろ！ 何か喚び出すぞ！」

気付いたか。俺に向けたウニロの魔法。氷の刃が複数放たれた。レクス兄さんが俺の前に立ち、魔法防壁で守ってくれた。魔法防壁を突き破つた幾つかの氷の刃がレクス兄さんの身体を貫く。それは俺には一つも当たることは無かった。

早くしろ！ 次はレクス兄さんに防ぐ手段はない。イルサの味方ならば誰でも良い。対価も問わない。

現れる召喚門。開け！

頭上には氷の巨塊。日の光を遮るその影は、レクス兄さんだけでなく俺もペシャンコを意味する。

落ちてくる冷たき物体。

俺たちを濡らす冷雨。

「全くさあー。僕は忙しくて苛々してるんだよ。そんな最中にいきなり喚び出されてさあ、殺意のある魔法で歓迎かい？」

召喚門から現れし、男は不機嫌そうに語つた。

「あんまり僕を怒らせると、この世界、滅ぼすよー。」

蝙蝠の翼手を黒き長髪の男は、その背中越しに後ろの俺へ吼えた。

「クレサイダ！」

イルサが歓喜の声をあげる。

二度に渡りこの世界の歴史にその名を轟かせた大悪漢は再びこの世界に現れた。

驕り立つ貿易都市、そして奸雄再び現れる 2（後書き）

皆様、大変長らく御待たせしました！

遂に待ちに待つたこの男の登場です！
えつ、誰も待つてない？

ヘブヘルよりパワーアップして帰つて来たスーパークレサイダが猛威を奮う！

『クレサイダの世界征服記』

次話“伝説のスーパークレサイダ登場！”

乞つゝ期待を！

「次回も見てくれないと世界を滅ぼしちやうぞ！」

（この番組は天見酒の脳内のみで放送されます）

うん、天見酒一人がテンションだだ上がりだね。

驕き立つ貿易都市、そして奸雄再び現れる 3

かつて、残虐非道の行いでこの世界に悪名を響かせた男はイルサを見て言った。

「姫！ やはり異界にいらっしゃたのですか！ お怪我はありませんでしたか？ 野蛮なクーレ人に何かされませんでしたか？ ああー！ お召し物がそんなにも汚れて！」

この男が本当に父上と死闘を繰り広げたあのクレサイダなのだろうか。いや、違うと言つて欲しい。

「姫を拐つてくれるとはやつてくれるな、クーレ人共が！ 姫、この世界をぶつ壊すご命令をこのクレサイダに下さいませ。必ずやクーレ人どもを一人残さずに…」

「絶対ダメ！ 今はカイム！」

クレサイダの野望を制してイルサが様子を見ていたカイムを指指す。

「クレサイダ、久しぶりだな」

様子を窺つていたカイムが丁寧にも挨拶をする。

「カイムか…。僕が喚ばれた意味が分かつたよ」

クレサイダの雰囲気が急に変わる。この男にとつてカイムはどういう存在なのだろうか。

「クレサイダよ。我と共に来ないか？共にお前に『田舎を『えた』この世界を滅ぼさうではないか。お前もイルサの魔王の証を持たせて置くのは勿体無いと思わんか？」

カイムの勧誘。確かにクレサイダはこの世界を滅ぼす理由は十分にあるだろ？。

まずいな、ここにここまで敵に回ってしまったなら勝ち目は無い。セレミスキーをもう一度使う余裕も無い。

「カイム、僕は別にどうでも良いのさ、こんな世界。シールテカ様亡き後に遺されたイルサテカ様を守ること。それが僕の全てなんだよ」

だからとクレサイダは続けて言い放つ。

「姫を付け狙う輩は全力で始末させてもらひよー！」

クレサイダの手から放たれる火球。カイムが避けることによつて後ろの商店に炎が立ち上る。こいつは半端なく強い。

「フム、流石の忠誠心だな。此方の不利か…。ウニ一口、一旦退くぞ」「させるとと思つてるの？」

カイムがウニ口の近くへと舞い降り、そこへクレサイダの炎、遅れてイルサの光球が飛ぶ。発生した強風に煽られて辺りに砂塵が舞つた。

「チツ、逃げられたか」

クレサイダが結果を語り舌打ちをする。確かにまた逃がしたのは苦だが、今は逃げてくれて俺としては大変ありがたい。

「イルサ！ レクス兄さんを治療してくれ！」

「あつ、うん」

イルサが飛んでやつて来る。

「なつ、なあにイー！ そこガキ！ 姉を呼び捨てにー！」

クレサイダの大激怒。俺にイルサを様付けにしりと？

「クレサイダ。リセスは友達だから良いの」

イルサはレクス兄さんに手を当てながら平然と言つ。俺は魔王に友達と認識されていたらしい。

「と、友達！ 姉、ダメです。姉に男友達はまだ早いです！ おい、リセスとか言つガキ！ 直ぐに姉から離れる。今後一切付きまとつくな！」

イルサの方がヘブヘルに帰らず俺たちに付いて来ているんだ。その言い種は気に食わん。

「俺は別にイルサに付きまとつては…。イルサ、何をしてる？」

レクス兄さんの治療を終えたイルサは俺の右腕を両手で引っ張る。捨てられた子猫のような眼を向けて俺に言つ。

「リセス、どうか行かないよね？側に居てくれるよね？」

「ビーにも行かん…」

その至近距離からの視線に俺は参ってしまった。

「うふ！ ありがとう、リセス！」

だから手を離せ。後、無邪気に笑うな。少し照れるだろ。ハハハ…、リセス君とやら、後で姫抜きで男同士の話し合いをじっくりしようとか？

急に馴れ馴れしくなり、俺の肩に手を置きにつっこり笑うクレサイダ。クツ、これが世界を滅亡に追い込んだ邪悪なる強圧感か？ どんな誤解をしているか分からんがその説いは絶対に断る。お前には敵いそうに無い。色んな意味でだ。

「リセス君、レクス、無事かい？」

ハシュカレも逃げたのか、アレンさんが駆けつけて来た。

「アレン・レイフォートか！あのチビ介がでかくなっちゃって。何で君が居るのさ。姫にちゃんと付けとは相変わらず良い度胸だねえ」

浮かない顔をしてアレンさんが立ち止まる。しまった。かつてのこの宿敵同士が出会い。頼むから流血沙汰はやめてくれ。

「何処かでお会いしましたか？見たところイルサちゃんと同族のようですが」

アレンさんに見覚えは無いようだ。

「隊長。この人はクレサイダだそうです」

レクス兄さんが報告をする。アレンの眼は大きく開かれた。いつかはバレるだろうが今は言つべきで無いのではないか。不安が過る。

「クレサイダ…変わったね、色々と。特に身体がうねうねじやなくなったんだね」

「これだからクーレは。僕はシャフトだよ。この身体を乗つ取つたに決まってるじゃないか。最も此方の世界じゃあ微弱な生物しか居ないから願い下げだけどね」

アレンさんは旧友に話し掛ける言い方だった。クレサイダも特に敵意は無いらしい。

「とにかくここは田立つから別の場所に行こう

危険が去り、人が集まって来た。注目的になるのはクレサイダも避けたいのか素直に俺たちに付いてきた。イルサやクレサイダにその田立つ翼を上着で隠してももらい移動する。

俺は勇者とその宿敵の再会にしては緊張感が無く拍子抜けだ。

驛先立つ貿易都市、そして奸雄再び現れる 3（後書き）

昨日更新出来なかつた分今日は一話更新するやー！

皆様、ご感想を下さりありがとうございます。

お陰様で天見酒はやる気がアップしております。

船に揺られる想い達は 1

「のままターシーに残るという行為が及ぼす被害を考慮した上で、騎士団海隊の軍隊船にてターシーを立つ。

元々二十人の乗組隊員しか居ないこの船で、夕食時にはまだ早いこの時間帯で貸切状態となる食堂室。

俺やアレンさんが仕切る第3遊撃隊の面々は、「機嫌なイルサが一人で夕食に舌鼓をするのを無視して、専らクレサイダにカイムの召喚について話す。

「厄介だねえ。もう一度聞くけどオシリスの鍵……セレミスキーハリセスが全部持ってるんだよね？」

クレサイダの問い掛けに慎重に頷く。「にせレミスキーホルマ」
せる訳にはいかない。

「別に取り上げたりしないよ。しかし、厄介だねえ」

俺のよそよそしい仕草を読んで、また厄介と繰り返す。

「何がそんなに厄介なのか教えてくれないですか？」

勇者が奸雄に腰を低くして教えを乞ひ。なんともおかしな光景だ。
アレンさんの人の良さが滲み出ている。

「少しほ自分で考えなよ」

それに対してクレサイダは意地が悪い。

「クレサイダ。 お願い、教えて」

「はい、姫の頼みとあらば！」

クレサイダはイルサを使えば容易く操れるな…。奸雄の最大の弱点を得たり。魔王と一緒にの方が安全とはこれ如何に。

「君たちに分かりやすく言つて何でリンセン・ナールスは魔王を召喚出来たのかだよ」

何気なく言つたクレサイダの言葉に訳が分からなくなつた一瞬。

「待て、リンセン・ナールスは魔王を送り還したの間違いだろ？」

すぐにその言葉の意味を無理に飲み込み訂正する。

「ダメー。まだそういうことになつてるの？アレン、どうなつてるの？」

クレサイダに話を振られたアレンさん。俯くその顔はクレサイダの話を肯定していた。

信じられなかつた。でも、父上の語つた“愚かで偉大なる英雄”的

リンセン・ナールスに対する解釈が、今やつと理解出来た気がした。

「とにかく今はナールスさんが魔王を召喚した方法だよねえ～？」

ルクが俺の一大衝撃を簡単に片付けてくれる。

「どうでも良いけど。ルク・レッドラートって言つたっけ？出来ればその顔でその喋り方止めてくれる？あの女を思い出して嫌なんだけど」

「ウフフ、女の子になんてことを～。これが私の母から受け継いだチャーミングポイント何ですか～」

俺としてはあの聖女様のようなおしとやかな性格も受け継いで欲しかった。

「それで、ナールスの魔王を召喚した方法は何ですか？」

レクス兄さんが話の脱線を止めた。クレサイダも神妙な顔付きになる。

「それは言わないよ。前回でハシュカレに洩らして今回の結果だからね。信用出来ない人間に余計な事は言いたくないね。君たちにヒントを『教えるのはここまでだ』

確かにクレサイダの判断は正しいものかもしれない。知らない方が良い事はある。

「しかし、それでは俺たちにこれから対策を立てようが無いじゃないか」

今まで黙つて聞いてきた第3遊撃隊の銃士テドさんが口を挟む。 テドさんの言つこととも一理ある。

「僕は君たちの対策に期待なんかしてないよ。君たちはこの世界を守りたいなら、僕の命令に黙つて従えば良いのさ。余計な事はしな

くて良いよ」

「クレサイダ！そんな事を言つたらダメー。皆で協力するの。皆に誤つて！」

イルサが食事から手を離して叱る。

「姫、これはもうここに頼れる問題ではないのです」

それだけ言つと周囲に険悪な空気を残してクレサイダは出て行つてしまつ。まるで親に叱られた子供だな。

「皆、ごめんなさい。でも、クレサイダは本当は良い人だから……」

「お前が気にする事ではない」

イルサの弁明は大した役に立たないだろう。

少しクレサイダを買いかぶり過ぎていたか…。

船に揺られる想い達は 1（後書き）

やつと少しシリアス気味になってきたでしょうか？

次回もちょいシリアス気味。名前だけ登場していたあの人があ活躍します。気付いている人いるかな？

船に揺られる想い達は 2

あいつらは全く頭にくるね。姫を手懐けて僕を利用しようとするんだから。

姫も姫だ。クーレの人間共と協力するだなんて、もつ少し魔王としての自覚を持つて頂きたい。どうしてあそこまで懷疑心を知らないのか？

あのリセス・ネイストは特に姫の信頼を得たようで気にいらないな。あの正義の味方を気取るライシス・ネイストも気にいらなかつたがそれに増して気にいらない。

こんな下らない人間の事を考えるのは止めよつ。

ハシュカレは恐らく“あれ”を手に入れてカイムを喚び、今、“あれ”はカイムの手の中にある。これは実にまずいことだ。とにかく“あれ”を奪わないといけない。“あれ”がカイムの手にあって、姫の持つ魔王の証を狙うという事は、おそらくシーベルエンスの城にあるだろうこの世界の“欠片”も狙つて来るだろつ。どちらも手に入れられたら厄介だ。

カイム達はおそらくシーベルエンスの城にあるだろつこの世界の“欠片”も狙つて来るだろつ。どちらも手に入れられたら厄介だ。

それだけは何としても防がないと…。

「クレサイダさん、少し宜しいですか？」

「あまり宜しく無いね。僕は今とっても機嫌が悪いんだ」

振り返つてその女に嫌味たっぷりに言つてやつた。

「少しだけお話をしたくて」

「さつきの奴みたいなふざけた発言はするなよ」

確かにアレンの部隊のミシヤとか呼ばれていたか？僕は君と話す気は無いんだけどね。

「私の父を知っていますか？」

微笑を浮かべながら言う彼女の言葉は僕の予想を遥か彼方に置き去りにしたものだった。馬鹿にしているのか？

「そんなもの知るわけ無いじゃないか」

僅かな笑み、哀しみにも取れる表情を変えず彼女は続けた。

「私の名前は、ミシヤ・ラベルク。もう一度聞きます。私の父を知っていますか？」

「知ってる。ケルック・ラベルク」

「そういうことか。

「僕が殺した男だ」

クーレで殺した人間は何人もいた。そして、そいつらのことなんか忘れた。只一人、この男を除いては…。

「それで君は父の敵を討とうっていうのかい？」

やる気ならば遠慮なくかかつて来なよ。父と同じく葬つてあげるよ。

「いえ、そんな事はしません。私は父が敵わなかつた人に勝てませんよ」

その女はまだ表情を変えずに言つた。その微妙な笑いはとても僕の氣分を害してると知らずに。

「それじゃあなんなのさ？」

「父の事を聞きたいんです。私は当時4歳で殆んど記憶が薄れてしまつて」

父を殺した男に父の事を聞きたい？全く訳が分からぬ。

「父は強かつた、ですよね？」

君の父親は弱かつたよ。どれだけそう言つてしまつたかたことが。そうすれば僕の気はさぞかし晴れただろう。

「強かつたよ。この世界であんなに強い奴には出会わなかつた

彼女の眼を真剣に見ている馬鹿な僕がいた。

「ありがとうございます」

それだけ言つと彼女は走り去ってしまった。

何でお礼なんか言うのさ。罵倒しろよ！僕は僕の都合でお前の父親を殺したんだぞ。僕は悪人だ、大悪人だぞ！

そうだ。僕が何でこんな事を考えなきやいけない。ただ一人を殺し�ただけじゃないか！今まで何人も身勝手に殺してきた最低最悪な僕にはどうでも良いことだろ！

クソ、何でお礼なんて言つんだ。お陰でその僕には綺麗過ぎる音が耳に残つてしまつたじゃないか！

僕は大悪人で良いんだよ！何なんだよ、あの女は！

船に描かれた想い達は 2（後書き）

クレサイダ視点。

中々難しかったツス。でも中々面白かったツス。

700才の青年よ、歎みたまえ！

船に揺られる想い達は 3

軍船内の部屋。その狭き部屋は一段ベッド一つに支配されて、寝る以外に考えを巡らすことしか出来ない。

リンセン・ナールスか。あまりにも愚かな英雄だな。魔王を召喚して魔王を還して英雄になつた人間。本当に愚かで偉大なる英雄だ。父上はこのことを知つていたのだろうか？いや、あの人は知つていただろうな。知つていて尚俺にリセスと名付けたのだろうな。何故何だ！何故そんな人間の名前を俺に付けたんだ。

父上は俺が魔王を喚び出す事を予言していたことなのかな？

“俺が持つてももう意味が無いから、お前が持つとけよ。お前が己の正義ために使いな”

十五になり、俺がシーベル工騎士団に入る前夜に父が言った言葉。そのままの意味に理解していたおめでたい俺。全く笑えることだな。父上がセレミスキーレを譲つたのは父上が見た俺の運命だったのだな。くそ、俺は父上に比べると何れ程愚かな人間なんだ！どれだけあの人は俺の高みに立つてゐるんだ。

あの人には勝ちたい。勝ちたいんだ！

俺は力タナに手に取り、ベッドから身を起こす。

「どうしたんだい。リセス君？」

俺の横のベッドからアレンさんが身体を持ち上げる。

「寝付け無いので少し剣を振つて来ようかと思いまして」

実際は己の身体をとことん痛み付けたい気分だった。そして、その後に泥のように眠りてしまいたい。

アレンさんの返事を奪つたのは控えめなノックだった。アレンさんの返事はそちらのノックにされた。

「あっ、リセス」

「何だ」

ベッドから降りた俺を見て言つイルサに俺は少々冷たい対応をしてしまった。

「えっとね。リセスにだけ伝えたい事があるんだ。甲板で待ってるから来てね！」

イルサが真剣な顔で早口でそう言い放ち扉を閉めて立ち去ってしまった。

おい、何だそれは…。

俺よ、落ち着いて考えろよ。夜中に一人きりで俺だけに伝えたい事と言つてもそれは無いぞ。相手はあのイルサだぞ。確かに表情や仕草が可愛いと思つてしまつこともあるがな、それは妹を見る兄の目線のようなものであつてだな、決してそのような対象としては無くてだな。俺はイルサとそういうような関係になるのは少し困る訳でだな。

「リセス君。ライ兄に“そつこつ時には男はどひしつと構えるんだ
”って昔教えてもらつたよ」

「アレンちゃん、それはどひつこつ時の話ですか？今は断じて父上の言つ
そういう時では無い…、だれつ。

「リセス。彼女も覚悟を決めたんだ。彼女の想いをしつかり受け止
めてあげるんだよ。」

アレンちゃんの上のベッドから真面目な顔を出すレクス兄さん。

俺はレクス兄さんの言葉を無視して部屋を出た。イルサがどんな覚
悟を決めたかは知らない。俺には全く予測不可能だ。

甲板に出るとイルサは船縁で海を眺めていた。月明かりに映える短
き赤髪は海風に流されそよいで、落ち着きなく背中の翼をゆづくり
上下させていく。

いつもはちんちくりんな行動ばかりしている癖にこつこつ時にこつ
いう雰囲気を演出している。女は卑怯だと想つ。

「待たせたか？」

待たせた筈はない。イルサの後を直ぐに追つたのだからな。俺は何
を言つてるんだ。こつこつ時はどうしり構えなければ。いや、何を
考へているスタンダードで良いんだ。

「えつとね。少し待つたかな？」

確かに僅かに待たせただろうな。俺がここに直行する僅かな時間な。

「リセスは本当にレクスさんと仲が良いね！」

「リセスは本当にレクスさんと仲が良いね！」

「あ、ああ、そうだな」

いきなり無理に話を反らしやがった。声の大きさに比例して翼の動きが大きくなつてゐる。その動搖するイルサの姿は、少し可愛く見えて俺にも動搖が伝染していく。

「ソッ、それで俺に伝えたい事とは何だ」

落ち着け、リセス・ネイスト。大したことでは無いんだ。どっしりと構えるんだ。

イルサの翼の動きが止まる。時間が止まつたように感じる。波音だけが時間が動いていることの証明だった。

息苦しい時間が僅かに過ぎて、ようやくイルサが意を決して口を開いた。

「カイムの事何だけど……」

何？カイムの事？

いや、俺の予想通りだ。決して浮わついた話である筈がないではないか。

しかし、何故か俺の膨れあがつた気持ちが急激に萎んでいた。その俺の萎みきつた気持ちに、イルサは次の言葉で更なる追い討ちをかけた。

「昼間、私に双子の兄がいたって言つたよね

イルサの赤く光る涙目に俺の気持ちはギチギチに締め付けられた。
もう次の言葉はいらない。だから言つなーお前が辛くなる。クソ、
イルサの両親を殺したアイツは…

「私のお兄ちゃんなんだ。カイムは」

イルサ、嘲るか泣くかどちらかにしろよ。
俺がこいつ時にどう対応すれば良いのか分からぬだろ？

船に揺られる想い達は 3（後書き）

しまつたなア～。『勇』の最後に次回作紹介の『夢の続きは』で
ネタバレしちまつたからな。

今度から謹子に乗らんよつに『氣』を付けないとなあ。

読者皆様申し訳ない、もつと腕を磨きます。

ですから、感想お願いします。

そして、『魔』のお気に入り登録50件越えました。
本当にありがとうございます。

シーベルエンスに灯る戦火 1

力タナを振るう時は余計な事を考えるな全身と力タナのみに集中しろ。

母上から俺の幼少の頃から叩き込まれたの教え。

修行不足な俺にはそこは出来ない。

「動きが鈍いね」

自分自身でも分かっていることだが、改めて言われてしまうと落ち込む。せっかく久々にアレンさんが稽古を付けて下さつて居ると喜つの俺は…。

同じく甲板でルクと話しているイルサ。
イルサは普段通りだ。ルクの話すこの世界についての話を無邪気に聞いている。

そうなのだ。アイツにとつては兄はもう居ないんだ。その覚悟を持つて剣を握っているんだ。

ならば、何故俺に話した？イルサが覚悟を本当に持つて居のならば…。

「そもそもシーベルエンスが見えて来る頃だから稽古は終わりにします」

「はい。ありがとうございました」

稽古の打ち切りを宣告したアレンさんに身の入っていない稽古に付

き合わせてしまった後悔の念が大きいかった。
アレンさんが溜め息を吐く。

「リセス。人の正義に頼り過ぎるといけないよ。君の正義は君だけの正義だからね。それを信じて剣を振るうしか無いんだ」

「俺の正義ですか？」

「そう、自分の信じる正義を信じて行動する。それが僕の正義だよ」
正義。昨日まではあつたはずだ。

「他人が悪だと言おうと自分が信じる事が正義なんだよ。逆にそれ自分の中以外の正義なんて君の中には存在しないんだから」

それだけ言つとアレンさんはルク達に降船の準備をするように伝えにいった。

俺の正義か…。イルサはどんな正義を持つているのだろうか？

「ほら、イルちゃん。あれがシーベルエンスだよ。凄いでしょ…」

ルクの示す方角にはシーベルエ山脈に囲まれた大都市シーベルエンス。

その我が国の誇る首都を見てのイルサの感想がこれだ。

「ウワア～、凄いね！シーベルエンスではみんなで焚き火するんだ

」

イルサの言つた能天気な事態ならば大変良かつた。しかし都市内で無許可での焚き火が禁じられているシーベルエンスで、複数箇所に昇る煙は別のことと意味しているとしか考えられない。

「船長、急いで下下さい！」

アレンさんの檄が飛ぶ。

「あつちやー。やつぱりあけらの方が早かつたかあ」

何時からいたのか。クレサイダが俺の隣でぼやいた。その咳きは俺にも聞こえた。

「お前はこうなることが予想出来ていたのか。何故予め俺たちに教えなかつた！」

俺は激怒していた。あまりにも簡単に言つてくれたこいつに。俺たちに何も言わないこいつに。そして今まで溜まつっていた俺の鬱憤をこいつに。

「昨晚も言つたよね。どうして僕が君たちに教える必要がある？君たちは僕の目的の為に利用されねば良いんだよ」

クレサイダの口元は笑いながらも口元は笑つていなかつた。こいつは本氣でございてやがる。

「ふざけるなよー！お前に何故利用されなければならぬ！」

「ふざけてるのはそつちだろ？君たちの方こそ僕や姫を利用する気満々の癖に！」

手がカタナに届きそうだ。俺は別にお前やイルサを利用する気など毛頭無い。という自分への嘘が怒りへ変わる。利用していないと言いい切れない己が悔しい。

「二人ともそこまでだ。今は一人で争ってる場合で無いのは分かるよね」

アレンさんは優し過ぎる。貴方はこのままクレサイダに利用されると言つんですか？それが貴方の正義だと？

炎上するシーベルエンスは目前に迫っていた。

シーベルエンスに灯る戦火 2

シーベルエンスの空を舞うドラゴン。

シーベルエンス港に到着後のアレンさんの即断。

「第3遊撃隊はドラゴンを撃退するーリセス、ルク、イルサ、クレサイダは取り敢えず王城に向かってー！」

「僕は君の命令に従つゝ気は無いね。勝手にさせで貰つよ」

それだけ言つと翼を広げてクレサイダが飛び立つ。

「クレサイダー！」

「勝手に飛んでると敵と誤認されるよー」

イルサの叫びとアレンさんの忠告は耳に響くだけだった。俺に取つては知つた事では無い。

勝手にすれば良い！

「ルク、イルサ、王城に行くぞ」

第3遊撃隊が去つた後にアレンさんの命令を遂行すべく俺が一人に言ひ。

「でも、クレサイダが…」

「あいつが俺たちを無視した。こちらが心配することではない」

イルサを諭すが効果は薄かつたようだ。

イルサの腕を無理矢理引っ張る。何も言わずにその俺の行為に従うイルサ。俺にその顔を見ることは出来ない。見たくは無い。クレサイダの心配をしているだろうイルサの顔を。

走るしかない。アレンさんの命令通りに。途中に街中で出会ったドラゴンを無視した。民衆を襲うドラゴンを無視してしまった。でも、今の俺はシーベルエ城に向かうしかない。それが俺のやるべきことだ。アレンさんの命令に従つた。俺は俺の正義に従つたんだ。それの何が悪い！少なくともクレサイダよりはましだ！

シーベルス城の門兵が横たわる。既に生きていなかつた。騎士団員達の遺体が多い。ルクやイルサにこの光景は酷だつたようだ。俺だつて辛い。

城門をくぐつた衆会場。そいつらはそこにいた。地に倒れ伏す翼をもがれたクレサイダと共にそこにいた。俺たちは間に合わなかつたのか。いや、城内にはまだ入つて居ない。

「無様だな、クレサイダ。流石の貴様もこの戦力差では勝てまい。貴様一人で向かつて来るとはな、あのクレサイダも甘くなつたものだな」

カイムの言葉に空から墜ちたばかりであるひづ血を流したクレサイダは立ち上がりながら言つ。

「僕は昔600年も一人で居たからね。一人の方が動きやすいんだよ。どんな卑怯な手を使っても誰にも咎められないしね」

「やはり、クレサイダよ。お前は下衆だな。大きを知りながら小に拘る。貴様は魔王に拘り過ぎだ。そんな小さきことの為に己の手を汚すか？時間の無駄だ、そこを退け！」

「ふざけたことを抜かすなよ！ヘドが出るね！」

600年、その長い年月を異界の地で独りで過ごした男は語った。
悪を。

「姫を守る為なら僕はどんな汚い手だって使つね。例え、それが誰に責められる」とになつてもね」

「我等の高尚なる目的を知りながらまだそのよつなことをほぞくか」

「高尚！全く下らないね。僕は大悪人だよ。僕は僕のやりたいことをやるさー君と同じでね！だから、君たちを全力で消させて貰うよ」

クレサイダの横から迫る刃。動く俺。

俺の信じる正義とやらはクレサイダに論破された。それだけのことだ。俺を動かしたのは。

利用する者

「避けろー。」

俺が走りながらクレサイダに向かつて放つ直線に雷魔法。

クレサイダが俺の突然の登場に反応が遅れるも避ける。クレサイダを闇討ちしようとしていた顔傷も止まる。

間に合づ。クレサイダと顔傷の間に駆け込む。再び刃が振るわれるその間に。

間に合わった。俺の肩に走る裂傷。しかし、クレサイダには刃を通さなかつた。

覚悟したよりは軽傷だ。カタナを振るうには支障をきたさない。顔傷の縦薙ぎを止めた。

「何をやつてるのや、馬鹿か君はー！この身体は僕の本体じゃない。君と違つて剣じゃ僕は死なないんだよ！」

「そうだったな」

そんなことは忘れていた。顔傷が俺から距離を取る。クレサイダの本体と同じ姿だろうウーロから氷魔法が放たれた。それをクレサイダは防ぐ。

「クレサイダ。すまない。俺が甘過ぎた」

「今頃気付いたの？君は本当に馬鹿だね

カイムが向かって来る。ハシュカレも動き出した。イルサがカイムの前に立ちはだかり、ルクがハシュカレを牽制射撃する。ウニロとクレサイダの魔法がぶつかる。

俺と顔傷は牽制状態。下手には動けん。口以外はな。

「クレサイダ。どうすれば良い。ここからの狙いは何だ？」

俺の背後に居るだらうクレサイダに話しかける。

「僕に利用されたく無いんじゃ無かつたの。僕が言つと思つてゐるなり、甘いね君は」

ああ、俺が甘ちやんだつて言つてんだよ！」

「クレサイダ！俺を利用しない。お前に従つてやる

「それが甘ちやんだつて言つて言つてんだよ！」

クレサイダが吼えながらウニロへと魔法を放つ。その通りだ。俺は甘ちやんだな。でも、少しほは分かつつもりだ。

「クレサイダ！俺はお前を徹底的に利用する。だからお前は俺を徹底的に利用しろ！」

それが俺の出したこいつへの答え。利用されることも利用する」とも嫌悪を示していた俺の答え。

「フン、少しほは甘ちやんから抜けたじやないか、リセス？でもね、

君が僕を利用する値値の方が大きいよ?」

からかうような声が背後から聞こえる。まあその通り。クレサイダにとつては俺を利用する値値が低い以上平等ではない。

「だから、せいぜい僕の足を引っ張らない程度に頑張りな

クレサイダの言い種に鼻で笑ってしまった。少しばこの大悪党に認められたと自惚れて良いのだろうか。

「カイムの狙いはシーベル工城に在ると思われる物だ!詳しい説明は後。リセス、こいつらを城に入れるなよ」

「了解した!」

誰の命令だろうが、今は構わない。出来ることをやる。不思議と俺にやる気と心強さが満ちて来る。

「リセスはその無愛想ニンジャの相手してて、ウニロとカイムは僕と姫で抑える。ハシュカの中尉は…ルクに任せたければいいから!」

「了解した!」

「クレサイダ、しつかりね!」

何故かイルサの声が弾んでいるように聞こえる。何故か俺の気分が弾んでいるせいなのか。

「ちょっとオー、私はヤバイよ~、私は後方支援だよ~。早く何とかしてよ~」

ルクに魔鎗使いの相手は厳しいか？ルクに視線を巡らす。

何だ？ハシュカレの動きがおかしい。前回対峙した時に比べて魔鎗の動きに鈍りがある。まるで手を抜いているかのよつた調子がかしいのか？

まあ、これならば避けられ無くはない、ルクは大丈夫だろ。

イルサはカイムに接近戦を許さない。お得意の魔法によって牽制を続ける。少し心配だ。まるで止めを差さないようにしているようだ。

クレサイダは任せせる。こいつの心配は無駄だ。それくらいならば自分の心配をする。

顔傷の男。前回のような不意討ちは効かない。しかもこじらは肩にハンディを負っている。それでもこじらには俺が抑えねばな。

「リセス！危ない！」

イルサの声。どこからか風魔法が飛んできていた。反射で何とか避ける。もう一人居た。ハシュカレ達と居たあの女。

その隙に俺の脇をすり抜け、城へと進む顔傷の男。くそ、追い付けるか？

しかし俺が追い付く必要も無かつた。

ここより随分北の地方にいるはずのその人は当然のように突然に現れた。

「また貴様は邪魔をするのか！女あ！」

その鋭利なる技に阻まれた顔傷の男は吠える。

何故、この場にこの人が居るのか？そんな疑問が浮かばない程にその人らしい登場に思えた。その人の振るうカタナは綺麗過ぎるからだ。

その人が居るからには勝てる気がした。絶対にあの人が居るだろうからだ。負けることなど有り得ないあの人がシーベルエンスに居る。

利用する者（後書き）

さて、ここからあの人達のターンです。次回だけね。

シーベルエンスに慈雨は降る

銃声一つ。赤い線がクレサイダの上級魔法ですら防いでいたウーロの魔術防壁を貫く。そして赤い線が炎の道へと変わる。

「アララ、あれ、結構痛いんだよねえ」

その豪火の光景に唖然とする俺達の背後でクレサイダが敵に同情を送る。

「人の職場で暴れんで貰いたいな」

「ウワア～出たよ。しかも美味しいところを持つてくしさあ」

姿を現すはシーベル工総騎士団長。この人が愛用のライフルを使うところを俺は初めて見た。そしてクレサイダがブツブツ煩い。

「やつてくれるものだなクーレ人。少々舐めて居たようだ」

「おい！ハシュカレ！俺の娘を怪我させる気か。殺すぞ！」

「やつと出てきたか、ジンサ・レッドラートー貴様は絶対に殺す！」

カイムの台詞はジンさんに届かなかつたようだ。ハシュカレとジンさんには浅からぬ因縁があるらしい。いや、ジンさんは親バカなだけだ。

「マスナー、また何かを喚べ」

イルサの魔法を避けながらカイムが名前すら判明して居なかつた女

に命令をする。そのマスナーという女性が鉄で出来てゐるじき皿を棒を胸元へと持つてくる。あれは魔具なのか？

「リセス！あれだ！あれを奪え！」

クレサイダの命令。俺が走る。カイムが俺の前へ周り込む。チツ、カイムとイルサの間に入ってしまったか。イルサの魔法を俺に向けて撃つしかない。ルクの拳銃が火を吹く。しかし、ハシュカレがそれを弾く。

母上は顔傷を止めなくてはいけない。

「マスナー、上だ！避ける！」

カイムの叫び。空を流れる川。それは枝分かれをして俺たちの敵へと向かう。

只の水。しかし勢いに乗った大量の水は十分に武器となる。水流に翻弄され流されるカイム達。流される魔法で拡声された声。

『諸君、まずは武装解除をして話し合おうじゃないか。うん、出来ればそうしてくれ。俺も訳が分からん』

国王の演説用テラスに立つ男。

「ライシス・ネイストオー！貴様ア～！」

『ゲッ、ヒヨロメガネが居やがる。テメエ、まだ下らんことやつてのかよ。それよりテメエら、シーベルエンスには1000年以上の歴史を生きて来た歴史的建造物があるんだぞ！それを焼くたあ、お

前ら天罰喰らつとけ！』

父上が本気で怒っている。あんなに怒ったのを見たのは俺とレクス兄さんが父上と旅行で行つたルンバットの遺跡に悪戯をしようとした時以来だ。

おそらく心優しき父上は歴史の残るこの街の人々を傷付けられたことにお怒りなのだろう。

「チツ、あの男。クーレ人にしてフィフレの精靈魔法を使うとは、あいつは化け物か」

俺とつばぜり合いをするカイムがふざけたことを言つ。父上が化け物？ フィフレの精靈魔法を使う。こいつは全然父上のことを分かつていないうつだ。

父上は全知全能の神に最も近き頭脳を持つと言われる男だぞ！ 異世界の魔法を使ふるぐらひ父上にとつては朝飯前なのだ。

「今日は退かせてもらつた方が良いようだな」

カイムが俺のカタナから剣を離す。また逃がす訳にはいかない。しかし、こいつの魔法は舐められ無かつた。また、手を翳すだけ。俺が宙を舞つて地面へ叩き付けられる。

「「リセス！」

様々な人の声が重なる。父上、母上、イルサ。最後はクレサイダなのか？ 大丈夫だ、殺傷力のある魔法では無かつた。

素早く体制を立ち直す俺の目には召喚門が移つた。

「クレサイダよ。我等は先に他の世界の欠片を手に入れることにした。出来るならば追つてこい。魔王の証とこの世界の欠片を持つてな」

カイム達は召喚門へと消えた。カイム達は異世界に逃げたらしい。終わったのか？いや、終わりでは無いだろうな。

『取り敢えずリセス、大丈夫か？』

急に静まった周囲に父上の声が響く。母上とイルサが俺の側に寄ってくる。

『まあ、大丈夫そудし、取り敢えず火事を消すために雨を降らすか？』

何処かでカエルの鳴き声が聞こえた気がした。

土砂降りの雨がシーベルエンスに灯る炎を消していく。

「凄いね、あの人！雨を降らせる魔法が使えるなんて！」

イルサの興奮している。俺もその感想には賛成する。

「違いますよ。姫。あいつはただフィフレからコーレイヌを」

「当たり前だ。あの人はこの世界を代表する魔導師であり、天道の賢者と呼ばれる人だぞ。天候を操るなど訳無いだろう！」

クレサイダの台詞に被つてしまつたが何か言いたかったのか？

クレサイダも母上も何故だか微妙な笑みを浮かべている。俺は何か間違つたことを言つたのだろうか？

シーベルヒンスに慈雨は降る（後書き）

シリアルス崩壊！

ライシスが全て悪いんだ！

「めんなさい。天見酒のせいです。

次回はやっとこの物語の本題に近づきます。

クレサイダ先生の異世界講座 1

シーベル工城三階騎士団会議室。様々な事後処理に追われ、昼食でイルサの腹の虫が収まつた後にここに集まり、クレサイダの説明が始まる。四半刻は経つただろうか。

「固すぎる頭脳でも理解出来たかい、ライシス君？」

「ああ、良く分かった。つまりあの黒いウーョウーョの塊だったクレサイダが身体をパクつてもムカつく口調は相変わらずって事と、そこで腹を満たして舟を漕いでる魔王に到底見えない嬢ちゃんが現代魔王様だつて事は何と無く理解した」

「ライシス、言つておくけど姫を侮辱するなら殺すよ。それともまた僕とやる気かい？」

「やうねえよ。クレサイダ、こいつにやあアレンが付いてるだぜ。下手な発言は止めておけよ」

「ライ兄、クレサイダさんは今回は敵じゃないから」

この部屋を一撃で吹き飛ばす程のクレサイダの実力を知りながら、微動だにせず、言葉だけで制する父上。なるほど、アレンさんが居ればクレサイダごときには父上程の人物が自ら手を下す必要は無いと言つことですね。

本当はかつての宿敵と戦いたい気持ちを隠しているのですが、手の震えという武者震いがその鬪争心を俺に見せつけてくれる。

しかし、今はクレサイダだけが重要な情報源だと言つことを理解してくれているらしい。だが、睨むクレサイダにそれを受け流す父上。下手をすれば一触即発だ。

「ライシスさん。今はクレサイダさんは味方ですから落ち着いて下さい。クレサイダさんもすいませんでした。お願ひしますからお互いの為に話しあいましょう」

「君は相変わらずのお人好しだね」

ジンさんがエルさんをこの場に呼んでおいてくれて良かった。仲裁には一番向いている人だ。

「それで、そのカイムとやらが僕の愛すべき国民達を傷付けた理由は何だい？」この国を奪つとかでは無いのだらつ？」

いつも惚けている国王陛下も今日は流石に真面目でこじりしゃるよつだ。

「前もアレン君達に言つたけど、僕は君たちにある程度しか話せないよ」

俺としてはその点はもうこいつ任せせるしかない。重要な話のよつなのでイルサを揺すり起こす。

「リセスウ。私はもう食べれないよ」

誰も食わさん、もう食わんで良い。話を聞け、重大関係者。

「その娘、本当に魔王なのか？」

俺にも分かりません。

流石の父上もこの魔王様は理解の範疇を壮絶に越えてこるらしく。

「姫、シャキとしてください。一応、一国の王の前ですよ」

クレサイダ、お前は何故こいつに仕え続ける事が出来るのか分からん。

「まあとにかくさ。クレサイダ、カイムとか言つ奴はこの城に用が有つたんだろ?何を狙つていたんだ?」

父上が質問を担当しているようだ。国王陛下、ロンタル執政官長、騎士団総長などの国の重役達を差し置いて話を進めるとは、防国の賢者たる父上にはやはり凄い権威があるのであつ。

「正確にはこの城にあると思われる物だよ。この世界の“欠片”だ

「何なんだ。それは?」

俺が一番聞きたかったことについ勝手に発言してしまつ。母上が顔をしかめる。まずい、後で恐らく言葉使いが悪いと叱られる。

「シーベルエ国王、ここにこの世界の欠片はあるかい?」

「うーん。聞いた事が無いなあ。ロンタル、聞いたことがあるか?どう言つ物だ?」

ロンタル執政官長も首を横に振る。クレサイダが僅かに悩んだ。

「こつらにこの世界の欠片を任せた方が早いか?姫、魔王の証をお出し下さい」

「うん、分かった。…あれ、此方のポケットだつて。あれ、無いなあ」

おいおい。せっかくの皆さんの興味が急速に失われていくぞ。

「姫！ あれほど魔王の証は大切に持つていて下さいと

「アツ、これだ、あつたあ！」

魔王の証は机の上に無造作に置かれる。イルサの扱いに魔王の証という有り難そうな名前の効果は失われていた。もつと大事に良くは知らんがもつと大事に扱うべきものじゃないのか？

「ガラス玉の欠片～？」

何故かここに居る…ジンさんにおねだりしてここに居るのだろうルクが首を傾げながら簡潔に魔王の証を表してくれた。その構成物質は決してガラスでは無いだろうが球体の一部から抜き取ったような湾曲した紫色に透き通る破片。

「ガラス玉つて、これはヘブヘルの欠片で魔王の証だよ。まあ、良いか。とにかくこれは観察世界アールから各世界の管理者に相応しい人物に渡されている筈だ」

観察世界アール。天神界アールのことか？

「これには各々に強い能力を持っている。所持者がその世界を統一するような能力を。何かそんな物は無いかい？」

確かにそいつはカイム達が狙うのは頷ける。そしてシーベル工が所

持してこると思つのも頷ける。

「いや、僕は知らないよ」

しかしあつさりと陛下は否定する。代わりに心当たりが有つたのはこの親子だった。

「ねえー、それって色違いだつたりするう。それなら知ってるんだけど、ねえ、お父様？」

ルクの笑顔の誘導により視線がジンさんに集まる。

「出来ればクレサイダを見せたくは無かつたが、相手の手の内を見て、自分の手の内を曝さんのも卑怯か」

ジンさんが組んでいた腕をほどき、上着のジャケットから小箱を取り出す。

「家の先祖が初代シーベル工国王から戴いたものレッドラー家の家宝だ。成人に伴い、これに触れて“レッドラートの眼”を授かる仕当たりがある」

その世界の欠片は透き通る赤だった。

クレサイダ先生の異世界講座 1（後書き）

もう一話説明っぽいのを行います。

クレサイダ先生の異世界講座 2

またしても、この場に険悪な雰囲気へと変わった。クレサイダの遠慮無き一言によつてだ。

「その世界の欠片を僕に渡してもらえないかい？」

「それは断る」

ジンさんの反応が当然だな。さつ簡単に渡せるものでは無いだろう。

「クレサイダさんよお、お前がこれからどうするか次第だろ。俺たちの協力を得たいなり、もう少しこの件についての情報を出せよ。お前らはこれからどうする気だ？」

父上の場を取り成す質問。俺もそれは気になつてゐる。

「異世界に行つたカイムを追つに決まつてゐるだひつへ。」

「そんな事が出来るの～？」

ルクは興味津々だ。ここつは出来ると言えばついて行く氣だ。

「出来るわ。セレミスキーはそもそも異世界に渡る鍵だよ。それがあれば僕なら出来るよ」

俺に意味ありげな視線を向けるクレサイダ。セレミスキーもくれと言つのか？

「ちびつと話を変えるがよお、セレミスキー無しでカイムはだひつや

つて世界を渡つた？

「やなところに気付いてくれるねえ、ライシス君。…リンセン・ナールスが魔王様を召喚した時と同じ魔具を使つたんだ。確かこの世界ではラートチの杖つて呼ばれていたつけ？あれには全ての魔法が組み込まれてるんだよ」

「セレミスキーより凄い魔具と言つことだな」

「その通りだよ、リセス。リンセン・ナールスがガンデアからペグレシャンと共に持ち逃げして行方が分からなくなつた筈だけね」

先程の戦闘でマスナーが持つていたあれか。しかし、それは厄介なものだ。全ての魔法を使える。さらにラートチの杖が有る限りカイム一同は異世界を逃げ回れる。捕らえるのは容易では無いな。

「カイムがどの世界に居るのか予想は付くのか？」

また言葉が口を出でしまつた。陛下の御前だ、気を付けないとな。

「フィフレか、アースだと思うよ。この世界に近いから」

「近いって言つとー？」

今度口を挟んだのはルクだ。こいつに陛下の御前は無関係なのだろう。

「うーん。クーレの異世界觀は違うからなあ。クーレでは異世界は上下関係で表すでしょ。アールを頂点にフィフレ、クーレ、アース、フォートン、最下部にヘブヘル。実際は違う

クレサイダの手から六つの光の玉が浮かぶ。その六つの玉はクレサイダの前で六角形に配置され、その六つの玉を光の線が円に結ぶ。

「これが世界の形だよ」

「凄い！クレサイダってこんな事が出来るんだー！」

宙に浮かぶ光球を見てルクが素直に驚く。

「全く。クーレ人はこの程度で驚くのかい？」

「私も知らなかつた。やっぱりクレサイダは凄いね！」

更なるイルサの感激。ヘブヘルの王も興奮されてうつしゃるや。

「お褒めに『』り光榮です。…とにかく、これがクーレだとするとこれがヘブヘルだよ。この円を巡ると一番遠い位置にあるだろ。つまり、この世界からヘブヘルへ繋げるのは難しいと言つことだ。クーレから普通の召喚方法だと二つの世界を経由する必要がある」

六つの球体の一つをクーレに置き換えて、そのクーレから円を直径になる線をヘブヘルへと引く。

「セレミスキーはこの道を開く唯一の魔具だ。ラートチの杖を除いてね。とにかく、この円に沿つて隣の世界に行つた方が楽何だ。そうすると…」

「隣の球体はフィフレとアースつてことだな？」

「その通りだよ。ライシス君。つまり簡単に往き来しやすいファイフレカースにカイムがいる確率が高いってことさ。だからまずはファイフレに行つて見るさ。勿論、セレミスキーが在れば……ね」

そしてクレサイダの関心は俺へと向いた。

「そこで、リセス・ネイスト。君が僕たちと来る覚悟が在るか、セレミスキーを僕に譲るかして欲しいんだけど？」

クレサイダの責めるような視線に俺は父上に視線で助けを求めていた。

「セレミスキーはお前に譲ったんだ。お前が決めるべきことだな、これは

シラッと言つてくれたものだ。

「分かつた。最後まで付き合つてやるぞ！－クレサイダ」

「くれぐれも足を引つ張らないでね、リセス」

全く皮肉の多い奴だな。

「やつた！リセスも来てくれるんだ」

イルサの喜びよしあすがに恥ずかしい。

「やつぱり君は来なくて良いよ。セレミスキーをよこせ。これ以上姫に近付くな！」

「そこ

「何を今さら……」

「私も異世界に行きた～い！リセ君、連れてって～」

やはりお前ならいつかいつと思つたぞ。すでに答えば用意している。

「絶対に断る！」

「絶対に駄目だ！」

計りうずして俺とジンちゃんの言葉は重なった。

「何でえ～！良いじゅんかあ～。イルちゃん、良いよねえ？」

「私は大歓迎だよ。アツ、でも危ないよ。やつぱりダメ」

「余計な人数はあまり増やしたく無いね。それだけ魔力を喰らうんだから」

「余計じゃないよ～。私は見た目は可憐な乙女だけど、すつごーく役に立つよ～これでも聖女ニーセ・ケルペストの娘何だよお？」

本当にこれでも聖女様の娘なのが不思議で堪らない。

「尚更嫌だね」

イルサ、クレサイダ、いい判断だ。ルクを連れて行く様々な危険性をよく理解している。主に俺が被害を被る危険性だ。

こうして、ルクに破綻させられた真面目な会議は、俺が異世界にイルサ達と旅立つ事とルクは留守番と決定して終わった。

クレサイダ先生の異世界講座 2（後書き）

更新遅れやした。

私的事情です。今日明日中に後一話は更新したいな。

ご感想、ご指摘等ビシバシ送つて下さい。そうすると作者の更新スピードが上がります。いや、頑張つて上げます。よろしくお願ひします。

父上との冒険談

シーベル工城敷地内の西側片隅に立つ騎士団員兵舎。シーベルエンスに家を持たない独身男性騎士団員達の花園の一階の一室。ワンルーム、シャワー、キッチン、ベッド、雨漏り付きと云ひ至れり近くせりの部屋である。

「何もねえのな。ウワツ、ローキー製の調理具が一式あるじゃねえか！やっぱ鍋はローキー製だよなあ」

唯一俺がこの部屋で金を掛けた逸品に気付いて貰えるのは嬉しい。俺の部屋へ飯をねだりに来る騎士団員達は全く興味を持たないからな。最も俺に力タナより前に包丁を握らせた父上ならば食の大切さと調理道具の価値はよく知ってるだろう。

そう言えば父上は、俺に剣は愚か、得意と言われる魔法を教えてくれた事は無かつたな。料理と歴史に関しては教えてくれたが。いや、今ならば俺がどんなに懇願しても父上が教えてくれなかつた父上の意図が分かる。

父上には俺に闘いを教える術は無かつたのだ。俺は父上の力に期待を持ち過ぎていたらしい。

闘い方は人に学ぶのでは無く、実戦の中で自分で学べ。そういうことですね、父上。

父上は俺のベッドに腰を掛けて煙草を吸い出した。窓際に置いてある灰皿を父上に差し出すとそれを受け取った父上は笑みを浮かべながら無言でベッドを軽く手で叩く。父上の前に立っていた俺はその

誘われた場所に座る。

父上とこつして並んでいると少し恥ずかしくなる。母上に怒られて自室に謹慎処分を受けてベソを搔いていた時に父上が訪ねて来た時を思い出してしまつ。もう一年も前の話だ。その恥ずかしさを誤魔化す為に俺も煙草に火を付けたが余計恥ずかしくなつてしまつた。

「父上と母上はどうしてシーベルエンスに居たのですか？」

俺は昔と違つて父上とどう話せば良いか分からなくなつていた。話したい事は他にも色々とあるのだが。

「良くなぞ聞いてくれた！ 実はな……」

父上が顔をしかめる。賢者としての重大な使命があるのか？

「昔、世話になつた人が亡くなつて20年経つから、墓参りを兼ねてルンバットにヨキちゃんとラブ・ラブ旅行中だつたのだよ、俺たちは！ ところがどつこい、リセスの顔を見て、二ーセも墓参りに誘おうと思つてシーベルエンスに寄つたら二ーセはカー君と先にルンバットに行つちやてるし、ジンの執務室で国王と茶を飲んでたら何かシーベルエンスが燃えてるしさあ。せつかく久々の長期休暇が取れたのに危険性大な事に巻き込まれるしさあ」

父上の口からは不平不満らしきものがボロボロと出てきた。普段からこういう冗談が好きな人だ。実際は何らかの危機を感じ取り、この人は天に導かれるようにここに来たのではないかと疑つてしまう。

「まあ、俺の事は良いや。リセスはどうだつたんだ？ 旅は順調だつた…訳では無いよな」

父上が煙草を口に戻した。

「どうと言われても先程クレサイダやイルサが語った通りで

「クレサイダやイルサが語った通りのお前だったのか？俺は他人の語る自分が本物だとは思わないことにしてるぜ」

父上には敵はない。偉大な父上には分からぬかも知れないが、俺はクレサイダの僅かに持たれた期待に応えられる人間では無いし、イルサの過大評価は息苦しい。

情けない。父上に俺の情けない心を全て吐かされていた。イルサやクレサイダを召喚したことを、イルサが居なければ死んでいたことを、クレサイダとの喧嘩のことを、そしてカイムとの戦いについて。

「怖かつた。身体が震えて、俺は力タナを握ることも出来なかつたです」

父上は新しい煙草を加えて話を聞いていた。

「そうか」

煙草の火を揉み消し一言だけ漏らす父上。今も心底怖い。次に父上は何と言つのだろう。こんな情けない息子を前にした父上は何と言うのだろうか？

父上は笑い出した。大きく笑つたのだ、その人は。

「いやあ、お前はユキに似て、怖いもの知らずだと思ってたんだけどなあ。こんなに小心者だとはねえ」

恥ずかしさの極みだ。俺は父上にも似ず、母上にも似ず、誰に似てチキンになってしまったのだろう。自分が情けなさ過ぎる。

「俺は嬉しいよー。お前が小心者になってくれて」

それは父として喜ぶべきことなのだろうか？息子は貴方のように勇気と観察のある人間になりたかった。

「俺に似て小心者なリセスに一つ助言を『えよー』」

父上は本当に嬉しそうに言う。父上が自分のことを小心者だと語り慰めはさておき、助言は素直に受け取っておきたい。

「小心者なら、小心者の意地を見せてやれ！それが小心者ネイスト流の戦い方だ。まあ、頑張りたまえ、リセス・ネイスト君」

それだけ言うと父上は立ち上がった。

小心者の戦い方。今の俺には向いているのかも知れない。

自称小心者な父上は俺の返事を聞かずにこの部屋の扉の前に立つ。

「じゃあ、頑張れよ」

「はいー。」

俺はその言葉を重く心に留めた。父上は俺の表情を見て溜め息を付いた。

そして、息子に贈る言葉。

「…リセス。重要な話を忘れていた」

父上の顔は真剣なものへと変わる。

「…弟と妹、どうが良い?」

「えつ?」

弟の方が、いや妹も捨て難い。では無くて、父上! それはどうこう意味ですか!

「冗談だ! まあ、肩の力抜いて頑張れってね。ハツハツハ

「うやうや、俺は父上に遊ばれたらしい。俺は部屋を出でていへ父上の背中を恨めしげに見送るしか無かつた。

父上との冒険談（後書き）

よし、更新だあ～！

今日は休み。昨日は仕事。一昨日も仕事。

職場にて“週末の救世主”と不名誉な称号を頂いた天見酒です。

うん、ごめんなさい。日曜日に更新出来なかつた分、今日はフルス
ピード更新します。

世界を旅立つ

昨日の雨の恩恵で朝日に輝くシーベル工城練兵所に立つ男。その横には寝惚け眼のイルサが立っている。

「遅いよ、リセス」

遅れたつもりは無いのだが、イルサを叩き起こしていただろうクレサイダよりも遅かったという事は遅れたのだろうな。

そして見送りに来た人達。

「リセス、しつかりな

「はいー。」

俺をシーベルエンスの騎士団に送り出した時と同じ事を言ひ母上。淡白な言葉とは異なりその表情には憂いを帯びている。これもある時と同じだ。気が引き締まる思いだ。

「まあ、ユキミ君は僕がしつかり守るから心配しなくて良いよ」

「おい、国王！てめえ、人の女房に手を出すつもりかー。ユキには俺が居るから良いのー！」

国王と父上の喧嘩に気が緩む想いだ。

「リセス、クレサイダ、イルサちゃん、気をつけて行くんだよ。無事を祈るよ」

「君に無事を祈られることになるとほね」

クレサイダ、あの大勇者アレン・レイフォートに健闘を祈られるなんて光栄の極みだぞ。素直に受け取れ。

「じゃあ、リセス。セレミスキーオーを出してよ」

いよいよか。俺はいよいよ旅立つんだ。心地好い緊張感と高揚感に支配されながらセレミスキーオーをクレサイダに渡す。クレサイダがそれを掲げた時に心臓は過重労働を始める。

「待つてエー！私も行くうー！」

小悪魔によりお預けを喰らつた。忌々しい奴だ。

「昨日お前は留守番と決まつただろ？ 第一、ジンさんが許さない
「フフフ、昨晚、魔話器越しにお母様にお父様を説得して貢つちや
たのだあ」

二ーセさんもルクを甘やかし過ぎだ。

そして娘に弱ければ、妻にも弱いシーベル工騎士団総長。

「リセス、ルクを頼むぞ」

ルクと現れたその人は視線で俺に声を出さずに語りかけてくる。怪我をさせるな。手を出すな、出させるなと…。いつも不機嫌そうな顔をしているが、今日は本当に不機嫌のようだ。

「わあー、ルクちゃん。やつぱり来てくれるんだ！」

お前は昨日はルクを連れて行く危険性を理解していただろう。心底嬉しそうなイルサ。ルクに抱き着く。ルクもその一番の歓迎者に嬉しそうに身を寄せ。いつの間にそんなに仲良くなっているんだ。

「僕は連れて行きたく無いんだけど? 足手まといはリセスだけで十分だよ」

よし、今だけはお前とともに仲良くなれそうだ。押し切れ、クレサイダ。

「あれエー? クレちゃん、そんな事言つて良いのかなあ?」

「クレちゃんってねえ。君、僕をバカにしてる?」

違うぞ。気をつけろクレサイダ。このルクの純粋に見える笑みは相手の心を言葉で痛める為のものだ。

ルクがニーセさんとお揃いの内ポケットから出す切り札。

「これなあ〜んだ?」

俺はそのルクの朝日を反射する切り札を見て直ぐにジンさんを見た。何故、世界の欠片をルクに持たせたのかと言つ想いのたけを眼に込めて。

「そろそろ譲る時期だった」

言い訳を吐ぐジンさん。

全くこのムツツリ親バカは！

「良いのかな～？」れと私が居れば、カイムと世界の欠片を簡単に見つけられるよ～？このルクちゃんが、クレちゃんと協力してあげよ～と思つたんだけどな～？」

「ウワア、ルクちゃん。ありがとう～す～ぐ心強いよ。クレサイダ、ルクちゃんに行こうよ～」

妄言だ。クレサイダ、お氣楽魔王のように騙されるな。

「…準備は良いのかい？」

「何時でもOKだよ～」

イルサとハイタッチをするルクに不機嫌そうな声で聞くクレサイダ。最終防衛戦は軽々と陥落した。

「良いよね、リセ君？」

「俺の反対は通じるのか？」

通じるならするがな。敗北者を更にいたぶる気か。

「それじゃあ、今度こそ行くよ」

クレサイダが開く異界の門。

まず、クレサイダが戸惑い無く扉へと消える。イルサも一礼して消える。

「じゃあ、お父様、行って来るね～」

ルクに先を越されてしまった。そのルクの背中に向けたジンさんの

氣を付けろは虚しく響いた。

「では、俺も行かせてもらいます」

見送りに来てくれた人達に頭を下げる。

「まあ、楽しそうなメンバーで良かつたな。頑張れよ」

父上の他人事な発言だ。確かに俺が他のメンバー達の分も頑張らなくてはならないな。

全く愉快なメンバーだ。聖女様の姿だけを継いだ性悪女に、主人以外に毒舌な悪玉従者、極め付きの能天氣大食らい魔王様。

そして、旅立ちの扉を潜る。俺はこの仲間とこの世界から消えた。

世界を旅立つ（後書き）

やつと、序章が終わりました。終わりましたとも。しかし、ここからが本番です。

天見酒も主人公リセス共に気を引き締めてかかるんとな。

森と言つて良いのだろうか？木が地から生えて、何も無い中空からも生えている光景を…、いや、生えているといつか漂つてゐる？木だけでは無い、花もそれこそ根こそぎで飛んでいる。イルサやルクはこの不可思議な光景を早くも受け入れてはしゃいでいるが、植物がウジヤウジヤした根っこを露にして空に浮かんでいる事に、本当に美を感じられるのか？

「ファイフレは主に僕らシャープトと同じ魔力構成体が住む世界だから、この植物も空気中の魔素を取り込み易く進化したのかも知れない」

「確かに魔力で一杯だあ。生命体しか魔力を持たない私達の世界とは違うねえ～？」

クレサイダの仮説をルクが賛同の意を示す。…待てよ、俺に嫌な予感がする。

「ルク、周囲が魔力に満ちていると言つことは

「全然ダメだねえ～。クレちゃんほどの魔力でも沢山在りすぎて力イムや欠片の場所なんて全然区別が付かないよお～」

「ルク君、クーレに帰れよ」

俺もクレサイダの意見に両手を上げて大賛成だ。
しかし、少しばかりにしていたルクの能力が役に立たないとなるとこの広大である世界を闇雲に探索するしかない。強いて言えば、俺たちは迷子だ。

「イルちゃん、クレちゃんとが苛めるよ～」

「クレサイダ、ルクちゃんを苛めちゃダメだよ」

本当にこの一人は仲睦まじくなつたな。少し羨ましい気がしないでは無いが、こちらは男同士仲良くやることにしよう。

「クレサイダ、どうするんだ?」このまま立ち往生しても意味が無いぞ」

「人頼りじゃなくて少しほ自分で考えなよ。僕は万能じゃないんだよ」

冷徹な言葉が俺に投げ掛けられた。俺はここにつと仲良くなれないようだな。

「とにかく、この世界の住人を探すことにしよう。情報を集めねば動きようが無い」

俺の自分の頭で考えた結論にクレサイダは、まあ妥当だねと生意気な返事を返した。… イルサとルクはしゃがみ込んで何をしてるんだ。イルサとルクの見つめる先には緑のシルクハットを被る栗鼠がいた。その栗鼠に話しかけている一人。クーレでは異様過ぎる光景だ。

「私はクーレから来たんだあ。こっちのイルちゃんはヘブルだよ

」

「そらのか、翼のお嬢ちゃんはヘブルから来て、そちらの翼無しのお嬢ちゃんはクーレから来たのかい。それはまた珍しい

」

「うん、栗鼠さんが喋るのもヘブヘルでは珍しいよ。」

栗鼠と平然とお喋りしてゐるお前らは珍しいぞ。

「いや、おじさんはリスとか言つ生物じゃないからね。樹を回る偉大なる精靈セルツティンだからね」

「ウワア、凄いですね～！セルツをさつて呼んで良いですか？」

「ああ、好きに呼んでくれたまえ！」

喋る栗鼠を不信を持たずにおだてるルクやイルサの順応力を素直に讃めるべきだらうか。まあ、今回はお手柄だらうな。害は無さやつであるし、俺もお話に参加させて頂こいつ。

「セルツさん、一つお尋ねして宜しいでしょうか？」

「…チッ

おい、この栗鼠、舌打ちしゃがつたぞ。俺はファイフレ流の礼儀でも違反したのか？

「何だ、小僧。馴れ馴れしいぞ」

栗鼠公め、誰が小僧だ！

いかんな、落ち着こい。栗鼠相手に怒つてどうする。

「リセ君、いきなり話に入つてきて質問は失礼だよー。セルツさん、私たちとおつても困つてゐるんだあ。いろいろと教えてくれないですか？」

「ああ、良いとも。おじさんに何でも聞きなさい」

俺とルクへのおじさんの対応が違うんじゃないのか。ルクに礼儀を問われることになるとは心外極まり無いが、この栗鼠公の相手はルクとイルサに任せた方が良さそうだな。ルクが俺たちの目的の概要を口を挟まないようには堪えて待つ。ルクの話す曲がりに曲がった事情を訂正したくてしようが無い。クレサイダさえも耐えている。俺も耐えるんだ。

「なるほどね。ルク嬢とイルサ嬢は、その大悪党たちを倒すためにそこの下僕達と旅をしている。いやあ、お一人は立派だなあ」

「クレサイダは下僕じゃないよ。とっても優秀な配下だよ。リセスは私の友達なんだよ」

「姫、このクレサイダを…光栄の極みです」

イルサ、訂正ありがとよ。しかしクレサイダ、それで良いのか？俺には下僕も配下も同じに感じるぞ。

「それでえセルツさん、ファイフレの欠片が何処に在るか知つてますか。これと似ている筈なんですか？」

ルクがセルツにクーレの世界の欠片を見せる。栗鼠公はその赤い結晶片に興味を持ち小さき手で触れる。俺も少し触つてみたいと思った矢先だった。

「気軽に触るな！」

クレサイダが急に怒鳴ったことによりクレサイダの顔を見てしまう。俺の視界から外れたセルツに異変が起こっていた。

「セルツさん！」

イルサの悲鳴に近い声。

セルツは頭を押さえ込んで腹這いに横たわっていた。

精靈世界ファイフレ 1（後書き）

ファイフレ編スタート。

新たな登場栗鼠セルツテインはどうなつてしまつやう。

また、色濃いキャラを書いてしまった。このキャラを生かせるかどうかは作者次第ですね。

暫くして心配する俺たちを余所に立ち上がるセルツティン。地に落ちたシルクハットを頭に置きながら言葉を発した。

「ルク嬢は大層な物を持つてゐるねえ。頭にゴチャゴチャしたもののが入ってきて、おじさんは氣が狂うかと思つたよ」

「『めんなさい』」

珍しく意氣消沈なルクにクレサイダが追い討ちをかける。

「世界の欠片を初めて触れた時に君は何とも無かつたのかい?ならば、化物だね。覚悟の無い奴が簡単に触れて良い代物じゃ無いんだよ、それは!」

「クレサイダ、その辺にしてやつてくれ」

「クレサイダ君、ルク嬢を責めんでやつてくれ。おじさんが勝手に触つてしまつたのが悪いのだよ」

自分でも甘いとは思つが、ルクのしょげた顔を見るとあまり責めては可愛そうに思えてしまつ。ルクは普段から黙つてれば可愛げがあるのだがな。

「それで諸君はこの世界の欠片を探しているのだったね?」「何処に在るのか知つているのか?」

「全く知らないなあ」

セルツの意味深な物言いに生まれた希望は直ぐに彼方へ消えた。俺の落胆に継いで、クレサイダが直ぐに新たな希望を灯すために口を出す。

「この世界で一番強い人物・生物は誰だい？例えばこの世界のトップに君臨する生物とかは？この世界での強国は何処にある？」

天神界アールが世界の欠片をその世界の代表者になる資格を有する者に配ったんだつたな？クレサイダの頭脳は機敏に働いている。

「うーん、それはフイフレでは難しいよ。フイフレには五つの国が在るからね。木の国、土の国、火の国、水の国、風の国。因みにこには見ての通りの木の国さ」

確かに見ての通りだな。木が其処らを漂う国。その他の国はどんな不思議が有るのだろうか気になる。

「その中で一番強い国は何処になるんだい？」

「そんな事は分からなーいさ。おじさんは唄、クーレに召喚された事が有るから知つていいけどね、クーレに有るような戦争なんて物がこの世界には無いんだよ。この世界では自分の住みやすい所に住む。国と言つても国境が有る訳じゃないし、国王のような代表がいる訳じゃない。争う必要が無いんだよ。どの国が強いか何て誰も知らないさ」

鬪争の無い世界。誰もが好きに生きられる世界。多少羨ましく思うが、何か寂しさもある。少なくとも戦士である俺には似合わない世界だな。これは俺が戦い好きと言うことだらうか？

そんな下らない自問自答をしている場合では無いな。この世界の住民でも手掛かりが皆無と言つことは、俺たち余所者が見付けるのは不可能に近いだろうな。

「取り敢えずおじさんは木の国に長く住んでるけど、その世界の欠片らしき物は見たことが無いよ。他の国を探した方が良いね」

後、四つの国をしらみ潰しに探すのか？こいつは大仕事だな。何年掛かる」とや。

「ねえー、私達が大変なら、カイム達だって大変なんじゃないかなあ～？」

先程の失態からじつと黙っていたルクがようやく立ち直りを見せて、良案を出す。

「フイフレは一旦諦めて、他の世界から探した方が早いんじゃない？カイムがこの世界に居るのかも分からないんだし～」

確かに一理ある。俺たちの目的はカイムより先に欠片を手に入れる事ではなく、欠片がカイムの手に渡らなければ良いのだ。見付ける事が困難ならば時間を浪費してこの世界を探し回る必要は無い。

「ダメ！絶対にダメ！」

イルサが焦ったように怒鳴る。鷹が威嚇するように翼を広げたイルサの猛反対にルクが僅かに肩を震わす。

「カイムはとても危険な奴何だよーこの世界で何をするのか分かん

ないんだよ。カイムがクーレで何をしたのか見たでしょ！カイムは残虐で、非道で、最低で！」

「イルサ、落ち着け！」

イルサの声の大きさに俺も合わせてしまった。今は実兄に対する有耶無耶な感情まで吐き出しても仕方ないだろ？ ルクはお前と一つの関係を知らないのだから。頼むからそんな顔で怒らないでくれ。そんな眼で怒らないでくれ。

「……」めん。でも私はファーフレにカイムが居ないって事がはっきりするまでここの腹たい

イルサの感情を大きく反映しているだろう翼は小さく畳まれた。何とも読み易い感情表現だな。それ故に俺はこいつの感情が気になってしまつ。

「あのイルちゃん、その『』めんね。無責任な事言つて

「別にルクちゃんが悪い訳じゃなによ……」

（氣まずれ）一同無言となつた。まるで喋った奴から殺されると叫ぶような空気が漂つてゐる。こいつに時々空気を払拭する役目のルクすら匙を投げている。

（）の空気を崩したのはこいつの突拍子の無い行動。

「ヒヤアー！」

セルツがイルサの足と背を駆け上がり、イルサの肩で止まつた。セルツの急なアクションに声と翼を上げるイルサ。

「諸君、まずは風の国に行こうではないか。彼処の住人達は情報に聰い。君たちの探し求める情報が聞けるかも知れない」

それを早く言え。そして早くそこから降りろ。

「セルツ君？姫の御身体に気安く触れるなんて焼き殺されたいのかい？」

「イツ、良いのかい？おじさんが風の国まで案内してあげようと言うのだよ。君たちの中で風の国が何処にあるか知っているものはないのかね？」

姫というクレサイダの逆鱗に触れたセルツは、吃りながら説明もとい命乞いを行う。

「チツ、… よう済みになつたら丸焼きにしてやる」

その時は俺もクレサイダに加勢してやろう。

「それでは諸君、いざ行かん！風の国へ！」

イルサの肩で仕切り出し、小さな手で一方を指すセルツ。

少しだけセルツに感謝してやつても良い。俺たちのギクシャクが、セルツの示す方向へ歩き出すことで少しだけ緩和されたのだから。しかし不安は俺にしつこく付きまとつ。

ルクが一向に話そとしない。お前が黙つてると何故、俺たちも沈黙に支配されるのか。何か喋れよ！

精靈世界ファイフレ 2（後書き）

いつもより少しだけ長くなってしまった。

ところが、誤字脱字の可能性も高くなる訳でして。

もし、発見してしまった方はこの愚者に「一報をお願いします。

男達の夜

長い一日だった。余りにも喋らないルクが俺の不安を搔き立てられて、元より会話術の劣る俺は為す術無し。イルサもルクの無言病に感染し、イルサの肩上で場を盛り上げようと努力するセルツ虚しく、俺達は葬式参拝のごとき行進を続ける。

そんな雰囲気など御構い無く、涼しげな態度で歩くクレサイダ一段と憎たらしい。

そんな長つたらしい太陽の活動がもうすぐ一時停止になる前に、セルツ臨時指揮官により野営命令が発令された。

「では、おじさんは寝床を造るとしますよ」

イルサの肩から降りて、地面から木の実を拾つセルツ。何だ、それはお前の晩飯か？

違つた。この小さき栗鼠は幾年もの歳月を短縮した。セルツが大地に置いた木の実は発芽し、緑の芽は伸び続けて茶色の幹が出来る。枝は伸び、葉が繁る。俺達を見下ろす大木が出来る上がるのに時間は掛からなかつた。

この急成長した木に手を触れてセルツは言つ。

「失礼するよ」

出来立ての大木に優しく手を触れるセルツ。地面が揺れた。何事だと考える暇もない。土を破つて現れた無数の根。一本一本を糸を寄り会わせるように幾重にも紡がれ小さなドームが出来る。入り口には根で出来た垂れ幕まで付いている仕事ぶりだ。その作業を終えた

セルツは、帽子の位置を直しながら、呆然としていた俺達を振り返つた。

「ある程度の雨風はこれで防げるわ。お嬢ちゃん達はこの菜かで寝なさい」

「凄い！ セルツさん、ありがとう」

「どうやったらい、そんな魔法を使えるの？？」

「ハッハッハ、おじさんほ樹を司る精霊セルツティンなのだよ。これぐらいお茶の子をこなせるさー」

調子付くセルツだが、今回は好きだけ付かせせてやる！

日が暮れ、腹が満たされれば眠くなる。俺では無くイルサの単純思考を基に置く生活体系の話だ。いそいそと寝床へ向かう健康的なイルサ。いや、あいつはお子様なだけか？

「ルクも寝たらどうだ？」

「うーん。私、ここで寝た方が良くなかったら、危険が迫つても直ぐに分かるし」

「ハハハ、このフィフレにいきなり寝込みを襲つてくる輩は居ないさ。ルク嬢も安心して寝なさい」

セルツに言われて、すこすこと即席木造建築物へ引っ込むルク。

「何なのさ、あこつは？ 姫とは一緒に居たく無いって言うのかい」

「クレサイダ、声が大きいぞ。ルクだつて考える事があるんだ」「クレサイダが、君は甘いね、と言つてくるが聞き流しておけ。自身でも分かっているつもりだ。

「で、彼女は一体何がしたいの？無理に僕たちに同行する必要は無かつたんじゃ無いの？勝手に機嫌を悪くして迷惑だよ

「何故、俺に聞く？本人に聞いたらどうだ」

「だつて、君達付き合い長いんでしょ？」

俺とルクは確かに赤ん坊からの親ぐるみの付き合いだがな。

「俺はトーテス、ルクはシーベルエンス育ちだ。そこまで、あいつと長い時間を過ごした訳では無い

少し喧嘩腰な物言いをしてしまった。

たまに遊びに来る遠い親戚みたいなものだ。況してや、ルクの複雑怪奇な不可思議思考を分析出来る人物が居ると言うのだろうか。とにかく、ルクについて悪く言わるのはいい気分はしない。だからこの話はもうお仕舞いだ。

この俺の意図を組んでかセルツが話題を変える。

「ホオ～、リセス坊はトーテス出身か？おじさんは昔行つた事があるんだよ。あそこはガンデアにも劣らず寒い街だったね

そう言えば、セルツはクーレに囚禁された事があると言つていたな。どうでも良いが俺は坊主扱いなのか？

「いやあ～、今考えるとクーレも中々良かつたよ。美人が多いしね。
何を隠そつ、おじさんの呪喚者も美女だつたのだよ」

陛下が聞いたり喜ぶお褒めの言葉だな。そして、最後の自慢はどうでも良い話だ。どうでも良い話だが、話題が無いよりは有つた方が良い。

「セルツはクーレに いつ頃行つたんだ？」

俺の質問にセルツは返答に困る。もしかしてタブーを聞いてしまつたのか？

「もう何年も前の事や。忘れてしまつたよ」

さらりとそれだけを言つセルツ。クーレで嫌な目に合つたのだろうか。深く突っ込んではいけない事。とは一概に言えない表情だった、セルツは。何か、忘れ去つた思い出を振り返るよう夜空を仰いでいる。この小さき栗鼠はクーレで何を見たのだろうか。

「リセス坊はもう寝なさい。おじさんやクレサイダ君は魔力構成体だから寝る必要は無いけど、君はそうはいかないだろ？」

「火の番をよろしくお願ひします」

ここはセルツの指図に従つべきだらう。無理に睡眠へと入ろうとすれば、俺は案外疲れていたことを知る。直ぐに夢の中に誘われた。

だから、寝耳に聞こえたセルツの言葉が現実なのか、夢の中のもののかは、判別が付かないし、明日には忘れていることだらう。

「さて、久しぶりだね。クレサイダ君」

俺はこの言葉の意味を深く考えられる状態では無かつた。

男達の夜（後書き）

伏線を張つたつもりです。

この伏線を生かせる日は来るのだろうか？

女達の夜

私がセルシさんの造つた即席テントの薦の垂れ幕を潜つた時にその声は聞こえてきた。

「で、彼女は一体何がしたいの？無理に僕たちに同行する必要は無かつたんじゃないの？勝手に機嫌を悪くして迷惑だよ」

クレちゃんの批判に対し弁明してくれるリヤ君の声も聞こえる。でも、それは私には何の慰めにもならないんだ。

私は何かの役に立つつもりで来た。足を引っ張る気は無かったよ。でも、役に立たなかつた。それどころかイルちゃんを傷付けてしまつた。今となつては、この旅の私の目的は只の我儘でしかない。

私は何で、何で此處に居るんだろう。

「ルクちゃん。えつと…、寝るの？」

「あっ、うん

その彼女の眠そうな小声に合わせてしまう。

イルちゃんは私の期待を裏切つて、蒲団を被つている癖に、寝てはいなかつた。君は何で起きてるのかな？私を待つていたとか言わないでよ。

私はイルちゃんの隣に落ちる毛布を被り寝る体制になる。
地面は固いよ。それよりも私の背中にイルちゃんが居ることが寝辛いけど。今の私には彼女の存在は大き過ぎる。クレサイダやリヤ君

の信頼を集めれる彼女が、聖女と呼ばれ、既に慕われたお母様のよう

に…。

私はニーセ・P・レッドラートのよつには成れない。そんなことほ
分かり切つたことだよ。うん、諦めた事だよ。聖女にも成れないし、
お父様みたいに少し過保護だけど素敵な男性は私の前には現れない
んだ。どんなに頑張つても。

だから、イルちゃんが羨ましい。何でだらり。私が欲しいものを持
つてると思つちやうのは。

「ルクちゃん、ごめんね」

背中から聞こえたそのイルちゃんの声。何で謝るのかなー?と、思
う隙も無かつた。

彼女の身体の温もりが私の身体を覆う。私の全身の体温、主に首よ
り上が、急上昇中だあー!

「ルクちゃん、暖かい」

ナ、何を言つてゐのかなあ?今は夏だよおー。そう声に出やうとし
ても、私の心臓のバクバクが喉の調子を悪くしちやつてるよー。逆
にイルちゃんの緊迫状況にある心臓の声が私の身体にとても良く伝
わつて來てるよおー。

チツ、私よりも胸があるー!とも強調しやがつて!

アラ、いけない悪魔さん。私の思考に割つて入つたらいけませんこ
とよ。

「ルクちゃん？」

「ナツ、何かなあー？」

耳元で囁かれる艶やかな声。何でいつも時にそういう匂いがするか
出すのかなあー、この子は。そういうのはリヤ君相手に出してあげ
なよ。

とにかく堅物リヤ君は落とせても、このルクちゃんは魔王の誘惑に
易々と負けることは許され無いのだ。

「付いて来てくれてありがと」

うん、落とされちゃいました。

何で私にそんな事を言つたやつの？私は君を傷付けたんだよ。皆こ
付いて来て貰える君に嫉妬しただけなんだよ。

「本当にルクちゃんが一緒に来てくれて良かつた…」

そんな事言わないでよ。私は同情なんていらないんだからー…そういう台詞は素直に信じるリヤ君に吐けば良いじゃない！

私がそうやって反発する機会は無くなってしまった。
イルちゃんは、私の髪に顔を埋めて可愛らしい寝息を立て始めたの
です。私の身体をイルちゃんの片腕が拘束したままだ。
チツ、言いたい放題言いやがって。人の身体を弄びやがって。図々
しいんだよ！

でも、何でだろー？凄く落ち着いちやうだよねー。

そして、こんなイルちゃんだから守ってあげたくなつたりやうんだよ

ね。

とても気持ちの良い夢見心地の最中に考えちゃいました。

私と違つて、言いたい事を素直に言えちゃう。
これが魔王イルサテカの真の力なのかなあ？

女達の夜（後書き）

天見酒は泥酔状態です。酷い文章かもしけない。明日見直そう。皆様、誤字脱字が有りましたら、通報を宜しくお願ひします。

明日は休みだー！ヒヤツホイー！

サンタが居ない現実を受け止めて、人は大人になるんだ。

最近になつてようやく、入社時に保障されていた筈の週一一日間定休日なる空想自由時間が、現実に存在しない事を知り、少し大人になつた天見酒です。これから就活の人は気を付けるよー！

これは後書きに書く事じゃ無いですね。ご免なさい。凄いテンションが高いんです。

風の吹ぐ地へ

機嫌が良いことは良いことである。それが他人の機嫌を損ねなければだ。

「イルちゃん、これあげるね~」

言つておきたいがそのハムを調理したのは俺だからな。

「わあ、ありがと~」

「はい、あ~ん」

ルクがフォークに差して出すハムを躊躇い無く餌付けされるイルサ。

昨日の離婚直前の冷めた夫婦関係から激変、俺たちの目の前で新婚ホヤホヤの夫婦生活を展開してくれる二人。

「ルクちゃん、美味しいよ」

それは俺が調理したハムだ。もう一度だけ堪えていてやる~。

「もお~、イルちゃん、口の下にケチャップが付いてるよお

イルサの口元を指で拭うルク。本当の姉妹みたいだな。

俺の隣で含み笑いが聞こえる。この笑いは、決して良い意味のものでは無いだろう。

「ルク君、いい加減にしてよ。姫にベタベタしやがって」

「アレレ～、クレちゃんは私に嫉妬かな～？」

堪忍袋の緒が切れて凄むクレサイダに、ヒーリーと挑発するルク。

「Jの屁があ。リセス、セレニスキー貸せ。Jの性悪を送り返す！いや、やつぱり良い。Jの場で火刑にしてやる！」

「ありやつや、クレちゃんに出来るかなー」

「おい、クレサイダ落ち着け！ルクの挑発に乗るな。ルクも拳銃を取り出すな！」

そして、セルツ。みんな若いなあ～とか爺臭い事言つてないで止める。

「一人とも喧嘩したら黙だよー」

「姫、これはですね。姫の御身をJの性悪女から守る為として」

「そんな事しないよ～。ちょっとしたジョークだよう。クレちゃんは本気にならみたいだけねえ？」

「君はまだ言ひのかい？」

「とにかく、一人とも座るのー。」飯はしつかり食べなきゃいけません！

魔王の教育的格言に、萎れるクレサイダとルク。俺の隣から、あの女はいつか絶対に消す、と聞こえたのはおそらく幻聴だ。

「ハツハツハ、イルサ嬢はこの中で一番強いね」

いや、クレサイダやルクがイルサに對して弱すぎるだけだ。全く情けない奴らだ。あまりこの魔王様を甘やかし過ぎるなよ。

「まったく、リセスが美味しい」飯作ってくれたんだから、味わつて食べないと失礼だよ」

「ナ、何！こいつは何で真顔でそういう恥ずかしい事を言いやがるんだ。全くしようがない奴だな。晩飯は少し豪勢にしてやるか。

「ハツハツハ、リセス坊もイルサ嬢には敵わないようだね。全く魔王様ただね」

うるさいぞ。

メンバーの気分が良くなるとチームの指揮が上がる。行軍の速度も昨日と比べると格段の差を感じられる。

太陽が真上に差し掛かった頃に少しずつ空飛ぶ樹も目立た無くなり、地上の樹も姿を消して来た頃、セルツは木の国の終わりを告げた。森を抜けた先には大草原があつた。

「「」が風の国なのか？」

「正確では無いけど違うよ。この草原はビジャの国でも無いのさ。その丘を登ると見えるよ。ちょっとイルサ嬢、おじさん気持ち悪くなつて！」

セルツの話を聞いた途端に示し合わせたように駆け出すイルとルク。

「あいつらは子供か？」

「全くだね」

一人言を言つたつもりだったが、もう一人の置いてきぼりから賛同を得てしまった。煙草を取り出しのんびり歩きながら向かうことにして。

「今日は、イルサを連れて行かれても怒らないんだな？」

「僕だつていつも苛ついてる訳じやないよ」

そう言い、俺が差し出した煙草を受け取り火を付けて、やつぱりこれは不味いねと文句を垂れるクレサイダ。

こいつとの友好的な会話を試みた俺としてはなかなか良い感触だ。

「たまには、姫も気を紛らわして欲しいしね」

クレサイダの言葉が俺の知りたく無かったイルサとカイムの関係を思い返させる。勿論、クレサイダはこの二人に關して俺以上に知っているだろうな。クレサイダは、俺がイルサからこの事を告白されたと事實を知っているのだろうか？

「とても悔しいけど、ルクが姫の気を紛らわす存在だつてのは認め るよ」

不味いと言いつつも、白い煙を吐き続けるクレサイダ。その言葉は

哀しさにも寂しさにも聞こえる。可笑しなものだな。俺たち一人はイルサの哀しみの根源をルクよりも知っている筈だ。でも、そのイルサの哀しみを一時でも忘れさせているのはルクなのだ。俺たちはイルサに何をしてやれるのだろうか？

「クレサイダはイルサとの付き合いは、やはり長いのか？」

何気無くそんな当たり前の事を聞いていた。

「愚問だね。僕は姫が御出生に立ち会つて、その直後にシールテカ様、前魔王様に姫の教育係に任命されたよ。それから、二十年間、ずっと姫に仕えていたよ。僕は姫がお産まれになつた時から知つてゐるよ」

クレサイダは煙草を口でぶらぶらと遊ばせながら、既に丘の頂上に立ち、感嘆の声を上げていてるイルサを見詰めていた。不思議とクレサイダがクーレで大虐殺を行つた大奸雄には見えない。二十年間、手塩にかけて育ててきた娘を見守る父親。まるでそうだった。

おい、待てよ！

「クレサイダ、イルサは二十年前に産まれたのか？」

「そうだけど、それがどうしたんだい？」

「いや…大した事じやない」

クレサイダが怪訝そうに眉を潜める。

本当に大したことでは無い。無いのだが…

「っセスー！クレサイダーーー早くおこでよー。」

子供の如く興奮しながら俺たちを呼ぶ声。クレサイダは少し歩みを早めた。

俺の歩みはそれに反して遅くなつっていた。

本当に大した事ではないのだが俺は少なからず衝撃を受けていた。
あのイルサが俺よりも年上だつたことに…。

俺の中で妹みたいな存在だったのにな…。

といつが、俺がこのメンバーで一番年下なのか？

「何、ボケッとしてるの。姫がお待ちだ。早く行くよ」

丘の上では、イルサが大きく手招きしている。
確かにこんな小さい事で悩む必要は無いな。俺の方がイルサより精神的にお兄さんなんだ。そういう事にしておこう。

風の吹く地へ（後書き）

「メテイに始まり「メテイに終わる。」ハドショウつかね。たまには良いんじやないですか。

こんな天見酒に発破をかける、ご感想、ご指摘等お待ちしております。

風に舞つた影

イルサ達に追い付いて、丘から広々と広がる草原を眺めて見る。

「これは確かに絶景だな。俺にとってはあまり良い光景とは言い難いが……。」

草原の辺り一面に敷かれた木屑。端が見えない。その上で羽根を休める生物の大群。この集団に襲われたら、堪つたものではない。

「何とも、攻略しやすそつな国だね。姫、今度征服でもしてみませんか?」

首を振り全面却下する魔王様。クレサイダの方が魔王に向いているのじゃ無からうか?

「しかし、大群とは言え、こんな無防備などここに巣を作つて大丈夫なのかな?」

鳥が木の上など高いところに巣を作る安全性を愈つて良いのだろうか。

「おじさんはわざわざ木の上に巣を作るクーレの鳥達に驚いたけどね。リセス坊、もう一度言つたが斐イフに外敵は居ないのだよ。異世界から以外はね」

安全の保障された世界か。やはり、俺みたいな人間には拍子抜けだ。

「おひと、向こうも気付いたようだよ」

一羽の鳥が此方に向かつて翔んで来て、俺達の前に降り立つ。俺を見下ろす大きさの鷹。

「こらにちは！」

イルサ、お前は警戒心と言う物は無いのか。羽根を畳む大鳥は想像していたより高い声で返事を返した。

「はい、こらにちは。お嬢さん達は異世界者なのかしら？」

「そうです。ヘブルから来たイルサテカです！」

「あら、元気が良いのね。フィフレベヨウソウセイルサテカちゃん」

俺に比べて、イルサはヘブルやクーレよりもこの世界の住民の気質に合っているようだ。部外者を平然と受け入れられる魔王とは如何に？

「久しぶりだね、エイアハク嬢」

「あら、セルツティン。本当に久しぶりね。彼女達をこの案内してるので？」

「ああ、そうなのさ。早速だけど彼女達の話を聞いて、君の知識を貸してやつてくれないかね？」

大鷹に気安く話しかける栗鼠。これもまた、クーレでは見れない光景だう。

「どうぞ、何でも聞いて下さい。お姉さんの知つてる事なら何でも

教えてあげますよ

「僕たちは」の世界の欠片を探している。何処に在るか知らないかい？」

氣つ風の良い鷹のお姉さんにクレサイダが不躾に質問する。そのお姉さんは予想以上の情報を持っていた。

「あら、貴方達も世界の欠片とやらを探してゐるの？」

「他にもお姉さんに世界の欠片について聞きに来た人がいるの？」

悪いことを聞いた。ルクがすぐにその言葉の真偽を問う。焦りからが、いつもの口調が出てない。

「ええ、昨日異界から來た人達に教えたわよ。水の国のメーランスなら持つているかも知れないって。そう言えば、イルサテカちゃんに似ている男性が居たわね。ご知り合いなの？」

イルサは良く知つてゐるだろ? な。全くもつて最悪だ。

カイム達に先を越されてゐる。何としても追い付かなくては……。

「セルツさん! すぐに水の国に案内して! カイムを追わないといみんな早く行こう!」

イルサが目に見えて焦つてゐる。落ち着けと言つて落ち着ける場合でも無いな。確かに直ぐに水の国へ向かつた方が良いな。

「イルサ嬢、ちょっと落ち着こいつではないか?」

悠長なことを言うセルツ。お前はカイムの残虐さを知らないから落ち着けるんだ。あいつは水の国に対して武力制圧ぐらいはするぞ。フィフレの住人やイルサのように平和的性格破綻者じや無いんだ。最もイルサの方が、まだこの状況を理解してるがな。

「エイアハス嬢、我々を水の国へ運んでくれないかね？」

エイアハスはこの頼みを快諾し、他の仲間を呼びに行く。

セルツは平和ボケなどしていなかつた。こいつは予想以上に頼りなる。人の良すぎるフィフレの住人にして、何処かしら強かなクーレ人らしさを感じる。

セルツはクーレで一体何を見てきたのだろうか？
もし、機会があればセルツとゆっくり話をしてみたくなつた。

風に舞つた影（後書き）

まつたりパートからシリアルスパートへ転換して行きます。

シリアルス、シリアルスなのだよ、天見酒。

こう言い聞かせ置かないと天見酒の遊び心が暴走し始めるのです。次話は本当にシリアルスになるのでしょうか？ならないんだろうな、おそれらぐ。

こんな駄目な天見酒に喝を入れてやつて下さい。

「」の女は

エイアハスは一羽。セルツはとにかく、僕たち四人は一つに別れなくてはならなかつた。問題は無い、僕と姫が同じエイアハスに乗ればね。

「クレちゃんの羽根も案外フワフワしてゐるね~」

囁々しくも僕の腰に手を回していくこの諸悪の根源。クツ、リセスは姫との状態なのか。

「叩き落とされたく無かつたら、口を閉じるべきだね」

全くこいつの気が知れないね。僕が姫と同行するのを否定したと思ったら、姫と一緒にではなく、僕と乗りたいなあ等とほざけやがつた。

「クレちゃん、クレちゃん、クレちゃん!」

「なんだいー耳元で叫ぶなよー」

馴れ馴れしくも僕の肩に顔を付けて来る。そこまで、空に舞う逆風の影響で下がつていて音量がより大きく聞こえる。

「クレちゃんは私の事、嫌いかなあ?」

「だあ~い嫌いだね」

今までの恨み辛みを込めて言つてやるー

「私はそんなクレちゃんがあーい好きだあー！」

リセス、お願ひだから代わつてくれよ。この女の言動は僕の崇高な頭脳には、姫以上に理解不能過ぎる。首に手を回すな、必要以上にくつづくな！大人しい僕だつていい加減にキレるよ！

「そんな、可憐な美少女に抱き着かれて天にも昇る幸福を味わうクレちゃんと質問でーす」

君を天に昇らせてやるうか？

「世界の欠片を全て集めるとどうなるのかなあ？」

それを聞くのが今回の拳動の意図か。この女はやはり油断出来なかつた。

「君に言つ必要は無いし、君が知る必要は無いね」

まだ姫にすら教えて無いし、気付いてもいない筈だ。カイムはおそらくウニロガ話しているだろうが。

「フムフム、やはり全部集めると何かあると。もしかして、物語みたいに神様が現れて何でも好きな願いを叶えてくれるとかかなあ？」

「少なくとも神様とやらは出て来ないよ。…世界が元の形に戻る。それだけだよ」

喋り過ぎてしまつたな。これ以上はこの女に喋る氣は無いね。

「世界が元の形に戻る？まあ、良いやー。では、本題でーす」

本題？僕は君が何を言おうと知らないね。無視だ、無視。おい、何故、耳元に口を近付けるの？人の耳に息を吹き掛けるな！

「カイムって何者なのかな？只の反逆者じゃないよね？」

姫の反応を見てれば、勘付けて当たり前か。これは姫の従者である僕が言うべきことなのだろうか。

「フフフ、クレちゃん、可愛いなあ。図星つてことだね？多分、イルちゃんの兄弟ってことだね」

「姫の前でその話は厳禁だ」

「分かってますよ～。ルクちゃんはお子様じゃありません

僕が吐くまでもないじゃないか。とにかくふざながら聞いて欲しい質問ではないね。不愉快だよ。

「辛いんだね？」

「ああ、そうさ。でも姫は辛くても戦うよ。実の兄であり、父母を殺したカイムとね」

その姫の背中を押し続けているのが僕だしね。あいつは姫の為に居てはいけない存在なんだ。姫に全てを押し付けて、あいつ自らそうなったんだ。

「違うよ～。今はクレちゃんと話してるんだよ。クレちゃんの立場は辛いねって言ってるんだよ」

僕が辛い？ハツ、何を言つてゐるんだい。その馬鹿な発言に釣りられて、ルクの顔を見てしまつた。

何で悲しそうな顔で僕を見るんだ。僕は哀れみを受ける必要は無いんだよ。

「クレセヤ とつて悪ぶつてゐるナビ、さつぱつ良い奴だねえ～

「シンマリ笑いこんな事を云へべ。クシ、この屁が～！ 僕は悪ぶつてゐるじやなくて悪なんだよー。あまつ調子に乗るなよ。

「はしゃぎ過ぎやひつたかなあ～？私、眠くなつひたよお。着いたら起いくつねえ～

「寝たがり、落とすよ？」

「私のクレセヤ んはそんないとせしませんよ……

僕はひとことこ呟められていいよひだね。人の背中を枕にさつせと寝やがつた。良くこんな生物の上で強風の中寝れるもんだね。全くこの女の言動は理解できなこみ。

おい、寝たからつて腕の力を緩めるなよー本当に落ちるよー。

全く何で僕が二つの手を繋いでおこりあげなことこけないんだ。
ほんと、姫よりも手のかかる奴だね。

「」の女は（後書き）

シリアル。何の事でしょつか？

いえ、分かっております。急遽この話を入れただけです。クレサイダをいじめたくなったのです。

次回こそは少しシリアルになります。多分ですけど。

緋色に染まる水の国

止むことの無い波の音、辺りに満ちる潮の匂い、そして、視界一杯に広がる夕日に照らし出される赤き水。海だ。まいりじとなき普通の海だ。

クラゲが空を飛んだり、クジラに羽根が生えていたり、カエルが塩水の中を泳いでいたり、大きいイカが浜で昼寝しているという現実さえ無視すれば、クーレの海とそう変わらないさ。普通の海だ。

「潮風が気持ち良いね！」

「本当だねえーー！」

女性陣はとても元気だな。イルサに到つては当然だな。こつちは身体の節々が痛いというのに。

エイアハスに乗りながら、人の身体に身を預けて寝てたんだからな。勝手に寝られたこつちは全く良い迷惑だつた。

落ちないように後ろからしつかり支えなくて行けない、起こさないように身体を動かせない。そんな俺の奮闘を知つてか知らずかイルサは俺の腕の中でスヤスヤと。俺の腕の中で…

「それで、イルサ嬢の抱き心地はどうだったかね？」

気付けば、俺の肩を占拠している栗鼠。

「そんなことはどうでも良いだろー！」

そう、全く関係の無い事だ。イルサの身体の感触とか、髪がむらさ

らしていたとか、寝顔も可愛いとかは！

「リセス坊……若いつて良いね！」

この工口栗鼠親父が！

「そんな事よりメーランスとかいう奴は何処に居るんだ」

「ホオ、急遽話題を変えたね、リセス坊？照れてるのかな？おじさんのジョークだよ！剣を抜こうとしないでくれ！」

俺はクレサイダとは違う。からかわれたぐらいで叩き斬るなんてしないさ。少し試したくはなったがな。

セルツ、そんなに慌てて俺から離れ無くても大丈夫だぞ。

「メーランス殿、お久しぶりです」

ああ、浜で夕日に当たっている大イカがメーランスだつたのか。むづくりと身体を起こすイカ。その身長は一階建ての建築物くらいあるだろうか。

「フム、セルツティーンか珍しい。しかも、なお珍しいことに異界人と一緒か？」

「いやあ～、彼等はいろいろと愉快でね。諸君、彼が夜海を司る精霊、メーランスだよ」

「僕たちは愉快ね……」

不愉快そうだなクレサイダ。俺はこの面子はかなり愉快だと思つた。

お前を入れて愉快なメンバーばかりじゃないか？俺だけは当てはまらないかも知れないが。

「マーランスさん、突然で申し訳ないですけどこれと同じ物を持つてますう？」

ルクが懐から取り出す赤い結片。見知らぬ人、イカ相手に無用心過ぎないか？セルツの件もあるんだぞ。この世界の生物が完全に無害とは言えない。

「ああ、持つてるぞ。私が夜の海底で拾つた物だ。なんならば、くれてやるつか？」

十本ある足の一本を懐（？）に忍ばせて、ゆっくりと動かすマーランス。この世界に人を疑うこととは無縁らしい。お人好しありでいいのか？

マーランスはその大きな足で器用に夕日を浴びてなお青く輝く結片をルクの掌に置こうとする。

「駄目！」

ルクが急に叫んだ。

マーランスの身体を貫く無数の氷の刃。

「マーランス殿！」

セルツの叫び虚しく、砂煙を上げて地に倒れる巨体。

黒赤い空に舞い、砂地に落ちたフィフレの欠片。その鈍く光り続ける欠片を手に收める為に動く俺とクレサイダ。その俺たちの顔すれ

すれを通る鎗。

遠くから魔鎗に足止めを食いついた俺たちの前に、夕日に生える赤
髪、赤眼の男が立ちはだかる。

その男の後ろで、悠々とファイフレの欠片を拾つ特徴的な杖を持つ女。

やはり俺たちは危機感が足りな過ぎたらしく。

緋色に染まる水の国（後書き）

よーし、やつと戦闘シーンに突入だ。天見酒の最も不得手な分野ですな！

怒る紳士

己の甘さを後悔する。この世界にも平和的対応を念頭に置かない奴も居た。そう俺も甘かった。それがメーランスを殺した。

「リセス、目前の敵に集中しないと一瞬で死ぬよ。赤の他人が死んただけだ」

分かっている。そのお前らしからぬ発言の方が驚きだ。いや、クレサイダはこういう奴だったな。

「やはり来たかクレサイダ。クーレの欠片も持つて来たようだな」

拳銃を二口に向けていたルクに顎を向けるカイム。見張つてやがったな。やはり、ルクの先程の行為は軽率過ぎた。

「別に君に渡すために持つて來た訳じゃないよ。とことん君たちの邪魔するためにさ、ツ姫！」

イルサにしては耐えた方だろうが、真っ先に動いたイルサに敵の矛先は向かう。顔傷にハツシュカレ。しかし、イルサは空中へ回避。その前、カイムに一直線。

カイムとイルサの剣がなる。明らかにイルサの力負けだった。砂浜に背をつけるイルサ。クレサイダのカイムに向けた魔法により事無きを得たが、お前は無茶のし過ぎだ。

「全くお前は話も聞けんのか？相変わらずのアホだな」

大層気に障る台詞だが、カイムを睨んでやる場合ではない。俺とル

クは、顔傷とハシュカレ、ウーロから片時も目を離せる状況ではないからな。囮まれた。戦況は最悪だ。そんな事態を知つてか知らざるか、イルサは口を開く。

「ルクちゃんに手を出したら、本気で怒るよー。」

既に怒りの域に達しているイルサに対してカイムは穏やかに話す。

「やはりお前に魔王は向かない。魔王の証を我に渡せ、イルサ」

「絶対に嫌！」

俺はカイムに賛成しよう。イルサは魔王に向かない。カイム方が魔王職には向いてるだろ? だからこそ渡せない物だ。

「イルサ、聞き分けが悪いぞ。素直に渡せ。此方は力付くでも良いのだと？」

カイムの子供を叱るような口調は俺の機嫌を逆撫でするだけだった。イルサに今更兄貴面か？

しかし、流石のイルサもこの場で動きようが無いのは分かっているだろう。沈黙を選んでいる。

いつでも俺たちに集中砲火ができる状況を覆す方法は何か無いのか。

突如、地響きが起きる。砂を豪快に尽き破り現れる無数の木の根。カイム達がその地下からの不意打ちに吹き飛ばされる。カイム達を拘束しようとする根に、包囲網が乱れる。カイム達の拘束は無理だったが、俺たちがその窮地から出るには十分だった。

そいつの小さな存在に気付いてなかつたカイム達に予想は出来ない

だらうし、俺達もそいつを忘れていた。

「カイム君、少々、おいたが過ぎるよ。おじさん、年甲斐も無く怒つちゃたよ?」

俺たちのやり取りの間に生まれていた俺の腰ぐらいの若木。それに片手を付く男。顔を傾けて、その頭には少し大きめのシルクハットの位置を片手で正している。その表情は帽子と腕に隠れて読み取れない。最も表情が見えてもその感情は読み取り難い奴だが。

「悪い子な君たちにはお仕置きが必要なようだね。大丈夫、おじさんは紳士だから殺しあしなさい」

シルクハットを弄のをやめて顔を上げるセルツ。その栗鼠は一ヒルに笑つていつのように見えた。

「なんかセルツさん、格好良いね~…」

ルクがボソッと言つ。

俺の手のひらに収まるサイズの栗鼠じゃなければな。何と言つが、美味しいこといろをセルツに持つて行かれてしまった。

暴れる光、そして還る

騎士団員養成所の魔法学。俺はこの科目は苦手であり、実技はとにかく筆記試験前にはレクス兄さんに良く泣き付いたものだ。その苦難のお陰で少々は知識が残っている。

精靈魔法。クーレで使われる通常魔法、自然現象を否定、排除して新たな不自然現象を起こす魔法に対して、自然現象を肯定し、自然現象を変化させる魔法。大いなる自然に従いながら、自然を従える大いなる魔法。その為、通常魔法よりも威力が大きくなる。何が言いたいかと言えばつまり、どんなに温厚でも精靈魔法を行使することの出来るフィフレの精靈を怒らせてはいけないと言うことだ。

セルツにより成長を続け、我が物顔に暴れる無数の木の根に流石のカイム達も翻弄される。鞭になり、縄になる根。その一本は脆いが、数が数だ。

「リセス、今のうちに僕らは欠片を奪つよ…」

「援護はルクちゃんに任せなさい！」

「なかなか捕まってくれないねえ。おじさんは足止めをしよう

何とも頼りになる面々だ。

何も言わずにイルサが先陣を切る。セルツの魔法に苦戦するカイムに一撃を放つ。カイムは木の根が届かない空へと待避。イルサが違う。

道は開いた。狙うはマスナー。ファイフレの欠片と厄介なドゥーチの杖。こいつさえ奪つてしまえば…。抜いた刀はマスナーには及ばない。セルツの根を器用に避けて顔傷が俺の行く手を阻む。クソ、クレサイダは…、魔鎗が遮るか。

セルツもこれだけの根を一人で操作している。ウニロの足止めをしているだけで良くやつてくれる方か？

「はい！注もお～く！」

場を弁えない発言。皆の視線を一点に集める女性。マスナーの背を取り、拳銃を突き付けるルク。やつてくれたな。

「クッククック、このお姉さまの頭を吹き飛ばされたくなかったら、全員武器を捨てたまえ～！」

気分はすっかり小悪党だな。しかし、いい働きだぞ。

「お姉さまは欠片と杖を渡してね？」

「舐めないでね、お嬢さん？」

ルクの生き生きした笑顔にマスナーは従う気は無かつた。振り向き魔法を使おうとするマスナー。先に発砲音が響いた。しかし、マスナーは既に引き金を引いていた。銃よりも恐ろしいものの引き金が引かれた。

ルクの胸元から出る赤い光。マスナーの手に持つファイフレの欠片も青く強い光を宿す。そして、白く輝くドゥーチの杖。何が起こった？

「これは創世の杖のせいですか！マスナー、まだ早過ぎます！止めなさい！」

「無理です！抑え切れません！」

ウーロの怒号にルクに撃たれた肩から血を流しながらマスナーは応える。この現象はマスナーの所業ではないらしい。

「二つ欠片に反応したって事かい！何をやつてんだよ！」
クレサイダも敵意を捨てて叫ぶ。何が起こっているか分からぬが相当にやばい事態だと言うことは分かる。

「止まれ！止まって！」

マスナーの願い虚しくドゥーチの杖の光が一層強くなる。既にこの突発的事故に戦闘は一時休戦されていた。

「リセス、セレミスキーダ！マスナーをゼロランドに閉じ込める！」

状況もクレサイダの言つていることも意味不明だが、クレサイダにセレミスキーダの入った提げ鞄を投げ渡す。

その時、マスナーの杖の先の宙に亀裂が走り、空間に穴が空く。訳が解らぬすぎる。

「…」これは世界が元に戻るのか？

地に降り立つたカイムが言った。世界が元に戻る？

「くそ、間に合わないのか！」

俺たちの中で唯一この事態を理解出来るだらうクレサイダが諦めを認めた。

「駄目え～！」

イルサが不用意にマスナーの放つ光へと突っ込んでいく。イルサが紫色に輝いたように見えた。

そして俺達は光に隠された。

俺には何が何だか全く分からぬ。ドゥーチの杖が、世界の欠片達が何を起こしたのかを。

次の瞬間には俺達は還っていた。

暴れる光、そして還る（後書き）

うん、上手く書けない。上手く書きたあーい！

天見酒、修行中です。修行します。頑張りつよ、天見酒。

意味不明な文を失礼しました。

聖地と戦いと遺志を継ぐ者

眼を眩まし続けた光が止む。

「……、どこ？」

俺の頭にイルサの質問に直ぐに答える余裕はない。

俺の目の先に立つ老人。未だに頭では理解出来ていながらその老人の顔に見覚えがある。鍵を象ったクーレなら誰でも知っている聖章が大きく描かれた修道服。そして、新聞の写真で見たその顔。

何でこのお方が俺の前に居るんだ？

後ろを伺うと聳え立つ聖人セイン・セレミスの墓とその横にちんまりと立つ二十年前のルンバット争乱の慰靈碑。そして、この俺達の登場に、啞然としている老人を見守つていただろう大勢の信者達。何で俺はここに居るんだ？

「賊だ！教皇様を御守りして、この者達を直ちに捕らえよ！」

セレミス教シンボルマークを彫った鎧を装着している男が号令をかける。動き出す聖騎士団。

「厄介な所に出ちゃたねえ。どうする？全員殺っちゃうかい？」

小声で物騒な相談をしてくるクレサイダ。その提案は却下だ！

「駄目だ、ここで聖騎士団を攻撃したら、セレミス教徒全員が敵に回る。ここは素直に従い、レッドラート総長やシーベル工国王に説明を頼もう」

自治領であるルンバット、しかもセレミス教大本山セレミス大教会に不法入国した俺たちは犯罪者だ。しかも、下手に暴れれば教皇暗殺未遂が濃厚になってしまふ。セレミス教と戦争をやらかすのはまずい。

「僕は処刑されなきや別に良いけどね。カイム達は……」素直に捕まる奴等じゃないな。聖騎士団員達の悲鳴が上がり始める。シャプトという魔力構成体のウニロの無限とも思える魔力を用いた魔法によつて降る氷柱の雨。それに翻弄された所にカイム、顔傷、ハシュカラが聖騎士へ斬り込む。

「カイム達を止めるぞ！」

俺の焦つた号令に反応するカイム。

「ハシュカラ、そここの老いぼれがこの組織の頭なのだろ？首を取れ！」

聖騎士団員の血に濡れた剣を片手に、簡単に言つてくれるカイム。ここで教皇様を殺されたら俺達の立場も益々無くなつてしまふ。ハシュカラが魔鎗を教皇様に向ける。動かそうとした俺の足が止まる。教皇様を守らないといけない。魔鎗を通することは出来ない。集中しろ、リセス！魔鎗は不規則に動くぞ。全部読んで、全部防げ。魔鎗が動めいた。

その人が俺の前に立つたのは分かつた。その人の前では魔鎗の動きがとても遅く感じた。不規則に動く魔鎗を弾く、その手と剣の動きは全く見えない。それほどその人の用いるサーべルは速すぎた。クーレで唯一勇者に勝つた人、魔鎗ごときに負ける人では無かつた。

「お久しぶりです。ハシュカラ中尉。また、そいつと悪ふざけをし

てるんですね。大人しくして頂けないでしょ？」「

ハシュカレが魔鎗による無意味な攻撃を止めたのを見計らつて、そ
の人は話し掛けた。

「久しぶりだな。ドーヌ曾長。いや、今はドーヌ自治領領主殿だつ
たな。そこを退け、ドーヌ」

ハシュカレは話をする気は無いようだ。魔鎗が動き出す。
カーヘルさんがそれを受ける。

「聖騎士団、此方は攻撃しないで下さい！リセス君。ハシュカレ中
尉は僕が抑えます。後を頼みます。ルクちゃんは大人しくして下
さい！」

それだけ言うと颯爽とハシュカレの懷へ駆けるカーヘルさん。とて
も心強い味方が現れた。

「ウウ、私も役に立つよーー！」

「何かムカつくよね、あの小僧は」

クレサイダとルクのカーヘルさんへの不満はこの際関係無い。不謹
慎ながら、俺はあの剣聖のカーヘル・ドーヌと共に戦える事に感激
を覚える。しかも、あのカーヘルさんに後を任せられた。俺のやる気
が上がるのは当然だ。

イルサとクレサイダが、カイムとウニロ、マスナーに向けて無数の
光球と火の球を放つ。しかし、ウニロの魔術防壁は破れない。周り
の聖騎士達が邪魔だ。側にそいつらが居ることでイルサが力を抑え
ている。

ならば、俺がカイムを斬ると行きたかったが、横から出る刃。ギリギリ避ける。顔傷の一の太刀はルクの放った殺傷力の無い風魔法に防がれる。ルクの神懸かつた魔法コントロールは流石だ。怯んだ顔傷へ横に薙ぎ払うが顔傷が何とか刀を縦に持ち直し防がれる。

俺の横を氷の刃が通る。クレサイダが魔法防壁で防いだが、魔法合戦は不利だろう。相手は遠慮無く力を奮えるが、こちらは聖騎士達を気にしなくてはいけない。

聖騎士達も必死だろうが、邪魔で仕方が無い。

「聖騎士団全員、そのシャプトの周囲から待避して下さい！」

そんな俺達の思考を読んでか、ハシュカレを追い詰めるカーヘルさんが突然号令を駆ける。

「雑魚どもを引かせてくれるとほ、ドースとやら有り難い。手間が省ける」

カイムがカーヘルさんに皮肉を言つ。クレサイダ、あの馬鹿たれに最上級魔法をお見舞いしてやれ。

「流石はカー君！お姉さんの事をちやんと分かってるじゃない。正に以心伝心だねえ～」

その必要は無かつた。退いた聖騎士達の隙間から出てきた女性。杖の先から赤い光が走る。その弱々しい魔法はウーロの魔法防壁を貫く。

神の「」とき一撃。ウーロの黒き身体は炎へと消えた。その女性の鮮烈な登場にまるで魔法に懸けられたように周囲から動作が消える。

「やつぱり、私は派手にいかないとね？それにしても、性慾りも無くまた現れたんだね～、貴方は。しかも、私のルクちゃんにちょっかい出して？」

燃え上がる炎にその人の独白は続く。

「知ってる～？今日は貴方とこの教会で遊んだ日から、ちょうど二十年目何だよお～？今度はしつかり焼いて上げるからね～」

その人は俺の知っている聖女様では無かつた。いつもの笑みの中に威圧感を称えている。これが聖女ニーセ・P・レッドラーートの存在感か！

「ある意味、カイムより厄介な女が出て来ちゃったよ

クレサイダがぼやいた。

聖地と戦いと遺志を継ぐ者（後書き）

皆さん、長らく御待たせしました。おなじく『冒険記シリーズ』で登場キャラ人気投票やつたら、堂々の一位を果たすでしょうねこのお方の登場です！

うん、勿論出しますよ。前作の主人公より目立つてゐるんだもんこの人は。

一つ言つておこう。カー君はこの人のおまけじゃないよ？この一人のコンビが素晴らしいのだよ。

聖女の過ち

「一ーセさん、ウニロへの魔法の難から辛うじて逃げたカイムは言つ。

「前回にしろ、今回にしろクーレ人は予想外に強いものだな。前代魔王が征服しそびれたのも納得がいく」

マスナーが水魔法でウニロだつた炎を消す。いや、あれだけの魔法を受けてなお、ウニロは僅かになつた身体で蠢いていた。

「やつぱり、一発じやあ足りなかつたかなー。もう一発、ご馳走してあげちゃうよー、クレサイダ君？」

「一ーセさんがまた背筋を凍らせるような笑みを浮かべる。待て、クレサイダ？俺の隣に居るが…。

「嫌な奴と間違えないで欲しいのですね」

ウニロが悪あがきに氷柱を放つ。それを軽々と避ける一ーセさん。

「マスナー！」

カイムがマスナーに呼び掛ける。マスナーを中心に地面に現れる魔方陣。その魔方陣もカイムが魔法で出した黒い霧に一瞬で隠された。

「逃がさないよー！」

「逃がすもんか！」

そのカイム達が居るだろう方向へクレサイダの放つ上級火魔法と二
一セさんの魔法が重なる。黒い霧が晴れた後に残つたのは、大穴の
空いた地面に燃える炎。

「また、異世界に逃げられたの？」

「いえ、あれは転移魔法です。まだこの世界に居るはずです」

クレサイダが苛立たしげにイルサの質問に答える。
一時の安堵に俺は気が抜けてしまつていた。

「君たちは一体何者かね？」

そう聞かれる教皇様に現状を思い出す。

「えっと、私はヘブルから來た……」

「姫、待つて下さい」

クレサイダがイルサの正直な返答に待つたをかける。
正直に事情を言つても信じて貰える保障はなく、良い嘘も思い付かない。俺たちの周りを囲み始める聖騎士団にそのまま捕縛は勘弁願いたいところだ。

「教皇様、申し訳ありませんがこの者達の身柄を私にお預け下さいませんか？」

「しかし、それは聖女様と言えども」

二一セさんから有り難い助け船が来た。渋る教皇様に二一セさんは優しい笑顔で諭すように話す。

「此方に居るのは私の娘。そして、そちらの青年は、あの天道の賢者ライシス・ネイストの『子息ですよ』」

「一セさんの言葉に周囲がどよめく。視線が俺へと集まる。そして、一セさんの止めの一言。

「もし、ここで彼への対応を間違えたとしたら、あの賢者は魔王さえも制した力を持つてルンバットを一夜で滅ぼすかもしれませんよ？」

如何に我が父が凄いのかが分かつた。教皇様が俺たちの身柄を一セさんに渡すことを即決するほど、父上の名は偉大なのだ。最も父上は歴史上最高の魔導師だが、この聖都を攻め滅ぼすような蛮行を行つ筈は無い。父上は案外信心深いからな。

「一セさんの付いて来なさいににより、無言でセレミス聖教会の中を歩く俺達。

いつの間にかセルツがイルサの肩に乗っていた。こいつもこの世界に来てしまったらしい。何故先程の戦闘に参加しなかったか問い合わせようと思ったが、その辛そうに息をする姿に責める気は失せ、ただ感謝の念が生まれる。こいつは巻き込まれただけだ。

それより、セルツ以上の不安要素がイルサの隣を歩いている。一セさん、カーヘルさんのかつての宿敵。争いが起こらないことを祈るしかない。

「どうぞ、入って下さい」

賓客室と書かれたドアを開けて、俺達の入室を促す一一セさん。どうやら、この教会で賓客として歓迎されていたらしい。この人に 대해서は当たり前の待遇だな。

一番最後に入つたカーヘルさんが扉を閉めた直後だった。

「ルクちゃん」

一一セさんがルクに抱き着いた。それは親子の感動の再会ではなかつた。

「私は、魔話器でリセ君や他の友達と遊びに遠くに行くだけだって聞いたんだけどなあ。だから、ジンが大袈裟に心配するのを説得してあげたんだよ。リセ君が居れば大抵は大丈夫だしねえ。……でも、これはどういうことなのかな？」

なるほど、一一セさんはルクの嘘を信じて、ジンさんの親バカによるいつもの大袈裟な心配だと思っていたのか。

「えーとね、お母様。これはイルちゃん達と遠くに遊びに行つた訳でも合つてね」

一一セさんに至近距離でにっこりと見詰められるルクの言についてもの調子が無い。

「へえー、そうなのー。あの黒い「うねうね」で陰険なクレサイダと喧嘩するなんて、過激な遊びだね？」

一一セさんの言つ通り、クレサイダと喧嘩するのは少々過激になるかもしないな。

「えっと、クレちゃんはあの喧嘩するけど、いい人だよ~」
それは判断が付かないな。

「ルクちゃんを殺そうとしたのに?」

ニーセさんの表情が氷付いた。ルクの顔は驚きを見せ、クレサイダを見る。

「クレサイダはそんなことはしません! クレサイダは確かに少し性格がひねくれてるけど、そんなことは絶対にしないよ!」

「ニーセさん、クレサイダはイルサの言つたように性格がひねてます、俺も仲間を殺す奴じやないと想います」

イルサが声をあげる。俺もこじぞとフォローを入れておいてやう。クレサイダは相変わらず、壁に凭れかかり俺達を眺めている。

「えつ? 仲間つて?」

驚きの声をカーヘルさんが上げた。

「ちょっと待つて? わたき中庭に居たシャフトは誰なの~?」

ニーセさんがルクを離して聞く。それに答えたのはクレサイダ。

「あれはウニロだよ。同じシャフトだからって、僕があんな奴と一緒にされたら溜まつたもんじゃないね」

「此方がクレサイダ!」

カーヘルさんが取り乱すのを初めて見た。腰のサーベルに手が伸びている。

「あれれ〜、そのイラつかせる喋り方は本当にクレサイダ君みたいだねえ？私に殺られに来たのかなー」

「はあ、僕は君の喋り方が苛つくよ。殺る気なら僕は手を抜かないよ？」

二ーセさんが杖をクレサイダに向ける。これは非常にまずい状況だ。

「クレサイダ、駄目だよ！ お願いだからやめて下さい！」

「…姫。チツ、姫にここまでさせたんだ。僕は引くよ」

イルサが二ーセさん、カーヘルさんに頭を下げている。

「クーレの淑女、紳士よ。この高潔なる話し合いの場を血で汚すような行為は止めようではないか？」

イルサの肩で語り出すセルツの制止効果は絶大だった。

「栗鼠が喋つたあー！」

クーレ人にとっては驚きの生物だな。

悪と正義

我ながら貧乏くじを引かされたものだ。

始終黙り切るクレサイダにカー・ヘルさんから俺に説明を求められる。黙つて聞いている二ーセさん、俺の横に立つカー・ヘルさん。イルサ、ルク、セルツからの手助けは無く、気まずい雰囲気の中、一人で口を動かす俺にかかるたたかれたフレッシャーは相当なものだった。俺がその難境を終えて、俺達の前で二ーセさんは一度だけ口を開いた。

「大体は分かつたよ」。リセス君、今日は疲れたでしょ？ ゆっくり休んで良いよお？ あつ、ルクちゃんはここに残ろうね」

扉を開ける二ーセさん。ルクを残して出て行つてと言つてゐるよりも取れる行動。余程、クレサイダとは居たゞ無いようだ。

説教を受けた気分な俺は、カーヘルさんを先導に従い各々の部屋へと案内される。セレミス教巡礼者用の粗末な部屋。ベッドが六つ並ぶだけ部屋。

疲労に任せて何回も微睡むも深い眠りに着けない。シーベル工北端育ちの俺にルンバットの暑い夜は辛い。眠りに着けない原因はそれだけでは無いのだが。

身体を起こして周囲を見る。イルサは俺の向かいのベッドで暑さなど気にせずすやすやと気持ち良さそうに熟睡中。セルツはその隣のベッドの枕の上で丸まっている。

ルクはまだ二一セさんの所に居るのか。

クレサイダが居ない。嫌な予感が頭を止まること無く過つた。
クレサイダを探すために、俺は急いで部屋を後にする。

二人は、教会中庭セイン・セレミスの墓の前に居た。しかし、二人が見ているのはその横に立つている小さな慰靈碑。

何かを話している。声を掛けるべきだろうが、生暖かい壁に背を預けて聞き耳を立てさせてもらひ。己的好奇心には負けた。

「それで、君は僕を殺したくは無いのかい？」

表情は伺えないがクレサイダはいつものように皮肉な笑みを向けることだろう。

「殺したいですよ。私は貴方を殺す為に剣を握つて来たようなものですから」

カーヘルさんの表情も読み取れない。しかし、父上やアレンさんのクレサイダへの態度とは明らかに違うだろう。俺にはカーヘルさんを殺意に駆り立てるものは分からぬ。俺の周りの大人達、父上の仲間達はルンバットの争乱については誰も語らなかつた。二十年前、この地で何が起きたのか。この地でクレサイダは何をしたのか。俺は知りたい。

「それならば早くかかつて来なよ。それとも、君はまだ二一セ・パルケストやケルック・ラベルクが居なければ一人で何も出来ないのかい？」

一瞬、止めに入るべきか迷いが生じたが、カーヘルさんが此処で剣

を抜く姿は浮かばなかつた。一步踏み出した足を戻す。

ケルック・ラベルク。何処かで聞いた名だ。昔、誰かから聞いた名前。ラベルク、旧ガンニア連邦地方では良く見掛けるありふれた家名だ。誰か似た名前を聞いただけかも知れない。

「やうだね。私は一人じや何も出来ないですよよ。話は代わるけれど、君はアレンの率いる第3独立遊撃隊に会いましたよね？」

「それがどうしたつてのさ。アレン・レイフォートはのほほんと僕を見逃したよ」

「ミシャちゃんと話をしましたか？」

「これで話は繋がつたのか。ミシャさんの家名もラベルク。これは偶然の一一致では無いのだろう。

間が空いてクレサイダが言つた。

「僕がケルック・ラベルクを殺したと彼女に言つたよ。それぐらいだ」

クレサイダは今、どんな顔しているのだろうか。俺には予想出来ない。笑っているのか、嘆いているのか。

「聞いても良いですか？」

カーヘルさんの凛とした声が響いた。

「ケルック・ラベルクは強かつたですか？」

一陣の温い風が吹いた。クレサイダが口を次に開くまで時は流れた。

「それは僕に対する嫌味かい？僕をあそこまで追い詰めたのは…あの男だけだよ。そして、邪魔だから殺した。それだけだよ」

今のクレサイダの声は聞いた事が無かつた。この奸雄の過去を、想いを知らなすぎる人間が聞く必要の無い声。

カー・ヘルさんが何かを言つた。クレサイダにしか聞こえない小さな声で。

その時、クレサイダが激昂した。

「ふざけるな！何なんだよ君たちは！僕はあいつを殺つたんだよ！僕が憎ければ殺せば良いさ！」「あの人はそうしただろうからですよ。それだけです。当時四歳の娘すら学んだことなんです。これがあの人の正義なんですよ。あの人の守つたあの人の世界です」

ケルック・ラベルク。父上の言葉を思い出した。愚かなる偉大な英雄。その人が守つた世界とは…。俺には理解出来無い。

「ふざけるなよ！僕に正義なんて言葉が分かるか！僕は悪だ！裁かれる存在なんだよ！」

クレサイダは悪。誰が決めた？悲しくもそれはクレサイダ自身だ。

「君が悪だとしても、私に裁く権利は無いよ。裁いて欲しいならば

カー・ヘルさんが言葉を切る。俺もクレサイダを裁けないだろつ。

「リセス・ネイストに裁いてもらひなさい。彼の方が君を裁くに相応しい」

俺がクレサイダを裁く？

カー・ヘルさんがいきなり声を大きくする。

「そういう事で後は任せました。リセス君」

バレていた。観念してゆつくり姿を曝す俺。気まずい。任せると言
われても困る。

カー・ヘルさんは俺の横を通りて行く。

残された俺とクレサイダ。お互に醜態を見せ合い何とも辛い。
クレサイダが立つ隣に行き、逃げる為に煙草に火を付ける。

「盗み聞きとは良い度胸だね？リセス君」

「裁かないぞ」

俺の意味の通らない発言。

「お前は裁けない。俺はそれしか言えない」

クレサイダが俺を見ているのを感じる。俺はその眼に気付かないふ
りだ。今のお前の顔は見たくない。

「リセス」

クレサイダが俺の顔を見ようとする。絶対に見るものか。今のお前
の顔は見たくない。

「煙草を僕にもくれよ」

クレサイダから吐かれる煙が俺の吐く煙と戯れる。そして空気溶け込む。

俺は正義なのか、それとも悪なのか。俺には分からぬ。

親の心子は知らずに知る

一人取り残されてしまった可哀想な私です。裏切り者どもが。

「それで～？」

久しぶりに冷や汗が流れてるよ。

目の前で微笑む私の最大の恐敵。それで～？は私の方ですよ～。

「ルクはこの冒険にまだ付き合つのかなー？」

お母様、お得意な笑顔じや無くなつてるよ～。瞳と声が冷えきつてますよ～。

そんな悪魔に対してもルクちゃんは、健気に立ち向かつて行くのです。

「最後まで付いて行くよ～。クレリちゃんやイルちゃんが心配だもん！」

私が付いて行つて何が出来るか分からぬけれど。でも、付いて行きたいのだあ！

「そう…」

お母様がとても悲しそうに笑う。かなり罪悪感が。と、思った途端だったよ～。お母様がその御年に似つかわしくない少女のような素敵な笑顔を浮かべたのは。数々の経験から、私の背筋に悪寒が走りましたー。

「クレサイダとイルサちゃんが心配かあ～。本当にそつなかなあ

う。ルクちゃんはリセ君がとても心配なんじゃないかなあ～

何を言つてゐるの、」おばさんは――

「リツ、リセ君は大丈夫だよ！何だかんだ言つて強いし、結構しつかりしてゐるし、私が心配する事なんかないもん！」

そうだよ～。リセ君は案外凄いんだよ～。私は全然焦つて無いよ～！

「うん、ルクちゃんの気持ちはよく分かつたよ。リセ君をとつても信頼してるんだね～」

全然分かつて無いよ～！そこまで信頼して無いし、リセ君は私が居なければ全然駄目だし。そう、私が側に居なきや。あつ、私は全然焦つて無いですよ～。

「素直にならないとイルサちゃんに盗られちゃうぞ～？」

その乙女の心を十足で踏み荒らし、ダンスまで踊る言葉に、私はウーと小さく唸るしか出来ない。だって、リセ君とイルちゃんは仲良しだとしてもお似合いなんだもん。

「ルクちゃん、可愛いなあ～」

私の熱を帯びた顔を見ながらクスクスと笑う悪女。クウ～、悔しいよ～。

「ニーセさん、入りますよ」

ルクちゃんの日頃の行いの良さに天が助けを送つてくれました。

「眞さんを部屋に案内してつて、チヨツ！」

入つて来たカー・ヘルおじ様にびっくりハグでーす。

「カー・ヘルおじ様、ルクをお嫁に貰つて下さい！」

お母様の矛先をカー・ヘルおじ様に向けさせてもらいますよ~。

「ルクちゃん。私は既に妻が居るからね。残念だけど、それは出来ないよ」

爽やかに微笑みながら、さらつと流すカー・ヘルおじ様。子供の戯言を大人の貴祿で流しちゃいます。でもね、甘いよ~。此方には最恐の味方が居るのだ。

「もお、カー君はあ！家の子の純粋な想いを簡単に流して~」

お母様、本領発揮かな。

「ドーグ領領主様何だから、ルクちゃんを側室においてあげてよ~。ハーレム作っちゃいなよ~」

「ルクは、カー・ヘルおじ様に愛されればそれでも十分です」

「私には今の妻が居れば十分ですよ。可愛いルクちゃんならば私たちにおじさんより、もっと良い人を見つけられるよ

笑顔で大人な対応だ。つまんないなあ。

「ルクちゃん。諦めなさいね～。カー君はティスちゃんが大好きで、夜の嘗みもティスちゃんで十分なんだって～。ところでティスちゃんとは今も仲良くしてゐるのかな～？」

「チヨシ、一一セさん！子供の前で何て話をー！」

カーヘルおじ様の顔は真っ赤です。流石はお母様。この人をからかう腕は一流だあ！私も修行しないとね～。

「へえー、やつぱり仕事ばつかりしてるんだあ～。愛妻も愛娘も居なくて、仕事に生きる寂しい男だねえ～」

寝耳に聞こえてきた、お母様の声。魔話器で話している相手は直ぐに分かつたよ。これは今日の復讐チャンス到来。明日の朝、からかつてあげよ～。狸寝入りでも、口角が上がっちゃうよ。

「認めるよ～。ルクちゃんがクレサイダについていくと。本当にほとお～ても嫌だけどね～」

お母様の愉しげな声に、また、私の心が暗くなつちやいます。やつぱり、反対したいんだね。

「でもね～。昔は色々あつたけど、やつぱり楽しかったんだよね～。皆と旅していた時は

お母様は私が小さい時から、昔の仲間たちとの話を本当に楽しそうに語っていた。

「私はルクにも楽しんで欲しいんだ～。辛いことなんて山ほどある

だらうけど、仲間とふざけたり、色々なものを見て、学んで、強くなつて、恋して」

何ででしょ「。」の声はとても心が暖まる。

「早く無いよ～。全く、娘馬鹿だね～。ルクちゃんはもう十八です。恋ぐらじしますよ～。駄目で～す。貴方には教えません。貴方に言つたら、ルクちゃんの未来の旦那様を殺し兼ねないからね～」

魔話器の向い側でお父様が言つた言葉は良く分かっちゃう。でもね、お母様。別にリセ君はその私の未来の旦那様とかじゃないんだよ～。

「分かるよ～。私の娘だもん。私にそつくりで恋に不器用だけどね

少しムツとしちゃうよ。別に不器用じゃないよ。

あれ？お母様の声が変わつた。何か緊張してる？

「あ～、あのね。素直になれないんだよ～。そつ、その本当に好きな人には抱き付いたりなんか絶対出来なくて、スッ、好きとか上手く言えなくて、えつと、うん、これは、そのルクちゃんのことだよ

」

ウゥー、確かにリセ君に抱き付くなんて無理だよ～。面と向かつて好きなんて言えないよ～。

でも、ちょっと待つてね～。それは本当に私の話なのかな～？ねえ、お母様？明日の朝が楽しみだなあ。

「うん、10日後には帰るよ～。あ～、その、あんまり仕事に根を

「話の過ぎなこりつね～

魔話器を置くお母様。明日の復讐の準備は万全でーす？可憐いな～、
お母様は。

お母様は直ぐにベッドへと入りました。私の寝ているベッドに～。
あれ～、おかしいなあ～。隣のベッドが空いてるよ～。

ベッドを移らぬ、私の背中に抱き付くお母様。首筋に息が当たつて
るよ～。

「それで～？？」から聞いてたのかなあ～？」

やつぱりルクちゃんはお母様には敵いません。

親の心子は知らずに知る（後書き）

腰が痛い。何故か執筆活動に専念できますね。ほとんど動けないからでしょうね。

久々に確認しましたら、お気に入り登録者数が100人を突破している。

皆様、本当にありがとうございます。

魔王な証明

外は雨が降つていて、憂鬱な日かな。私は勢いよく降る雨は好きなんだ。何故かわくわくするから。でも、ゆっくり降る雨はあまり好きじゃない。外に出れないだけだから。どうせ降るならば、一杯降つて欲しいな。雨だあ～って感じで。

お父様達は何をやつてるのかな。

「姫、しつかり聞いて下さい」

「いめん。クレサイダ」

私の教育係のクレサイダは勉強になると厳しくなる。私の苦手な算術になると特に。早く終わらないかな。

願いは叶つた。でも、意地悪な方向で。初めはこの城に雷が落ちたのかと思った。そのぐらい城が揺れた。でも、違つたよ。意地悪な方向で。

「姫はここに居てください！」

クレサイダは私の部屋から慌てて出て行く。取り残された私。好奇心を抑えて、部屋で良い子にしてたよ。

大分時間が経つて戻つて来たクレサイダ。その姿は血塗れで、涙にまみれてた。クレサイダが泣いたのを見たのは、これが最初で最後。

その手の上に赤く染まつた布、そこに輝く紫の結片。

「イルサ姫、今日から貴女は魔王イルサテカです」

私は恐る恐る聞いた。お父様は一体どうしたの?と…。

これは夢だ。現実の中の夢だった。

私は今クーレに居るし、お父様がどうなつたのか知つてゐる。

ここは少し暑いなあ。汗でびっしょりだよ。

あれ、クレサイダが居ない。リセスも。何で居ないの?何処に行つたの?夜は寝る時間だよ。怖いよ、一人にしないでよ。

「イルサ嬢、何処に行くのかね?」

私が一人を探しに行こうとする、セルツさんから静かな声がかかつた。一人じゃなかつたことに少し安心出来る。

「リセス坊たちは、時期に戻つて来るさ。イルサ嬢が此処に居なかつたら心配するから此処に居なさい」

「はい」

ベッドには戻つたけど、リセス達が戻つて来るまでは寝たくない。ゆっくり寝れそうに無いから。

ふと、魔王の証を取り出して見る。紫色に光る。あの時と変わらない。私とお兄ちゃんとは違つて。

「それはヘブヘルの世界の欠片かね?」

セルツさんも身体を起こして、私の持つ欠片を見ていた。

「うん。魔王の証もあるんだよ。これは魔王だけが持てるし、これがあると、魔力が切れなくて、魔法をどんどん使えるんだよ」

でも、これが在ったから、大切な人が私から居なくなつた。お父様もお母様も、お兄ちゃんも。

「イルサ嬢、少し悲しそうだね？」

とても優しい声だった。だから、言えた。

「欲しく無かつたんだ。でも、私が持つてゐる。本当はお兄ちゃんが持つてゐる筈だつたのに。私は魔王になる筈じゃなかつたのに」

そうだよ。私は魔王は出来ないんだよ。魔導長クレサイダや執政長シユナアダが手を貸してくれなければ。

「イルサ嬢は魔王が嫌なのかい？」

「違うよ！私が魔王なのが嫌なんだよ。私はお父様みたいな立派な魔王じや無いもん」

「では、立派な魔王つて何なのかい？」

それは……、お父様みたいな人で……、ヘブヘルを治めて……。

「王に必要なのは知ることだ。良いことも悪いことも。おじさんが昔会つた王子様の言葉だよ」

知ること。良いことも悪いことも。でも、悪いことは知りたくないなあ。

「イルサ嬢はまだ若い。だから、辛くても知りなさい。そうすれば、イルサ嬢も立派な魔王になれるさ」

少し嬉しい気がする。私が魔王になれるんだ。お父様みたいに。

「本当に立派になれるかな？」

「おじさんはなれると思つよ。みんなに愛される魔王にね」

みんなに愛される魔王。それは良いなーそうなりたいな。そうすれば私の周りにみんなが来るんだ。誰も居なくならないんだ！

「姫、起きてられたんですね？」

「イルサ嬢は君たちの夜歩きを心配していましたよ」

「それは心配をおかけしました」

クレサイダが戻つて來た！良かつた。リセスも一緒だ。やっぱり私は今は一人じゃないんだよ。

そうだ！

「クレサイダ、リセス。一緒にベッドに寝よー。」

「ナツ！何、バカな事を言つてるー。」

「姫！何を言つてるのですか！」

凄い！クレサイダとリセスの声がピッタリだ。良いなあ。一人はとても仲良しなんだなあ。私も早くリセスと声が揃うほど仲良くなりたいなあ。

「駄目なの？一緒に寝たいなあ？」

一人で寝るより、凄く安心するもん。

「だつ、駄目に決まつてだろ」

「だつ、駄目に決まつてます」

「よしーおじさんガ添い寝して…」

「セルツ、焼き殺すよ」

ウゥー、みんなに避けられたよ。

私つて、本当にセルツさんの言つようなみんなに愛される魔王になれるのかな？

魔王な証明（後書き）

更新遅くなりすいませんでした。

今年から夏休みがあるわけが無く、それどころか仕事が増える。

なるだけ早く更新するよう心がけます。
次回、物語は新たな世界へ

新たな異世界へ

まだ日が登つたばかりだと呴うのに、日射しは強く俺たちを照りつける。熱の籠る聖人セレミスの墓前に集つた人の顔を見て、クレサイダが問う。

「それで、君たちはついて来るのかい？」

「決まってるじゃない。クレちゃんもルクちゃんが居ないと凄く寂しいでしょ～」

「おじさんもここまで来てしまったからね。最後まで付き合つてあげようではないか」

クレサイダは既に言及する気も無く、盛大な溜め息を漏らす。反対にイルサは大歓迎している。

「リセス君、ルクを宜しくお願ひね～、色々な意味で。…クレサイダ、私の可愛い娘を苛めたら怒るよー」

クレサイダに未だに敵意を見せるリーセさん。俺にこの問題娘を任せられても、色々な意味で面倒事だ。

「それで君たちが行くアースはどういう世界なんだい？科学が発達しているとは聞いた事があるけど

「僕だつて初めて行くんだ。知ってる訳無いだろ」

カーヘルさんの質問にクレサイダが素っ気なく答える。フイフレ以

上に異様な世界で無ければ良いが、ほぼ情報が無いと不安になるな。危険な世界かもしれない。気を引き締め無ければいかんな。

「とっても楽しみだねえーー！」

「うんー・楽しみだねー！」

「俺が氣を引き締めなくてはいけないらしい。

カー・ヘルさんの手が俺の肩にかかった。これは同情ですか？

「リセス君、もう少し氣を抜きなよ。肩に力が入り過ぎて構えてる
と、予想外の事態が起こった時に柔軟な対応が出来ないものだよ」

「そういうものでしようか？」

優秀な人達と旅をしたカー・ヘルさんに、俺にかかる心労を理解出来るのだろうか？このお気楽メンバーで、俺やクレサイダまで氣を抜いたら、予想外の事態で全滅しそうだ。

「案外、いつも氣を抜いていて頼りなさそうな人の方が、緊急事態に頼りになるものだよ。私はそれをライシスさんや一ーセさんのような人達を見て学んだよ」

そう言つたカーヘルさんの笑いながらの視線は、俺でも一ーセさんでもなく、ルンバットの争乱の犠牲者達の慰靈碑に注がれてい。ケルック・ラベルグ、一体どんな人物だったのだろうか？

「リセス、そろそろ行くよ。アースの鍵を貸してくれ」

クレサイダの声で、俺の思考は中断され、クレサイダに指定された

セレミスキーの一つを渡す。

クレサイダがセレミスキーを手のひらに納めて、魔力を溜める。俺は一回目となるこの召喚門が現れるまでの間。馴れる気がしない。クレサイダの込める魔力と比例して、俺の緊張感はどんどんと高まって行く。次なる世界はどんな世界か、どんな人に出会えるのか。

自分の中に楽觀を見つけ、自嘲してしまう。これでは、イルサと同程度の能天氣もじゃないか。気を引き締めなくてはな。

新たなる道は開かれる。クレサイダはその門へと何の迷い無しにくぐつて行く。見送りに一礼だけをして、後を追うイルサ。俺もイルサの真似をさせてもらつた。

「行つてきまあ～す！」

俺の背を追つて聞こえるルクの声。

俺たちは再び新たな世界へ。

新たな異世界へ（後書き）

大変更新が遅くなつてゐる天見酒です。更に今回はいつもに増して短いです。

今回で大一部終了。次回からアース編に入つていきます。

頑張つて更新していきます。御応援宜しくお願ひします。

科学世界アース

科学世界アースの様相にイルサが一人で凄いを連発しているが、これは俺も驚くしかないようだ。

五階建ての高さを誇るシーベル工城を見馴れた俺でさえ、何百階あるのか予想もつかない高さの長方体な建物が天を付きながら並ぶ。更にはクーレでは高級なガラスを惜しみ無く建物に使う綺麗な建物。

地面は全面石畳。黒灰色の石道を通る様々な色の動く鉄の塊達。中がくり貫かれて、人が入っている。黒い車輪がついているところを見ると馬車のような乗り物なのか？鉄を動かす、高度魔法だがこれは科学の力なのか。

街を歩く人が多い。大半の人は白いシャツに黒か茶の上着、そして黒く薄いズボンという服装をしている。

首に色とりどりの布切れを巻いているのは、まじないか何かの類いか、ナフキンなのだろうか。それとも、防具なのか？

その俺からすれば異様な格好も向こうからすれば、俺たちは異様なのだろう。歩行者達は視線を僅かに此方に向けては、目を反らして歩き続ける。どうやらこの世界でも、イルサが目立ち過ぎるらしい。この世界の通行人達は主に黒髪、黒眼。俺やルクと同じ茶髪も居ることには居るが、イルサの赤髪、赤眼は見掛け無い。更に、イルサに生える感情に合わせて動く翼は珍しいのだろう。

「それでルク。欠片は見つけられそうかい？」

何故かいつもの元気の良さが無いルクにクレサイダが話しかける。

「今度は気持ち悪いぐらい魔力の反応を感じないよ…。これだけ人が居るのに」

本当に気分が悪そうだ。この世界の住人は魔力を持っていないと言つただろうか。俺には魔力を感じる能力が無いから、ルクの気持ち悪さは分からない。目が突然見えなくなつた気分なのだろうか。

ルクの弱音にクレサイダは頭を抱え出すと俺も頭を支えたい程重くなつてている。

これだけ人がいるんだ。誰かに情報を貰おう。その結論は、この世界の住人の危険性を良く知らない俺の早急な愚考だった。

それを取り出したのは、顔からして俺よりも若い女の子だった。長方体の片手で持てる薄い小箱。コンパクトのように上下に開き、それをイルサへと向ける。その開かれた上部に丸いレンズのような物が付いている。

俺に走る緊張。もしや、この世界の銃か！

クレサイダがその女の子に向かつて火の魔法を放つ。その兵器を擊ち抜く。

「おい、あいつ、火炎放射機かなんか持つてるぞ！あぶねえぞ！」

「誰か警察を呼べ！」

先の女の子に代わり、ポケットやバッグから、形や色は僅かに違えど先程と似た武器を取り出すアースの住人達に囲まれた。

「チツ、全員殺るか

「駄目だ！多分、ケイサツとか言つ軍隊が出てくる。逃げるぞ！」

カエンホウシャキやら分からぬ単語が多いが、ケイサツなるものがこの世界の軍であることは理解出来た。国を代表する軍とやり合つのはまずい。ここは逃げるのが常道だ。

それにシーベル工では、銃を持つには、騎士団に入るか、国家資格を得なくてはいけないが、老若男女問わず、謎の最新兵器を持つているこの世界の住人の大群に勝つ自信は無い。

困惑の表情を浮かべるイルサの手を引き、素早く生まれた人の輪を強引に突破。ルクやクレサイダもついて来ている。セルツはイルサの肩の上に居る。俺たちの後ろから、光や魔写機のシャッターのような音が聞こえるが、被弾はしていいようだ。

くそ、訳も分からず集団で発砲して来るのは、ここは何て危険な世界なんだ！

科学世界アース（後書き）

他人を無許可で写メを撮るのは如何なものかと思っている天見酒でした。

携帯電話は便利ですね。

大学を出て一年が経つ。一年も経てば、就職時に会社に期待していた何かなど等に忘れちまつた。

朝起きれば、ただ単に繰り返す日々。それは俺の天職から転職へ導く。

結局、不景氣でフリーターとなってしまった。俺の夢つて何だろうな。

いけない。酔っ払つとこいつは負の感情が駄々漏れてしまう。歳を食つたなあ。

自宅に帰るには、明るい表通りを歩いた方が早いが、俺は腕時計でまだ八時と言うことを確認して、わざわざ暗い裏通りに入る。人混みを一人で歩くのは嫌いだ。どつちみち、九時には家に着くだろう。何より、人目の無いところに入り込めば歩き煙草を咎める者は居まい。いつもの公園で一服して帰ろう。

この俺の習慣に従つた行動が正しかつたかは、結末を知つても分からぬ。

公園には珍しく誰も居なかつた。たまに見掛けるカツブルや浮浪者も居ない。俺の貸し切りのようで良い気分だ。今だけ俺専用のベンチにだらしなく身を投げ出し、煙草に火を付ける。

気分は良かつたが、俺の考え出したのは、明日の予定。バイトは入つて無い。イコール予定無しだ。気分が滅入る。更に気が滅入つたのは、俺の公園に誰かが入つて来た事だつた。俺の目の前を横切る珍妙な集団。

「お腹空いたよー」

鈴のなるような間抜けな声。大学生ぐらいか？というかコスプレ？赤髪に染めて、瞳に赤いカラコン、レプリカだらう剣を帯び、背中には天使の翼付ける徹底ぶりだ。そして何故、肩に栗鼠を乗つけている？最近、アニメや漫画から足が遠退いてるから何の真似かは分からぬが、連中に関わり合わない方が良いことは分かった。

「分かつたから少し我慢しろ、イルサ。クレサイダ、これからどうする？」

こちらの茶髪男子はチラッと鋭い黒眼で俺を見て、赤髪コスの女子をなだめる。服装は黒いパークーに黒いジーンズだが、銃刀法違反って知ってるか、僕。レプリカの帯刀が犯罪になるかは俺も知らないけどね。

「ここで一夜を明かすしか無いだろ。他に野宿に適してそうな場所は無いんだから」

おいおい揃いも揃つて、無一文なのかよ。

「エニー、野宿ウー！街の中なのに。クレちゃん、何とかしてよ

」

無理難題を言つるのは黒いローブを纏う魔女ルックの女の子。全く奇妙な連中だ。

俺はこんな連中と関わりたくは無かつた。が、野宿という言葉に仏心が出してしまつ。

「ここで野宿は止めとけよ。雨が降つたらどうする気なんだ。俺が

帰り賃ぐらご貸してやるから家に帰れよ

その連中の背中に有難き声を掛けてやる俺。振り返る珍妙な青年達。

「まだ家に帰れないだよ～」

魔女っ子が嘆く。おい、集団家出か。しかもそんな格好で…。
溜め息しかでない。しかし、こんな若者達をここに放置したまま帰
るのも、僅かに心苦しい。

一晩、この良きお兄さんがこの青年達に社会の現実や服装について
説教でも垂れてやるか。酒の肴にはなるだらう。じつせ、明日はフ
リーだ。

そんな軽い気持ちで出した言葉だった。

「今晚、俺の家に泊まるか？狭いけど

「良いんですか！」

赤髪コスが喜面を表す。最近のコスプレの道具は凝つてゐるな。その
翼が動くんだ。

「申し訳ないですが、お願ひ出来ますか？」

「ああ、良いよ」

しつかりと礼儀正しく頭を下げる刀青年。
最近の若者も捨てたもんじゃない。

「こやせや、この世界で貴公のよつた紳士にあえて光栄だよ

うん？四人だけだよな？赤髪の子の方から爺臭い台詞が聞こえたぞ。

「地獄に仏とは」ことですよ。本当に助かるよ」

栗鼠が喋ってる？

「えーと、君たちは腹話術師なの？」

そうか、それでそんなおかしな格好しているんだな。

「フクワ術師つてのは何だい？」

長髪の男が真面目顔で俺に聞き返してくれる。

これが俺の仏心が産み出した、とんでもない日常の続きの始まりになつた。

日常の続きを（後書き）

次回はリセス主観に戻ります。この日本に似た異世界を、他世界の人を見たらどう見えるか。書いていてなかなか楽しい視点ですよ。

どうぞ、次回もお楽しみに！

科学世界の「」駆走

「つまり、あんた達はその世界の欠片とか言つのを集める為に異世界からこの世界に、召喚魔法を使って来たって事？」

喋る栗鼠、セルツの活躍（？）により、俺たちがこの世界の人間じやないことを信じ始めてくれたウエダさんに、クレサイダが俺たちの目的をカイム達の存在を意図的に抜いて説明した結果、ウエダさんはすんなり飲み込んでくれたようだ。

「やう、ことだよ。理解出来たかい？」

「理解出来そうで出来ねえよ」

クレサイダにそう答えながら、住宅の並ぶ一軒の鉄柵を開くウエダさん。一階立て瓦葺き屋根の家屋。

ウエダさんが玄関を鍵を開けて俺たちを中へ率いれる。ウエダさんが暗闇の中を先に進んで壁を触る。すると、急に天井から光が満ちて、明るい廊下が現れる。

魔鉱石のシャンデリアより明るく、まるで昼間のようだ。

「此方がトイレで、此方が風呂な。じつした、遠慮なく上がれよ」

唖然としている俺たちに呼び掛けるウエダさん。ルクがその誘いに真っ先に誘われ、家に上がらざるを得ない。

「あつおーー靴はそこで脱いでくれ」

シーベル工育ちのルクには理解出来ない行為だらう。俺も母上に力イナに連れて行かれた時はこの習慣に驚いた。
どうやらアースはカイナの文化に近いらしいな。

ウエダさんが、靴を脱いだ俺たちをリビングに招待したところで、節操なく鳴いているイルサの腹に対し、カツプメンなるものをご馳走してくれるらしい。

初めて聞く料理名に期待していたが、俺たちの前に出てきたのは、人数分の紙で出来た円柱の容器とポット。ウエダさんがポットに入つたお湯をその紙の容器に注ぐ。中には何やら固そうな物が入つていた。

「箸よりもフォークの方が良いか?」

イルサ達にカツプメンという料理を置きながらウエダさんは尋ねる。ルクやイルサはこの家に溢れる奇怪な機械を眺めながら頷く。斯く言う俺も低い本棚の上に置かれた黒くて四角くガラスが全面に付いた箱や、壁に飾られた丸くて三本の棒で一つの棒が常に動いている機械などに興味は惹かれる。

俺やクレサイダが着いている木床の上のテーブルの後方に、イルサやルクは開け放たれた襖の奥の畳上の卓袱台に着いている。この世界はシーベル工文化もあれば、カイナ文化でもあるのか。

俺に理解出来そうな事から理解していこう。早速、出された食事を食そうとしたイルサにサンパンカン待つて、と指示を出したウエダさんも同じ考え方のようだ。

「それで、世界の欠片とか言つるのは見付かりそつか?」

「全くないね。僕たちはこの世界の知識、土地勘すら無いからね」

クレサイダがあからさまに言葉の裏に隠した言葉は俺にも読み取れる。この人に手を貸して欲しいのは皆同じだろつ。唯一空いている俺やクレサイダの前の椅子に腰を下ろすウエダさん。

煙草を口に加えて、中で液体が揺れる縁に透き通る細長い小さな道具を取り出す。上部を親指で撫でると火が生まれる。その不思議な道具をテーブルに置き、黙つて俺たちを監視し続けるウエダさん。クレサイダの遠回しなお願いの返事を考えているのだらう。

「あつ、そろそろ食つて良いぞ」

俺の目の前のカップメンを煙草で指すウエダさん。サンプンカンは過ぎたらしい。お湯を入れて、このわずかな時間待つだけで食えるものなのか？

俺たちの後ろで紙を破る音が聞こえる。部屋の中になんとも良い匂いが満ちてくる。

だが、俺やクレサイダは手を付けない。今はウエダさんの返事を待つ。

「ウエダ殿。我々としては、貴公のお力添えをお願いしたいのだが、どうかね？」

テーブルの端に登っていた。セルツが今度は率直に協力を頼む。ここまで御世話になっておきながら図々しいとは思うが、今の俺たちにはこの世界で他に頼れる人物は居ない。

「俺は大したこと出来ないぞ」

念を押すよつに言つウエダさん。俺たちが各自に礼を言つ出すと黙れ隠しか、早く食えよと笑つた。

カップ麺は旨かった。でも、俺には少し味付けが濃いよつに思つた。しかし、お湯だけで直ぐに出来上がるとは便利な料理だな。やはりこの世界は凄いらしい。

科学世界の「」馳走（後書き）

カップメン！

それは貧乏学生だった天見酒が酒に金を消した時の救世主。

正に科学技術の結晶です。

大学生読者の皆様。くれぐれも不健康な食生活は止めましょう。

離れてた、離れていく

この世界に来て、三日田の日が暮れようとしていた。一日前にウエダさんの座っていた公園のベンチで休憩する。

長い柱に付いた時計は六時を示している。昨日一日を費やして、覚えたこの世界の数字や時計の読み方や僅かな知識。この世界の文字は複雑過ぎて覚えられた代物じゃなかつたがセレミスキーに刻まれてるだらう言語変換魔法で言葉が通じれば問題無い。とは、いかなかつた。

「欠片について、なんにも分から無かつたね」

俺の隣に座っているルク。ウエダさんから借りたこの世界のデザインの服、何か流線で文字の書かれたTシャツにジーンズを着ている。いつもローブを好んでいるルクのこの姿に、俺は何か可笑しく思える。ルクがルクじゃないように見える。そういうえば、今日のルクは妙に入しい。

「なつ、何かな。私の事じつと見ちゃって」

「いや、特には何も無い」

今日のお前、何か変だぞなんて、正直に言つてルクの報復を受けたくは無い。口は剣より強しと言つことだ。

そんな俺の厳選した言葉に眉をしかめたルク。失敗したらしい。どんな報復が来ることやら。

「リセ君と一人つきりつて久しぶりだねー?」

「あつ、ああ」

俺から視線を外して夕日に顔を向けるルクに、身構えた俺は肩透かしを喰らつた。夕日を受けて、顔を赤く照らし出されたルク。本当に前、今日はどうした？

ルクと二人つきりか…。昔はジンさん達が来た時に良く遊び相手をしていたものだつたな。そういえば、今日のルクはあの頃の借りてきた猫のように大人しい。大人しい分には此方は大助かりだが…。

そういうえ、ヘブルの姫は大人しくしているだろうか？イルサやクレサイダは翼が目立つということで、今はウエダさんの家で留守番。喋る栗鼠に到つては言わずもがなだ。

俺とルクだけで、情報収集をしに行くと言つたら、私も行くと駄々をこねて、泣き出す有り様。クレサイダに宥められ、鎮静したもの、家を出る時の捨てられた子犬のようなイルサの涙目には参つた。ウエダさんにこの世界で金の代わりになると言つ、1000とおじさんの顔の書かれただけの紙切れを貰つた事だし、何か食べ物でも買つて帰つてやるか。

「…リセ君、今イルちゃんの事考えてたでしょ？」

「ああ、何か食べ物でも買つて帰つてやるかと…」

「へへえ、リセ君つて優しいね～。イルちゃんには

ルクの声のトーンが落ちてる。これはルクが不機嫌だということだ。俺はイルサの事を考えたらいいのか？今のやりとりで、何でルクの言葉に棘が出てくるのかが分からん。

「リセ君つて、イルちゃんが大事なんだね～」

「だから、どうした？」

別に良いだろ。イルサは仲間なんだ。大事にして何が悪い。少し、ルクの物言いは気に障る。だから、ルクに口では勝てない事は重々承知していたが、買い物言葉になってしまった。ルクの眼が細まつた事により、己の愚かさを知る。口技では、ネズミがドラゴンに立ち向かうような勝ち目の無い勝負だ。

「…来た」

目を元のサイズに戻したルクが突然咳く。

「！」の感じ、カイム達だよ～。！」の世界に来たよ～

クソッ、せっかく三日前にこの世界に来たのに、欠片への差は埋まつたか。

ルクと口喧嘩をしてる場合では無い。一端、休戦だ。

「あいつらの位置を探れるのか？」

「うん！カイム達の魔力は良く分かるよ～」

自信強く頷くルク。

「良し。イルサ達を迎えて行つて、カイム達を捕捉するぞ！」

勢い良く立つ俺。反して、ベンチに座つたまま俯いているルク。

「おい、どうした？」

俺の声に顔をあげて、元気の無い笑みを浮かべるルク。

「私は先に、カイムを見つけてるから、イルちゃんを呼んで来なよ」

そつ言つて勢い良く駆け出すルク。

「おい、一人で危ない！待て！」

俺の心配を置いて行くルク。さつきの些細な喧嘩を引き摺つてゐるか。

クソッ、先にルクを追うべきか、先にイルサ達と合流するべきか？

迷いは直ぐに消えた。俺とルクだけでカイム達に太刀打ち出来る訳無いだろ！

俺はウエダさんの家を田掛けて走り出した。

ルクのバカ野郎が！

離れてた、離れていく（後書き）

やあやあ、魔笛を読んでくださる読者様。お久しぶりだねえ。

ごめんなさい。勝手に更新を休みました。少し魔笛でどう書いても、つまらないと言つ状態が続きました。少なくとも作者が書いてつまらないと思う物を、読者が読んで面白いと思う筈が無い。俺の尊敬する直木賞受賞作家の御言葉です。

しかし、天見酒、パワーアップをして帰つて来ましたよ。ドラクエ6の主人公がやっと転職出来るようになつてパワーアップです。小説に関係あるのか？無いです。

怒らないで下さい。

これからも少しばかりパワーアップしたかもしれない天見酒のお送りする魔笛を宜しくお願いします。

賢い僕と賢しい栗鼠の関係

先程まで、落ち着き無く家中を徘徊して姫は、今はタタミと言つ草を編んだ床に落ち着き、寝息を立てていらつしゃる。ヘブルの王たる姫をこのような床上に寝かせて置いて良いものか？しかし、下手に起こし兼ねない事はするべきでは無いだろうな。リセス達が帰つて来るまではこのままにしておこう。それが良い。でも、このままでは風邪を患うかもしれない。

リセスが畳んだ閉まつた薄いかけ布団を引っ張り出し姫にかける。身動ぐ姫が起きないかとびくびくしながら。自分で可笑しいと思つてゐる。魔王シールテカの左腕、冷酷無比の魔将クレサイダと呼ばれた僕がこんな小娘にビク付いているのだからね。

しかし、仕方が無いじゃないか。見たまえ、姫のこの凛々しい寝顔を！

こんな無邪氣なお顔を見せられたら、どんな敵であつても戦意を根こそぎ奪われるでは無いか。その姿を見るだけで誰もが恐れおのいたシールテカ様のような高貴なオーラを、寝ながらにして体現してしまうとは、姫はなんて恐ろしい方なんだ。

「…まだ、食べられるよお」

姫が寝言を漏らす。ああ、姫は寝ながら己の欲を満たす事に熱心なのですね。シールテカ様に似て、なんて強欲なお方なんだ。いや、食欲に関してはシールテカ様以上の凶悪さ。姫はシールテカ様を超す偉大なる魔王に成られることだろう。二代に渡り偉大なる魔王様に仕えることが出来るなんて、僕はなんて幸せものなんだ！

気持ち良さそうに寝ていられる姫。硝子の代わりに網を張った窓から入ってくる涼しげな夕風に遊ばれる、夕映えする赤髪。魔王様を洗脳したあの忌々しいシルビーから受け継いだ髪色。あの嫌いだつた髪。それが姫の頭を優しそうに覆い、姫と一緒に呼吸をしているよつて愛らしく揺れ動いている。

触りたい。その髪の手を降つているよつた動きに、僕にそんな衝動が出てくる。少しごらいならば良い…駄目だろつ！僕のごとき者が姫のお身体を汚す行為をするなんて、絶対に駄目に決まってるだろ！全くなんて事を考えるんだい。

でも、姫は寝てるし、誰も見ていないし。誰にもばれない。伸ばす震える人差し指を。僕は今、姫の髪を触れようとしている、もし、シールテカ様がいらっしゃつたら…殺される。でも、今は居ないじやないか。こつ、このぐらいどうつてこと無いぞ。

指で撫でるだけだ。一向に震えが止まらない僕の手。急に指を開く。焦り、気付いた時には姫の頸の下に首を絞めようとするとよつて。僕の意志じやない。身体が動いたとしか言えない。

「クレサイダ！」

見られていた。そう言えばこいつが居たんだ。今だけはこいつに感謝しよう。ギリギリで止めた手。この身体は姫を殺そうとしているつてのかい。

「クレサイダ君、イルサ嬢の寝姿に欲情してしまつのは、若い証拠ではあつて良いことだと思つがね、寝込みを犯そつとする根性は、おじさん、関心しないね」

わつきの感謝は撤回しよう。今すぐ、火葬してやる。いや、こんな

栗鼠公にむざむざと魔力を使って良い状況じゃない。

「セルツ、頼みがあるんだ」

「大丈夫さ。今、見たことはリセ坊やルク嬢、勿論イルサ嬢には黙つておくよ」

「少し真剣な頼みなんだけどね」

癪だがこいつを頼るしかない。

「君は僕のこの身体が本体じゃないことは良く分かってるよね」

「ああ、嫌と言つほど分かってるよ」

それは確認するまでも無かつたよね。君は僕の本性を良く知つてるのでだから。

セルツに説明するためにも、僕自身が現状を整理して受け入れるためにも僕は口を動かす。

「この身体は今は僕が魔力で押さえ付けてる。でも、この世界に魔素は存在しない。君も辛いだろ?」

「ああ、私たち魔力を糧に生きる生物にはね。それで、クレサイダ君が魔力が補給出来ないと言つことは…」

理解が早くて助かるよ。

「この身体の元々の主がコントロールを取り戻すことさ」

クーレでしつかりと魔力を取り込んでから来るべきだった。魔法が

無い世界という時点で魔素が存在しないことは予想出来たことだ。この世界へ来るためには使つた莫大な魔力は仕方なくとも、責めてフレで消費した魔力を埋めてから来るべきだった。

「この身体の本来の持ち主は、姫にとつてとても危険だ。だから、もし僕が抑えられなくなつたら、迷わず殺してよ」

この身体を制御出来ない状態の僕は心中するしかないけどね。姫の危険には僕なんか変えられない。

「何でおじさんに頼むのかな」

愉快そうで哀しそうな声のセルツ。

「君が適役だからだよ」

リセス、あの甘ちゃんはきっと手遅れになるまで動けないからね。ルクなら出来ただけど。

「それに僕を倒すのは、あいつらの中で生き残つた君の役目じゃないのかい？」

僕の皮肉に笑いながら“考えておくよ”と言つセルツ。少々不安は残るが、手の打ちようが他には無い。

ふと、部屋が明るくなる。姫がその明るさを手で打ち払おうと動く。

「お前ら、明かりぐらい付けろよ。昨日教えただろ」

アルバイトなる仕事を終えて帰つて来たウエダ。

「リセスやルクはまだ帰つて来てないのか？」

今にも破けそうな白く薄い袋をテーブルに起きながらのウヒダの質問に、既に口がほとんど落ちていて気付く。

少し遅いんじやないか。一人して迷ったのか？いや、僕や姫の所在を感じられるルクがいて、それは無い。全く、僕に余計な心配をさせるなよ。

その時だった。リセスだけが、飛び帰つて来たのは。

賢い僕と賢しい栗鼠の関係（後書き）

クレサイダが色々と壊れちゃう話でした。

次回はルク視点に移ります。リセスの出番少なくていい?と思つ今日
この頃。まあ、良いか!

…良くないですね。

私の独奏

私らしく無く、頭に来ちゃってるルクちゃんです。

こんな我が儘をやつしかりなんてね。でも、しじうがないよ～。リセ君が悪いんだもん。

イルちゃんばかり見てる。少し女の子への配慮が足りないよねえー。美女が側に居るのに他の女の子のことを考えるなんて。イルちゃんは確かに可愛いし、とても素直だけじゃ。私の方が付か合って長いんだよ～！

リセ君、変わっちゃったなあ。昔は優しかったのに。今でも優しいけど何か違うんだよー。何なんだろうね。

私は変わらないよ～。だから、苦しいよ。昔からリセ君に…。

考えちやうんだよねー。私は役に立てるかな。ただ、我が儘やってるだけに見られて無いかなあ。やつぱり皆のお荷物になつてゐるかなあ。

私の旅の始まりは、アレンさんがナールスエンドにリセ君に会いに行くつて言つから我が儘で同行した。そこでリセ君の隣にはイルちゃんが居て、一緒に旅するつていうから、我が儘でついて来て。今は私の我が儘でリセ君と喧嘩して、私の我が儘で飛び出して。

私の我が儘つぱりにちよつと泣きたくなつてきひやうね～。リセ君が私を直ぐに追つて来てくれないのは当然だよね～。こんな可愛く無い私なんてね。

「マイナー、この建物の中に欠片は在るのだな

「はい、オシリスの杖はここを指しております」

一棟の背の高い建物の前に立つ。この世界に浮く服装と姿の目立つてゐる集団を発見しましたよ。間違いなくカイム達だね。シャプトな二口なんて、注目の的だよ。

そして、オシリスの杖。ドゥーチの杖の事だらうけど、欠片の位置を探れるんだ。ファイフレで起こつた現象の原因だねえ。恐らく世界の欠片と密接に関係してゐる品。世界の欠片とドゥーチの杖。これらを集めるに何が出来るのか。クレちゃんの隠すカイムの目的。鈍いリセ君は気付かなくても、賢いルクちゃんは勘付いちやうんだよね。

道に沿つて綺麗に並んでいる木の後ろに隠れながら、敵情観察。歯痒いけれど、一人で来たから何も出来ない。何やってるのかなあ、私は。

声を落としたカイム達。何かの相談かな?私も是非聞きたいんだけどな。思つてみるとカイム達は欠片のある建物へ歩き出す。顔傷ニンジャさんを残してね。

見張りかな?と思つてもこちらに近づいて来る顔傷さん。

「出てこいーそこに居るは分かつている」

バレちゃつた?

そつか、欠片の位置が分かるんだよね。ルクちゃん、うつかりだー!

「あはは、お久しぶり、格好良い傷のおじ様あ。『機嫌いかが』

？」

相手は私の愛くるしい笑顔と愛嬌たっぷりの挨拶にカタナを抜いて応えてくれました。「機嫌斜めですね～」。

私としてはゆつくりお話でもしてたいなあなんて、上着で隠した銃に手が伸びてたり。

銃に手がかかる前。既に相手の得物が私を捉えられる位置にある。煌めく刃。これは間に合わないや～。瞼は恐怖で自動的に落ちる。

鋭い鉄の鳴る音。開いた眼に映つたいつもの背中。

「ルク、一人で無茶をするな！」

こちらを見ずに怒る背中。言い返したい気持ちはいっぱい。でも、

言い返す言葉は無いよ。

するいな～、リセ君は。何で私の格好悪い姿を見て、自分の格好良い姿を見せるんだよ。

するいよ、リセ君。

訳が分からん

全速で戻つて来た俺に、クレサイダは部屋から不機嫌な顔を覗かせる。

「騒々しいよ、リセス。姫が起きられてしまつたじゃないか」

「そんな事を言つてる場合ぢやない。カイム達がこの世界に来た！」

「チツ、もう来たのか。姫！セルツ！」

状況の把握が速くて助かる。

「はあ？ カイムって誰だ？ といつかルクはどうしたんだ？ 一緒に行つたんだろう？」

ウエダさんが玄関に現れる。

「カイムは俺たちの敵だ。ルクは…、勝手にカイム達に向かつて行つた」

クレサイダの顔が曇る。

「ハア～！ 一人で行つたのかい！ といつかどうするんだよ…ルクが居なければカイム達の場所なんて分からぬじやないか！」

俺だつてどうすれば良いかなんて分からぬ。

「ルク嬢やカイム達の居場所はおじさんが分かるさ。おじさんもクレの欠片に触れたからね。ルク嬢よりは劣るがこの世界ならば問

題無いよ

部屋から出て来た寝惚け眼のイルサの肩で暴露するセルツ。そういう事は早めに言つてくれ。

「とにかく急ぐよー」

クレサイダの言葉に家を出ようとする俺たちにウエダさんが止める。

「待てー急ぐんだろ? 車出してやるよ」

不思議なものだ。こんな鉄の塊が馬に引かれている訳でも無いのに、こんな速度で動くのだから。

「あっちの方にルク嬢はいるよ」

「あっちの方つて、迂回しないといけないじゃんかよ。道は分かんないのかよ」

丸い輪を回しながら、聞くウエダさんにセルツは頷く。

「それで、ルクをどうして一人で行かせたんだい?」

手持ちぶさたになつたクレサイダが尋ねてきたので、訂正して答えてやる。

「行かせた訳じゃない。あいつが勝手に行つたんだ

俺が責められなければいけない理由は無い。

「ルクは小賢い奴だから、そんな無謀な事はしないと思つてたけどねえ」

「俺もそう思つてた。今日のルクはおかしかつた。家を出てから妙にしおらしかつた。それなのに、急に怒つて、拳げ句の果てに独断専行だ」

ルクへの罵りを止める。俺はかなり苛ついているらしい。

「リセス、ルクちゃんと喧嘩したの？」

泣きそうな眼で俺を見るな。俺が感じる必要の無い罪悪感が出てくるだろ。

「別に喧嘩はしてない。イルサの話をしたら、ルクが勝手に怒つた。それだけだ」

ところで、さつきから俺以外の男性陣の漏らして息の合つた溜め息は何なんだ。

「リセスさあ、僕は言えるような事じやないけどさあ、ルクへの態度を改めなよ。もつと氣を使つてあげなよ」

「俺は十分氣を使つてる。これ以上どう氣を使えと言つんだ?」

ルクの我が儘をこれ以上配慮してたら、俺が持たない。

「リセス坊は若いからじょうがないかも知れないがね。ルク嬢の気持ちも考えてやりなさい。ルク嬢も御年頃な女の子なのだよ」

「俺にはあいつの頭の中ほど理解出来ないものは無い。これでも俺は年頃の娘に対する配慮はしているつもりだが」

何故に俺が責められているのか分からぬ。俺はルクに悪い事をしたのか？思い当たる節は全く無いのだが。

「とにかく、リセス。気を利かせる。そして、機会を見て今日の埋め合わせしどけ。それにしても、俺は既に一人が付き合つてゐるのかと思つてたぜ」

ウエダさんの意見に納得がいかない。しかし、周囲からここまで言われると俺が悪かった氣がしてくる。因みに俺とルクの付き合いは長いぞ。産まれた時から家族ぐるみの付き合いだからな。

「ソレなら辺りに居るよ」

「ルクちゃん、居た！あつちにカイムも！」

セルツの言葉に合わせてイルサも叫ぶ。

カイム達は木の後ろに隠れるルクに背を向けて歩き出すが、顔傷がルクの方へ。不味いな。

車の扉を開けて飛び出す。

ルクが木の影から出た。カタナを抜いた顔傷のルクとの間が埋まる。その埋まる間に入ることの出来た俺。

「ルク、一人で無理をするな！」

俺から謝る言葉は出なかつた。皆の言った事の訳が分からなすぎで、自分も訳が分からない事を言つていた。

訳が分からん（後書き）

題名通り、訳が分からなくなつたかもしません。

まあ、これからもリセスにはもつと困惑してもらいましょう。

訳が分からぬ小説書いてんなあー!とお怒りの方は、お手数ですが感想を下さい。

お怒りで無い方も是非感想を下さい。

感想に飢えているお年頃な天見酒です。

真剣勝負

どんどん人は集まつて来る。周囲の人から漏れる共通の単語、エイガの撮影、テレビの撮影。そりや、何だ。

逃げようとせず、驚こうともしない観衆。どうやら、ウエダさん曰く、この世界では一般市民の武器所持を禁止する法律は有るらしいのだが、この世界ではカタナで切り合つ光景は日常茶飯事らしい矛盾を感じずにはいられない。

ガラスが派手に割れる音。カイム達の仕業か。俺から距離を取ろうとする顔傷。素早く後退する顔傷に刃を立てて迫る。

「全員、先にカイムを追え！こいつは俺が抑える！」

こいつ一人に全員でかかつっている場合では無いな。

顔傷に至近距離でつばぜり合い、こいつが他に気を向けられないようになにこの距離を保つ。

「リセス…」

俺も気は抜けないイルサの表情は見れないが、予想は出来る。あまり良い表情じゃないだろう。

「イルちゃん、行くよ」

それで良い。

「リセ君、ごめんね」

俺の横を通り抜けながら言うルク。それは何について謝ってるんだ。
まあ、俺の気が少し軽くなつた事には感謝しておこつ。

カイム達の後に続いて、建物の中に消えるイルサ達を確認。続いて、大量のガラス、いや、大量の氷が碎ける音。ウニロの魔法か。何も知らない人たちが何か叫びながら建物から避難してくる。ところでの男性が叫んでいるテロとは何だ？そんな考えても分からぬ事よりイルサ達は無事だろうか。先に行かせた事を後悔してしまう。

俺の腹部に蹴り。油断した。俺の手からカタナがこぼれ、地面に背中を付く俺に、俺の頭上に立ち、逆手に持ち変えたカタナを突き下ろす顔傷。その腹部に雷魔法を叩き込む。

咄嗟の事で、魔力を十分込められなかつたが俺が体制を立て直す時間は稼げた。

俺が力タナを拾い、奴に力タナを向ける時には、相手の顔は怒りに燃えている。怒りは力タナを狂わせる。母上の言に従つて、もう少し挑発しておくか。

「もうちよい、俺に付き合つてくれよ。顔傷さん。真剣勝負と行こうぜ」

父上が言いそうな台詞になつてしまつた。母上がこの場に居たら、
“そんな低俗な言葉使いをするな”だな。

「貴様は本当にあの男に似ているな。そのムカつく顔とそのムカつく物言い」

父上に似ているなんて、俺にとつての最上級の讃め言葉、有難く頂いておくぞ。

「あの時、アレン・レイフォートに氣を取られて、貴様の父親に息の根を確實に止めて置かなかつた事が、ここまで俺の障害になるとはな」

こいつがブロイシュさんやベーデさんから聞いた話に出てきた二ンジヤだつたか。不意打ちとはいえ、クーレでの父上に、唯一致命傷を与えた人間。

こいつに勝ちたい。父上に追い付く為に。

「あの時、いや、あの時から貴様の両親を殺れ無かつた事ほど、俺を苦しめた失敗はない。だから、今、貴様での時の失敗を清算させてもらひ。両親の分も支払つてもらひぞ」

避難してきた人たちが、ケイタイと言つ魔話器や魔写器の役割のある道具で通信を始めている。ケイサツと言つ単語が聞き取れる。この世界の軍の介入。勝負を急がなくてはいけないな。

カタナを鞘に収めて、腰を低くして構える。俺は、カイナ出身では無いが、カイナ出だるう二ンジヤの顔傷は、口元を吊り上げ、俺のポーズに付き合つてカタナを鞘に収める。その敵との意志疎通に俺の口元も僅かに緩むが、気は抜けない。お互一撃にかける勝負。純粹に精密な速さだけの勝負。カタナを振つている年数が相手とはかなり違うだろひ。我ながら不利な勝負を持ち掛けたものだ。

勝ち目が無いと思える戦いでも案外勝つちゃう時もあるもんだぜ。第十四回シーベルエ剣術大会で、カーヘルさんに挑むが俺に父上が掛けた言葉。苦境をものともしなかつた父上の力強い言葉。俺に重

くのしづかる言葉。敗けない。俺は敗けられない。

周囲が騒がしい。けたたましい音を鳴らし赤い光りを回す車が何台か止まる。

「そこの一、動くな！武器を捨てろ！」

その誰かの命令が、計らずも俺たちの動き出す合図となつた。

真剣勝負（後書き）

今日が11月で、ついに11月です。

トラブルの中へ

別に行く手を阻む意志はなし、彼らを受け入れる気満々だったのに、破壊された可哀想な自動ドア。

それを潜った途端に目の前に現れた氷塊の数々に、こいつらに同行した事を後悔した。おとなしく車で待つてりや良かった。

クレサイダやイルサの前で弾ける音を立てて崩れる氷。バリアーか？バリアーなのか？

それよりも、あの動くコールターの化け物は何なんだ！いや、あの細身な眼鏡男が今、警備員を刺した鎗伸びなかつたか？

俺の頭の中は突然の来訪者達にこのビルの現状と同じでパニック状態だ。

「ウニ一口！先に欠片だ！そいつらに構うな！」

一階ロビーのエスカレーターをかけ上った赤髪赤眼の男が叫ぶ。警棒と言う低装備でその男を押さえようとした犠牲者がエレベーターで階段落ちを再現。床に満ちる血で俺が非日常に踏み込んだ事を知る。俺の居て良い場所じゃない。しかし、外には既にサイレンが聞こえ始めて逃げ出ようにも引っ込みのつかない状態になっている。俺は「こんなことで新聞の一面に飾り立てられたくは無い。

最後いでかい氷を出して、赤髪の男を追うコールター。

ルクが拳銃を乱射。イルサが魔法なのか、を放つが敵に有効だにはならない。二階フロアの奥へと姿を消す。

「天辺で何か弱い魔力を感じるよ～」

「追ひよー。」

「ちよつと待て！」

素直にエスカレーターから行こうとするクレサイダを止める。

「上に行きたいなら、此方が早い」

これ以上関わるなのは警衛は押し留めて、誰も居なくなつた受付の横のエレベーターを呼ぶ。

「ウッ、この中、何か気持ち悪い〜」

初めてエレベーターに乗る人間はそうかも知れないな。

「ウエーダ殿、ここはどう建物なんだい？」

「あ～、世界で一番凄いエト企業…、世界一の機械を造つてる会社だ」

エトなんて理解出来ないだろうな。俺もたつた二日でこいつらに馴れたもんだ。栗鼠と眞面目に受け答えしてしまつ俺はどうなのだろうか？そんな事より、聞きたい事は山積みだ。

「さつきの動く黒い奴は何なんだ？あれは生物なのか？」

「シャフトだよ」

イルサ、頼むから異世界初心者な俺に高度な単語だけで説明しないでくれよ。

「魔力構成体。」肉体を持たず、知と魔力だけで動く、高度な生命体

クレサイダ、分かりやすい説明ありがとよ。俺には理解出来ない事が分かった。

「とにかく、気持ち悪い生物だつてのは良く分かつたぜ」

「悪かつたね」

何で不機嫌そうになるんだ。お前には言つて無いんだが。

「ウエダさん、クレセヤんも今はこんな姿だけど、一応シャブトだからね~」

おつと失礼。あの醜いコールタル野郎と同類がイケメンに化けて身近に潜伏しているとは思ってなかつた。

四階で開く扉。田の前に立つおっさんやオールドマニアは俺たちの姿を見た途端に、慌てて閉スイッチを押す。ビリヤード乗る気は無いらしい。

「それで、あの赤髪がカイム何だろ？ どう言つた関係だ。特にイル
サと」

この質問の後の皆の表情で聞いてはいけない事だとははつきりした。まあ、イルサと近しい関係なのは間違いないと言つことでこの話は

おしまいにしよう。

「じゃあ、世界の欠片とかを集める目的は何なんだ？」

この場の全員の視線が集まる人物を俺も見る。

「君は知らない方が良いことだと思つよ」

「最もだな。これ以上、深入りしても禄な事が無さそうだ」

これ以上はお節介は無しだ。エレベーターも天辺に着いたしな。開く扉。目の前にあるのは社長室が有るだけのフロア。

威勢良くエレベーターを降りて行くクレサイダ達。

「何してんだい？」

「俺はここで待ってる。これ以上は役に立たないからな」

そう俺の出番はここで終了だ。

「ウエーダ殿、ここでの待機は危険だ。カイム達がここを指している。あいつらは遠慮無しに君を殺すだろ」

下には警察が来てるんだろうな。ここから一緒に社長室に殴り込みか。溜め息が漏れる。

どしきみち、俺は犯罪者となってしまったようだ。

クレサイダの吹っ飛ばす扉を見ながら、平凡なフリーター生活が恋

じへなつてせんじまつた。

もし神がいるならば

ガラス越しに見えるアースの夜を彩る明かり。

「へえー、良い景色じゃないか。この高さといい、広さといい、この建物を姫に献上したいね。」

カイムの件が片付いたら、リセスからセレミスキーリーを奪つて、手始めにこの世界を姫に献上しようかな。確かに僅かな時間で何発も撃てる銃を造る科学力は認めるけど、魔法が使えない時点でヘブルの敵じやないね。大した武力がじやないね。

「ところでウエダ。この世界の法律では軍隊以外武器を持つたらいけないんじゃなかつたのかい？それとも、金持ちは特別なのかい？」

部屋の中に居る初老の男、僕の方が年上だけど、弾を撃ち尽くした銃を抱えて肩で息をしている。

「知らねえよ。そんなこと。それよりもお前達の不思議バリアーの方が俺には驚きだ！」

魔法防壁なんて初等中の初等の魔法なんだけどね。

「えっと、私達は貴方と争う気は無いんです。世界の欠片を探していて、貴方が持つて居ますか？」

銃を捨てる初老の男。姫に従う気になつたのか？いや、新たな銃を出した。何も無い空間からね。この世界の住人が召喚魔法が使える筈は無いんだけどね。そんなことよりもさあ、君は誰に銃を向けてるのか分かってるのかい？さくっと殺すよ？

「『』老人、ここは落ち着いて話そうではないか？それがアースの欠片の力かね？」

姫の肩に団々しく居座るセルツが喋る事により、当の男も驚きを表した。暫く身動きせずに考えた末に、片手だけで銃を持ちながら、内ポケットを探る男。

「お前達が探ししているのはこれか？」

内ポケットから出す縁に輝く世界の欠片。

「これは私が20年前に天使から授かったもの。お前達はこれを取り返しに来たのだろうがそうはさせない。私はまだこれを使う必要があるのだ。だから帰つてくれ」

中々、饒舌に語つてくれるね。天使から授かった。この世界の観測者はじうやら健在のようだね。

「えつと、私達は奪い取る気は無いです。でも、カイム達がそれを奪いに来ます」

「カイム達は一階下まで来ちゃつてるよ～」

僕としては、尚、姫に武器を向け続けるこの不敬者をとつとと殺つちゃつて、カイム達が来る前に欠片を手にしたい所だけどね。

「これは神が渡しを選び、私に授けたもので私の物だ。誰にも渡さない。私がこの世界を発展させるために」

「神ねえ～。馬鹿馬鹿しい。君が神と呼んでる存在はただ君を利用

していいだけだよ。僕はあいつらもあいつらを神とか言つ馬鹿も嫌いなんだよ」

とことん僕の神経を逆撫でしてくれる。

「いい年して我が儘言つのは止めなよ。そいつはあんたみみたいな非凡な爺が持つてて良いものじやないんだよ。力あるものが持つ物だ」

「クレサイダ！」

姫があ怒りだけど、僕は間違つた事は言つて無いね。クーレもそうだつたけど、全知全能な神、望めば何でも叶えてくれる神。オシリスはそんな奴じやないし、そんな存在がいる筈も無い。オシリス筆頭の観測者達は、今は全ての世界を見ているだけの存在だからね。

「クレサイダの言つ通りだ。力は力ある者が取る。これが道理だぞ、イルサ」

後ろからの声。振り向かなくとも分かるさ。姫と同じで二十年の付き合いがあるからね。付き合いたくは無いけどね。

振り向き様に素早く中級火魔法を放つルク。
カイム達を覆つた炎の中から氷の刃が襲つてくる。

まあ、ウニロがルクの魔法ぐらいで殺られる奴なら楽で良いんだけどね。僕としてはこの世界でカイム達と全力でやり合いたくないとこまだけど、それはウニロも同じ。魔力を消費し、かなり縮んでいる。違うのは、ウニロは魔力を使い果たして消滅すればいい、僕はこの抜け殻が残る。残つてはいけない抜け殻がね。

だから、僕はひたすら抑えて戦わなくてはいけないんだけど、カイムに勇ましく向かつて行く姫はまだしも、他の面々は…。

「ここには、木が無いじゃ無いか。おじさん、ウツカリだ。ウエダ殿、何処かに木は無いかね」

「そんなもん都合良くあるかよ！」

役に立たない栗鼠と逃げ惑うアース人。

ウニロのチマチマした攻撃を防ぐ。まずはウニロを無力化したい所だ。僕の後方で机を盾にしてる男に近付けてはいけない。ウニロの後方でタイミングを伺うハシュカレとマスナーが厄介だ。このままじゃあじり貧だね。

「ルク、レッドラートやパルケストのような威力の高いの出来ないかい？」

「出来る訳無いじゃんか。か弱い女の子に無理言わないでよ~」

役立たず。僕がやるしかないか。持つてくれよ。ウニロの攻撃の間隔を計り、魔法防壁を消す。一発大きな炎を産み出す。ウニロを飲み込む炎の渦。

失敗した。ウニロの前に立ちはだかる床から突き伸びた石の壁。マスターの手に輝くファイフレの欠片。やつてくれたね。

その隙を突いて、ハシュカレが僕の横を素通りし、机の上に飛び乗る。不味いと思う間もなく、老人の胸を貫く鎗。床に転がるアースの欠片。

「神よ…」

哀れな男が呟いた哀れ極まり無い言葉。

ウニロの追撃により、また魔法防壁を張り動けない。色々と不味いな。欠片へ手を伸ばすハシュカレ。そして…。

ハシュカレが鎗で暫撃を受け止める。アースの欠片をウエダやセルツの方へ蹴る血の流れる足。遅いんだよ、リセス。

「リセス、怪我してるの！」

「大した怪我じゃない！」

ハシュカレに独特的な剣を向けるリセス。馬鹿な父親に似て強がりだね。そんだけの血を流して起きながら大したこと無い訳無いじゃ無いか。まあ、良いか。どうせ、ここまで来たんだから利用させて貰うよ。君は馬鹿だけど嫌いじゃなかつたからね。

「セルツ…、リセス…悪い。後は、姫は頼むよ」

「何を言つてるんだ？」

「クレサイダ?…どうしたの！」

姫のお心遣いに感謝だね。もう、この身体は僕の物じゃないんです。そして、僕は…。

もし、本当に神が居るのなら僕は僕を消してくれと頼む。

僕は悪だ。悪を裁くんだろう、神とやらわ。

神に祈るなんて、僕も切羽詰まつたもんだね。

もし神がいるならば（後書き）

クレサイダ。今までありがとうございました。天見酒は君の事を永遠に忘れない
よ。

次回からリセス視点に戻ります。

消えるクレサイダ

意味深長な言葉を吐き、倒れるクレサイダ。外傷は見当たら無い。ならば、何が起きた。そつきの言葉の意味が否応なしに過る。

「寄るなー良いから、姫とそいつらを連れて逃げろよー早くしろー。」

近寄りうつした俺たちにクレサイダの怒号が飛ぶ。

「魔力を使いすぎて、身体に乗っ取られましたか。無様な最後ですね、クレサイダ?」

ウーロが静かに語る。俺たちに混乱が走る。

「クレちゃんーどうこうことー。」

「クレサイダ、何でそんな無理したのー。」

ルクとイルサの怒鳴り。敵味方構わず、身体が固まる。魔王が本気で怒っている。俺もせめて早めに言つて欲しかった。そうすれば、無理にこいつを利用しようとは思わなかつた。

「良じから早く行けよー!リセス、姫を逃がせ!」

クレサイダがイルサに対して横暴な発言をしたのを初めて見た。そして俺がクレサイダにここまでキレるのも。

「ふざけるなー俺に命令するなーまだ、俺はお前を十分利用してないんだぞ!利用だけして逃げんじゃねえ!」

「ならば、僕を殺せよ。君の為に！それが利用するつて事だ！出来ないだろ、甘ちゃん！」

「出来る訳無いだろ！…邪魔をするな、ハシュカレー…」

くや、今ほどハシュカレーと魔鎗が煩わしいと思ったことは無い。これほど、クレサイダを厄々しいと思つたことも無い。

「君らは馬鹿過ぎるんだよ…」

声が小さくなるクレサイダ。

「クレサイダ。我は敵ながら感服するぞ。敬意を表してその身体に乗っ取られる前に我が止めを差してやう！」

「早めに頼むよ。H子」

剣をクレサイダに向けるカイム。

「駄目…！」

カイムの前に立ちはだかるイルサ。それを見て、カイムが吼えた。

「お前がこいつに頼り過ぎた結果がこれだぞ！後は、そいつは、その身体の魔力の一部として使われる生き恥を曝すだけなのだ！お前に止める権利があるのか…」

この場の生物全てが止まる。

俺たちの心を容赦なく突き刺すカイムの言葉。イルサだけでは無い。俺たちもクレサイダの追い詰めた。

「それでも、私にはクレサイダが必要だからー。クレサイダが居なきやいけないからー。」

「イルサ。言いたい事は分かる。しかし、今はカイムが正しい。その正論は有無を言わぬ、俺達は抵抗するすべも無い。」

「姫…。僕を殺して…」

それをイルサに頼む悪漢。イルサからは大粒の涙が流れ出す。どこまでお前は俺たちを苦しめる気だー。どこまでお前は最悪な奴なんだよ。

それでもイルサはカイムの剣を止める。そして、カイムはイルサの身体を撥ね飛ばす。

俺は、ただイルサとカイムが剣を交えるのをただ見ているしか無かつた。床に這いつぶばるクレサイダに俺が出来る事は無い。助けてやることも、殺してやることも。

カイム、俺はクレサイダを裁く権利はあるのか？
俺は他の奴等と一緒に見ているしか無いのか？

カイムの薄い影がクレサイダを覆う。振り上げた刃。

「クレサイダー！」

イルサの叫びが建物内外の喧騒に負けずに轟く。

クレサイダは立つた。カイムの腹部に拳を叩き込む。カイムは勢い良く後ろに飛ばされ、遅れて剣が床に転がる音が部屋を支配する。

「人の身体を散々とこきつかつてくれたものだな。シャプト」

カイムの溢した剣を拾いながら、笑うクレサイダ。いや、それは既に、クレサイダでは無かつた。

観測者の台頭

「さて、ここは科学世界か？それにしては様々な世界の生物が集まっているものだな。フォートン以外は勢揃いか」

クレサイダだった顔がゆっくり動き、クレサイダだった眼が俺たちをゆっくり見回す。

そして、その男の一拳一動にだけ視線が注がれる。

「貴方は誰？クレサイダはどうしたの？」

イルサが妙に落ち着いて尋ねる。静かに相手を威圧するように。部屋の外のざわめきを強調させる束の間の静寂がこの部屋だけを覆う。

「観測者と言つておひづ。あのシャプトは私の邪魔をしたのでな。私の身体に眠つてもらつている。最も魔力不足に私が手を下すまでも無かつたがな」

「クレサイダも厄介な者に取り付いていたものだな」

カイムが立ち上がりながら、観測者を睨んでいる。

観測者。クレサイダが漏らしていた言葉。どう厄介なのか、聞きたい人物、俺たちの中で一番良く知つてゐる人物は観測者の中にいる。そして、この観測者は敵か味方か。少なくともクレサイダの味方では無いのだろうな。

「それにしても、その髪と眼。シルビーと魔王の双子か？何故、アースに居る」

「お母さんとお父さんを知つてゐるの？」

「ああ、良く知つてゐる。私はシルビーの兄だからな」

顔を歪めながら言つ観測者。あまり妹と中は良くないようだ。しかし、また判断に困る状況だな。イルサの伯父であり、カイムの伯父であるといつて事か。この男、どちらに転ぶのか分からぬ。

「それで、何故アースに居るのだ」

説明した方が良いのか。

「いや、介入者が居る時点で説明の必要は無しか？ そうだな、マスナー？ また、オシリスの杖で世界を壊すか？」

介入者。俺には耳新しい単語が多すぎる。話を振られたマスナーは黙り続ける。

「シールテカやその子たちを利用するか…。シールテカは何処だ？ 今度こそケリを着ける。貴様ら、介入者諸ともな」

話の道筋は分からぬが意味は分かる。穏やかには済みそうに無いと言つことは。しかし、魔王シールテカは死んでいる筈だ。

「シールテカは五年前に死んだ。我が殺した」

「何！ シールテカを殺した！」

観測者も流石にショックだつたようだが、直ぐに冷静さを取り戻した。

「それでは、シルビーはどうした？今、何処に居る？」

「母もその時に共に逝つてもらつた」

簡単に言つてのけるカイム。イルサの前でな。イルサはうつむいていてその表情は窺えない。イルサの仕草を見て眞実を確信した観測者の顔に怒りが浮かぶ。

「… そうか。私は観測者として、介入者が居る以上貴様らを止めねばならない。そして、この世界からこの世界以外の要素を排除せねば… な！」

カイムに斬りかかる観測者。ハシュカレの魔鎗が観測者を止める。どうやら、今はこの観測者の刃はカイムに向いているが、その刃が同じく異世界の人間であるこちらに向く可能性があるらしい。

「皆、行くぞ！」

「駄目！ クレサイダを助けなきや！」

観測者とハシュカレが刃を合わせた。アースの欠片はウエダさんが持つている。今、ここに危険を犯して残る理由は無い。無い筈だ。クレサイダはもう駄目だ。イルサだから動いてくれよ！

頑なに動かないイルサ。その足元に何か鉄の物体が転がった。煙が部屋を覆う。

複数人が入つてくる足音。誰かの使つた風魔法。異様な仮面を着けた黒服の銃所持の男達の姿。

「動くな。全員武器を置いて床に手を付け！」

アースの軍が到着したか。銃兵が十人。身体的に痛手を負っている俺や心理的に痛手を負っているイルサでは相手が出来ない。セルツやウエダさんは役に立たないし、今の俺とルク一人ではこの劣勢打開は難しい。ここは素直に指示に従い、捕縛されるべきか。クレサイダの指示に従い、素早く逃げるべきだった。

いつからか俺たちの頼りの綱になっていたクレサイダ。彼はもう居ない。だから、俺が考える。あいつならばどうするかを…。

アースの銃兵が十人。カイムグループが四人。俺たちの味方では無いだろう観測者一人。

敵の数が多くなる。

クレサイダのこういう局面での思考法を活用しよう。至極簡単だな。

『誰だらうと邪魔する者は力で捩じ伏せる』

なんとも、簡素な行動方針だらう。

俺は甘ちゃんだった。クレサイダが居たから甘えた思考に甘んじていた。クレサイダが居なくなつて、甘える対象が居なくなつたことを知る。あいつが俺たちの甘えた感情を全部受け止めてくれた。一番辛い役割だ。でも、クレサイダが居ない以上俺がやらねばならない。

「全員、逃げるぞー！邪魔する奴は叩き伏せろー！」

なるべくアースの兵を殺さないように。俺はやはり甘ちゃんだな。

向こうは銃を構えている。にも関わらず、反応が遅い。俺がリーダー格らしい一人の銃を叩き斬る。予想に反して他のアース兵は発砲しない。銃口を慌てて俺に向けただけ。その銃にルクの弾が刺さつていく。こいつら、撃ち慣れて無いのか？それとも、俺たちの反撃が予想を反していたのか。とにかく、もたつき過ぎだ。カイム達や観測者も俺の一刀に動き出す。無言の内に停戦協定が結ばれていたようだ。

「ウエダ君、この銃を君は使えるかね？」

「使えねえよ！持つたことねえもん。つうか、殿から君に格下げか？」

「ただ、引き金を引けば良いものじゃないのかね。おじさんは持てるが君は使えるだろ？？」

「知らねえぞ」

肩に乗るセルツに言われ、ウエダさんが上着にアースの欠片を仕舞い、足元に転がるアースの両手持ちのアサルト銃を拾う。その頃には既に転がるアース兵の数々。リーダー格の一時撤退発言。三人まで武装解除された軍団が銃を此方へ向けて下がっていく。呆気ない。此方が何をしても、弾を一発に撃たなかつた。

「おい、リセス！ズラかるぞ。すぐに第一陣が来る」

ウエダさんが先に部屋を出ようと走り出す。そのウエダさんの首元に現れる刃。

「欠片は此方へ寄越して貰おうか。アース人」

ハシュカレに鎗を突き付けられ沈黙するウエダさん。そして、ハシュカレの横に迫る影。

観測者の攻撃を避けるハシュカレにウエダさんが隙を突き部屋を出ようとするが、マスナー、ウニロ、カイムが立ち塞がる。

俺が震え始めた腹からの流血で血塗れの足を地に着けて、とにかくウエダさんをこの部屋から出さつと決めた時だつた。

「全員、勝手に動くな！貴様らは異世界に介入し過ぎた！だから、私が観測者として裁かせてもらつ！」

観測者がハシュカレを弾き飛ばす。同時にカイムの肩から袈裟切り。

速い！腕の動きは辛うじて見えた。しかし、その足運びに注目すれば、剣筋は見切れない。俺がこいつに勝てる要素は無い。

倒れるカイム。聞こえる一陣の悲鳴。

悲鳴を挙げた人物。それは奇しくも、いや、奇しくも無いのだろう。そういうことなのだろう。イルサにとって、カイムは兄であるのだろ？。どんなに酷い兄を見ていよ？とも。

イルサの悲鳴で俺たちと共に止まる観測者。

イルサが剣を落とし、カイムに近付こうとする。カイムを介抱する気なのか？

イルサがカイムに手を当てようとしたその時。カイムがイルサの勢い良く手を払う。

「私は敵だぞ！イルサ！」

一瞬で部屋が霧に覆い尽くされる。ウニロカマスナーの仕業か。

「イルサ、その事を良く頭に入れておけ！」

視界不良の中、部屋を出していく足音。俺も我に還り叫ぶ。

「全員、逃げるぞー！」

「させるか！」

この霧の中ならば逃げきれる。しかし、俺の足が、いや、身体がうまく動いてくれない。傷顔に付けられた刀傷。その後、階段を何百段もかけ上がったり、大立回りをしたり、流石に血を流し過ぎたか。これでは、足手まといだな。

数人の足音は聞こえた。全員、部屋の外へ出たか？

ならば、少々、しんがり殿を勤めさせて貰おうか。

イルサ達が観測者から逃げる時間出来るだけ稼ぐ。クレサイダから姫を逃がせと最後の遺言を受け取ったからな。守らねばならない。どうにか扉にたどり着き、ふらつく足を刀を杖に支えて仁王立つ。

「リセ君、イルちゃん！何やつてんのー！」

霧の先から聞こえるルクの声に俺も声を腹の痛みに耐えながら張り上げる。

「良いから、先に行つてろ！いや、待て！イルサはどうした！」

徐々に開いていく視界に見える部屋の中に立つ一つの人影。

衝撃的な目撃をしてしまった。

イルサが観測者に泣きながら抱き寄いでいる。

うむ…。何なんだ、この状況は！

観測者の台頭 2（後書き）

長いですね。アース編。もう四、五話続いたらやうかもしません。

でも、戦闘書になると自分の腕の悪さがはつきりと。何か戦闘シーンを上手く書けるようになる方法つてありますかね？

いや、自分で努力します。申し訳ないです。

イルサの中のクレサイダ

只でさえ、貧血氣味なのだが、この光景に頭へ血が集まり始め、薄れ始めていた腹の痛みがはつきりしてきた。この状況どうしたものだろうか？

「お、女、何のつもりだ？」

観測者もイルサの突拍子の無さすぎる行為に困惑しているようだ。答える余裕が無い程泣き崩れているイルサ。

これは、どういふことだ。確かに観測者はイルサの母方の伯父という話だから、親族との思わぬ再会に感動。それはないか。目の前でクレサイダを乗つ取り、兄を斬つた人間だぞ。俺の頭に浮かんだ愚考を追い払つ。

「リセス、イルサ、何やつて…」

「リセ坊、イルサ嬢、何やつて…」

「リセ君、イルちゃん、何やつて…」

揃いも揃つて絶句する仲間達。俺もイルサに尋ねたい。

「イルちゃん、えつと、観測者さん、何やつてるの～？」

良くこの混沌を田の当たりにして一の声が出るな。ルクのそりこうといひは尊敬に値すると今は思つ。

「わっ、私に聞くな！この女が勝手にくつついで来てだな。勝手に泣きじやくつている訳でな！私は姪に抱き着かれて喜んでる訳ではない！昔のシルビーに似ているからと言つて、姪に欲情したりはないぞ。あれだ。まあ、一応姪であつてだな！」

激しく情けない言い訳を並べる観測者。嘆かわしく豹変した観測者に俺は頭が痛くなつて来たぞ。とにかく、この観測者にイルサを預けて置くとジンさんの意味で危なそうだ。

観測者の胸に収まり泣き続けていたイルサが顔を観測者に見せる。その涙に濡れた顔を見て、観測者からウツとくぐもつた声が漏れる。

「私、お母さんに似てる？」

「あつ、ああ、そつくりだ！だから、離れなさい」

イルサのおやぢらべ無計画だらう仕草に弄ばれる哀れな観測者。先程、カイムを一蹴した人物さえも、大人しくさせてしまう女。イルサ、お前は一体？いや、これが魔王たる実力なのか？

少し頭がぼやけて来たようだ。血が足りてないな。

「イルサ嬢、とにかく観測者さんから離れないかね？お困りのようだよ？」

「つむ、そうしてくれると助かるのだが？」

ウエダさんの肩の上からセルツが言い、随分腰の低くなつた観測者が賛同する。

「まだ駄目！まだ、足りないの」

頼む。只でさえ頭が回らないんだ。分かり易く主語を使ってくれ。

「どういう事だ？…なつ、身体が！クレサイダか！魔力を身体を通して送っているのだな！」

イルサを振りほどこうとする観測者。必死にしがみつくイルサ。イルサの目的が判明した。

「『めんなさい、伯父さん！でも、私にはクレサイダが必要なの！お願い、クレサイダを返して！』

「クッ、しかしこの世界は魔力が無い！そんなことをしたらお前の魔力が枯れるぞ！」

「私には魔王の証があるもん！」

魔王の証。イルサに所持者に魔力が満ち溢れる者だと聞いていたな。

「お前がヘブルの欠片を継承したのか！いや、しかし、こいつはシールテカと共に異世界を荒らすという我らの目的に背く行為をしていた…」

「そんなの関係無いよ…」

イルサが観測者にすがり付きながら、大きく弁明を遮る。

「クレサイダは確かに少し我が儘で自分勝手で」

「少しじゃなくて、かなりだよね~」

茶々を入れるなルク。しかも、お前が言える」とじゃないだろつ。
「あれをしたら駄目、これをしたら駄目、あれをしろ、これをしろ
つて煩いし

イルサの荒唐無稽な言動に、口を出してしまうクレサイダの気持ち
は良く分かるぞ。

「それに悪いことも一杯したと思うよ

俺達の世界で一度も戦乱を起こした。

「でもね。クレサイダは本当はず「いい人なんだよ。優しいんだ
よ。素直なんだよ。私にはクレサイダが必要なんだよ。いつまでも
側に居てくれなきゃ嫌なんだよ。クレサイダが……」

また、泣き出すイルサ。何故、彼女がクレサイダを必要とするのか。
イルサの発言からは、全く説明されてない。だから、イルサがクレ
サイダを求める理由は分からぬ。俺がクレサイダが戻ってくるこ
とを望んでしまう理由も分からぬ。

「…どう足掻いてももう遅い」

観測者が動くのを止めて誰に言つともなく話す。

「既にクレサイダが動き出している。今はこの身体を貸してやる。
ただし、大切に使え、クレサイダ」

言い終えると力が抜け落ち、イルサにもたれかかる観測者。

「まあ、精々大事に使わせて貰つや。観測者」

僅かな間が空いて出した言葉。

「クレサイダあー！」

今日のイルサは泣いてばかりだな。良く涙が枯れないものだ。

「ひつ姫！家来に抱き着くなど！駄目です！直ぐに離れて下せい！もつ十分魔力は溜まりましたからー！」

「駄目。もつちよつといのまま

「今は、いのよつな」としていいる場合じや …

「クレちゃん、嬉しそうだねー。私もハグしちゃおつかなー？」

「ふぞけてないで、君等もなんとかしろよー。」

クレサイダの胸に顔を埋めて泣くイルサ。いや、もつ少しぐらい良い思いしても良いんじゃないのか、クレサイダ。別に俺はイルサにベツタリされるクレサイダに嫉妬などはしていない。

少し気が緩んでしまつただけだ。足の震えが酷くなってきた。

「リセス坊！イルサ嬢、リセス坊の手当てを早くー。」

今度は俺が参る番か。

目が不鮮明になるなか、イルサの手が当たる感覚と痛みが引く感覚を感じる。

「傷は塞いだけど、血が足りないから、動けないよ」

聞こえ辛くなつた声が耳を通り、回らない頭に届く。

「たくつ。無茶して！」

悪かつたな。

誰かに背負われる感覚。翼が顔に当たる。

「すまん…」

まだ動いた口。

「良いから、寝てなよ」

礼ぐらいたる素直に受け取れよ。

この危険な状況の最中、俺は一人、足手まといにも寝るのか。

しかし、まあ、大丈夫だな。

なんと言つても、今の俺達には、異世界を跨ぐ大悪雄クレサイダがついているんだからな。こいつなら何とかしてくれるだろう。

何とも不思議な安心感だ。

イルサの中のクレサイダ（後書き）

ところ訳で、クレサイダ復活！
そつそつ殺られませんよ。この町は！

長いアース編。後、二三話で終わる予定です。

もうちょっとアース編をお楽しみを！

強い人

いつかの夜。シーベル工城の一室のバルコニー。横に居る誰かと俺は興奮気味に話している。

「今日のアレンさんとカーヘルさんの試合凄かつたね。僕も大きくなつたら出たいな~」

「まあ、リセスが大きくなつたらな

俺の頭を撫でる手のひら。

そうか、シーベル工第一回剣術大会の夜。父上達とシーベル工城に泊まつたんだつたな。

「ねえ、何で父上は大会に出なかつたの?父上なら優勝出来るのに」

「俺が出ても、絶対に勝ち残れないからな~。不様に散るだけだつて」

我ながら子供は残酷だ。

父上の剣の腕前は見たことは無いが、流石の父上も魔法を禁止された上に剣術だけでは、世界一大剣士のアレンさんやカーヘルさんは倒せないだろう。

途中でアレンさんやカーヘルさんに当たらなければ、準決勝までは余裕で進めたとしても優勝は無理だと悟っていたのだろう。だが、そんなことを憧れの父親が勇敢に戦う姿を見たくてしちゃうがない息子の前では通用しない。

「父上、来年こそは出ようよ~。きっと、父上なら優勝出来るよ

まあ、父上の顔が俺の期待に困惑するのは分かる。しかし、アレンさん、カーヘルさんに負けたと言つて、この頃の俺は父上を格好悪いと思うのだろうか。今の俺ならば、アレンさんやカーヘルさんと同じ舞台に立てただけで尊敬に価するだろ。俺は第十一回大会で、予選で早くもカーヘルさんに当たつてしまい涙を飲んだからな。

「あのな、俺は剣はからつきし駄目なんだつて」

「でも、父上は強いんでしょ」

父上のビハシヨウモ無こと言ひよつな笑顔。

「あのな。リセス、お前の父ちゃんはお前が考えるほど強くはねえよ。眞が言うほど偉大な人間じゃねえし、凄い力も持つてない。賢者だ、英雄だなんて言われるより、今やつてる高学院の教師の方が性に合つてる平凡な男なんだ」

俺は煙草に火を灯しながら、何かを思い深げに顔を緩めながら言つ父上。

「こじけるなよ。リセス」

おそらくこの時の俺は、いつも通りそつやつて自分を卑下して表現する父上に顔をしかめたのだろう。

「強さってなあ、色々在るんだ。例えば、アレンやカーヘルみたいに剣が強い強さな。でも、それはあいつ等の強さの一つでしかない」

強さの一つ…。

「剣が強いだけなら、あいつらは強く無い。人の強さを継ぐ勇気。
だから、あいつらは強い」

人の強さを継ぐ勇気。

「それだけじゃない。他にも強さはある。誰かを守りうとする強さ。
誰かの命を救う強さ。自分の仕事を果たそうとする強さ。自分の思
いのままに生きようとする強さ」

「父上は一杯の強いんだね」

この時は分からなかつた。今なら分かる。この時父上が仲間達の思
さの話をしていた事が。

「違うな。俺はそんな強さは持つて無い。弱虫で歴史馬鹿で微弱な
男だ」

そう。今ならこの後父上に頭を擦られながら言われた事も分かる氣
がする。

「でもな、あいつらと旅して気付いたんだが、俺には誰にも負けな
い強さを持つてるんだぜ。これだけはこの世界で絶対に負けない強
さだ」

俺の中で世界一強い父上の語る世界一の強さ。

「何でか知らないけど俺の周りには強い奴らが集まつて来ちまつ。
アレンもユキもジンもエルもおっさんもニーセもカーヘルも。そん

な奴らが俺の周りに居る。なつ、そんな強い奴らに囲まれて負ける気はしねえだろ?だから、俺は強いんだ」

強い人を集める人の強さ。それがライシス・ネイストの持っている一番の強さ。

「僕も強い人が集めれば強くなれるの?僕も強い人を集められるかな?」

笑いを堪える父上は言つ。

「そのうち勝手に集まって来るもんだぜ。お前はライシス・ネイストの息子だからな」

父上は煙草を加えながら、俺の肩を優しく一度叩く。この時の父上の言つ勝手に集まって来る。今思えば、父上は俺がここにいつらの中に居る事を予言していたのか。

「ライ、五才児にはまだ難し過ぎるぞ」

「ユキちゃん。お願ひだから気配を消して背後に立たないでくれよ

父上の隣に座つていた俺は後ろから、抱き抱えられ母上の膝に收められる。今思えば恥ずかしい事極まり無いが、まあ、母上の抱擁は、心地は良い。逆らいよつの無い眠気が沸き上がつて来る。

「でもさあ、ユキちゃん。ユキちゃんだつてリセスに剣を教えてるじゃん。まだ、早くないか?」

「私は五才の時から竹刀を握つたぞ。忍びの道を極める為に」

「いや、リセスは二ンジヤにならなくて良いの。俺は優秀な歴史家になつて欲しいから」

「とにかく、何をするにしても身体を鍛えておいて損は無い。誰かさんも体力が少なくて困った事が多々あるだろ?」

「俺はある程度必要な分はあるから良いの」

俺はそんな父上と母上の仲睦まじい会話を聞きながら母上の腕の中で、温もりを感じながら眠りに着く。

しかし、夜にしては明るい。

いや、そうか。これは夢だ。今は朝なんだ。起きなければな。この父上との過去の会話を忘れないよつて、夢の中で母上の温もりをもう少し味わいたいという十八にもなつて恥ずべき感情を捨てて。

光りがぼんやりと映つて来る。

おかしい。夢の中の母上の温かさがまだ抜けない。夢の母の温もりを忘れないほど俺は甘つたれ坊主だったのか?

いや、違う。夢では握られていなかつた俺の手が握られている。固体面に横向きに寝ている俺は後ろからも抱きすくめられている。この時が一番可愛らしいな。

首筋に当たる微風。その風が当たる度に俺の背中に密着して動く柔らかいもの。

回らない頭で、ルクを起こさないよう首だけを回し後ろにある違和感を確かめる。

何だ。イルサが俺に引っ付いて寝てるだけか。

「こいつらが俺にくつづいて寝ているだけだ。

：だけだ？

急激に顔に血が昇ったせいで、回り始める頭。いや、頭が回り始めたから顔が沸騰し始めたのか？そんな事はどうちでも良い！

今俺に重要な単語。クレサイダ、ジンさん、殺される。

その三単語が頭に飛来して、身体を勢い良く起こす。周囲にはガラスの無い窓から入る光、所々ひび割れが目立つものの滑らかな灰色の石の壁。生活用具の一つも無い建物内に人影も無し。よし、クレサイダは居ないな。しかし、甘かつた。

「やあ、リセス坊。若いつて良いねえ～？おじさん、良いものを見せて貰つたよ」

クツ、今のうちにこの見物者を消して置くべきか。

「大丈夫だ。クレサイダとウエダ君は買い物と偵察に言つたよ。おじさんは口が固いしね」

断じて信用出来ん。

「リセス？起きたの！心配したよ～！」

「リセ君！起きたの～！良かつたあ～！」

引っ付いていた俺の突然の動作につられて起きた一人。そのまま俺を強く挟み込む。心配するなら、今すぐ離れてくれ。

「なあつ！リセス！何を！」

五月蠅い一人に搔き消された不吉な足音。

「…モテモテだな」

ウエダさん、そんな事より弁護を頼みます。

「ははは、姫をたぶらかしてるねえ、リセス？しかも、姫をたぶらかすだけじゃもの足りないんだね、リセス？そこまで君が軟派者だとは思わなかつたよ？ところで、人生の最後に姫に抱擁してもらえるなんて良い思い出が出来たねえ、リセス？」

出来れば、こんな思い出を最後にしたく無い。

純粹に俺を心配して泣き付く魔王。

事態を把握してる癖に、面白半分で離れようとしない魔女。魔王様が離れた瞬間に俺を消し炭に変えようとしている魔王従者。

ただ、状況を楽しみ、楽な傍観者になる栗鼠。

俺を助けるか少し悩んだ末に、買ってきたものを袋から出し、整理

を始めるアース人。

父上、俺はこいつらが集まって、強くなれたのでしょうか。

強い人（後書き）

ということです、天見酒の中では、この冒険シリーズの最強人物はやっぱりライシス・ネイストなんです。

そして、ネイストの血を引くリセスも最強になるかも。しかし、多大なる誤解と苦労を背負つのも、ネイストの呪われた宿命。

これからも天見酒からの呪いをバンバンと。

6月下旬に書き始めたこの物語も既に中盤に。

ここまでのお話は天見酒と読者様の提供でお送りしました。

ここからは天見酒と読者様の提供でお送りします。

になつたら良いです。まだまだ続きますが皆さんに読み続けて頂けたら幸いです。

ヘブヘルへの招待

俺が倒れた後、イルサにより魔力を注ぎ込まれたクレサイダにより、セレミスキーにより現界召喚を行われ、直ぐに窮地は脱したらしい。

ウエダさんの大まかな説明によると、同じ国の別の地域の捨てられた廃墟の中。

先のクレサイダの暴動が魔王イルサテカの名裁きで治まり、俺たちはかなり遅れた朝食へと移行する。コンビニ弁当というコンビニという店で買った弁当。味は悪くない。しかし、この世界の料理は、俺には味付けが濃すぎる。調味料を入れすぎじゃないだろうか。そんなことを考えていた矢先にこの世界の新聞から田を離したウエダさん。

「それで、これから俺達はビジツするんだ

ウエダさんが田を通してウエダさんの言つ『俺』達。

「本当にじこ免なさい」

イルサが謝り、それに各自が続く。

「まあ、さつきも言つたけどよ。こうなつちまつたら、もう仕方ねえよ。お前達が知らなかつた防犯カメラのことを考えてなかつた俺も悪いし」

ウエダさんが床に置いた新聞。白黒でなく色がついている一番大きな写真には、俺達が昨日強引に入つたビルが写し出されている。そ

して、その写真の下に貼られた俺達には全く撮られた覚えのない俺達の顔が連なる。カイム達も、そしてウエダさんも同様に。字は全く読めないが事態は少し読める。俺達はこの世界で犯罪者になってしまった。ウエダさんを巻き込んで。

「謝るのは止めろって。謝るよりは、どうにかしてくれよ。俺はテロリストとして首を吊りたく無いんからな」

ウエダさんはジョークを言つてゐるつもりなのだろうが場は和まない。声の調子は明らかに可笑しい。内容も加害者な俺達が笑い飛ばせる代物じゃない。

「ヘブヘルに来れば良いさ。君の衣食住ぐらいは補償するよ」

「そう！ クレサイダの言つ通りだよ！ ウエダさん、ヘブヘルに来て！ リセスもルクちゃんもセルツもみんなでヘブヘルで愉しく暮らそうよ…」

それはイルサの願望が混じり過ぎだろ。俺は生まれ育ったクーレで暮らすぞ。

イルサがどうしても俺と一緒に居たいと言うのなら…、そう、あれだ。お前がクーレに来れば良いんだ。

「それでそのヘブヘルとやらへばビツヤツて行くんだ？」

「召喚魔法の応用だよ。僕達自身を別の世界に召喚するんだ。理解出来るかい？」

「まあ、昨日みたいに魔法でどつかに行くって事だな」

俺にもその程度の知識に毛が生えたぐらいしかない。細かい事を知らないでも出来る事は出来るもんだ。

「そこで相談なんだけどね？ 一旦、ヘブルに行こうと思う。欠片の事を考えると既に姫が持つているから寄り道になるけど、まだ欠片の残るアール、フォートンは少し厄介な世界だ。僕の魔力の事やウエダのこれから事を含めて、体勢を整えてから行きたいと考えてるんだけどさ？」

クレサイダの言い分は頷ける。俺達にも連戦の疲れはある。一旦は何処かで少し休息を取るべきだろう。しかも、昨晚、カイムも観測者に深手を負い、その他の面子も少なからず疲弊しているだろう。俺達の競争相手も休息を必要とすることだろう。

しかし、ヘブルか。信仰心は高い訳では無いが、クーレで育った俺は、神居る世界アールと対極に魔王の居る危険な世界と言うイメージが強く、僅かな抵抗がある。クーレでは、悪い子は魔王にヘブルヘルへ拐われて骨ごと食べられるというのが、大人達の子供への脅し文句になつてゐる程だからな。

実際に魔王と対峙した父上が、駄々つ子を叱る親を見て俺に言つたのは、“あの魔王なら子供を拐つても、大事に可愛いがつて育てそうだ”、だつたが。

前魔王の人柄は分かり兼ねるが現魔王を見ていると父上の言い様も分かる気がする。

「ヘブルに帰るの！ シュナアダやカリサペクは元気かな！」

口元をソースで汚し、ルクに拭かれながら喜色満面の魔王様が君臨する世界。案外平和な世界説が俺の中で強まっていく。

「皆をお城に招待するよ。一杯ご馳走食べさせてあげるねー。」

「わあ～なんか凄く楽しみだね～！ヘブルではよろしくね、イ
ルちゃん！」

その「馳走のメインディッシュは俺達の丸焼きとか。それは無いよ
な。

まあ、少し頼り無いがヘブルの王のイルサがついているし、それ
なりの地位についているのだろうクレサイダもいる。その一人の連
れである俺達には安全な世界だろう。

「ヘブルのお肉を使った料理はすっごーく美味しいんだよー。」

何の肉を使うかは聞かない方が身の為だろう。

ヘブヘルへの招待（後書き）

次回から、ヘブヘル編へ突入！
の前に、後一話アースでの話を。

最近、更新停滞気味で申し訳ありません。

明日からやっと取れた一週間の長期休暇なんで、張り切って書いち
ゃいますよー

どうぞ、この機会に、御意見、御感想、御質問、御指摘、御文句、
遠慮なくバンバンバンと送っちゃて下さい。

と、こんな作品を読んで下さる有り難き読者の皆様に、遠慮知らず
に図々しい作者です。

変わる時

普通の交通事故でお袋と連れ立つて死んだ親父殿。

『お前は本当に何がやりたいんだ? どうせそんな物、今のお前には無いんだろう。だったら、とにかく動けよ。そうしてれば、そのうち見えてくるもんだ。お前は動かないから何もやりたい事が無いんだ。アルバイトを繰り返すだけでなくて世界旅行に出てみるとか、エベレストを制覇してみるとか、何か自分を試すようなことをしそひよ』

親父が大学を出てフリーターになつた俺に言つていた酒の席での決まり文句。親父の言つている事は分かる。だが、俺が一步踏み出す事は無かつた。両親が居なくなつた後も。何かでかい事をやってみたい。そんな事を思いながらも過ごす小さな日々の繰り返し。

自分を変えたい。そんなことは、いつも望んでいた。でも、挑んでいなかつた。挑め無いだろ。挑んでも俺は何が出来る訳じやない。そんな葛藤の中の日常。

それが終わつた。こいつらによつてぶち壊された。

望まずして得た挑みへの片道切符。後戻りは死刑へ急行しかない。

枠だけの窓の外には、道幅の狭い名ばかりの県道。通る車の数は皆無に等しい。俺がこれから行こうとしている道を示しているように前にも、後ろにも人は居ない狭い道。

俺がこいつらについて行けば、俺のやりたい事やらは俺の前に出てくるのか? 情けないことについつも通り一步が踏み込めない。

「ウエーダさん。灰、落ちますよ？」

火を点けた煙草。煙は吸われる事なく宙を泳ぐ。

それを指摘した青年。俺より若い奴。でも、こんな訳の分からない旅をしている。だから、聞いてみたくなった。

「なあ、リセスは何でこんな旅してるんだ」

俺の質問はそんなに難しいことだつたのか？真剣に考え込み始めたリセス。

「自分の世界を守りたいからだと思います」

大層な事をしている割には少し自信の無さそうな表情だな。

「目的とかはつきりしてねえのか？」

「はい…。いろいろと考える事がありますが、どれが正しいのか

何とも模範的な奴だ。照れるクレサイダに魔力補給を目的に引っ付こうとしているイルサを僅かに見たのがバレバレだぜ、シャイボーグ。

イルサに何やら想いがあるようで。

「フム、中々面白い話をしているね、悩める若人達。そんな君たちにおじさんが助言をしてあげよう」

俺の肩にひょひょ現れた栗鼠。まあ、実は御年八百歳といつ栗鼠

に、その助言とやらを聞くだけ聞いてみようか。

「何かを始めるのに目的なんて初めて決まっている必要はないわ。何かをやつている内に見付かることもありますば、無くなることもあります。そんなものを追い求めていると何も出来なくなってしまうのだよ」

この栗鼠、まるで俺の事を見透かしているように呟つてくれるとだ。

「そんな幻想的なものについては考えるのはもつと後でも良いのでは無いかな?君はまだ若いのだからね。そつま思わないかい、ウエダ君?」

とにかく動けつて言いたい訳か。このチャンスを生かして。

セルツに笑みで返す俺。笑えるな、栗鼠に諭されている俺は。

俺に何が出来るかは分からんがまあ、やるだけの事はやつてみますか。

そう思つと早ことこりへブヘルとやつて行つてみたくなつてきた。こんなに何かを楽しみなのは久し振りだ。俺は上手く乗せられたもんだな。

魔王の存在

太陽がさんさんと照る真つ青な空、白く綺麗に整えられた街並み。商人達が店を並べる坂道の先に見える壮健な城。

「微妙に場所がずれた。ま、城の近くだし良いか」

俺のクーレで培つたヘブヘルのイメージは完全に覆された。太陽の昇ることの無い万年の夜。廃墟の群れの中、雷雨にさらされるボロボロな古城。そんなイメージの欠片も無い、背中に翼を生やしただけの普通の人達が過ごす、普通な街並み。

「あつ、イルサだ！」

「本当だ！」

歩き出したクレサイダに続こうとした俺たちに聞こえる子供の声。その声に反応した大人達まで集まって来てしまう。

「タムス、レトカ！元気だつた？」

走つてよつて来た二人の子供に抱き着くイルサ。ガキが三人だ。どういうか、お前は魔王なんだよな？

「イルサこそ、酷い風邪引いたんだろ？大丈夫だったのかよ」

「タムス、魔王様にそんな口聞いたらいけないんだよ！」

「エ？私は風邪なんか引いてないよ？だって、今まで異世界に…」

「待った！姫、待ってください」

クレサイダのいきなりの待つたに、クレサイダの存在に気付いた子供達がイルサから離れる。イルサに耳打ちを始めるクレサイダ。つまりところ、イルサの不在は風邪で寝込んでいることに処理されているという事だろう。

「とにかく、早く城に行くよ。ここではゆっくり出来ないから。姫、行きますよ」

クレサイダは瞬く間に出来た人混みを見ながら俺たちに告げる。その人混みの中心にはイルサ。『病気は治ったのですか』、『これを持つて食べて下さい』、『イルサテカ様、どうぞ今日こそ私の想いを受けとつて下さい』。

なんとも人気のある魔王様のようだ。この街の住人にとことん好かれているらしい。魔王としてよろしいのかは分からないうが。

「イルちゃん、人気者だねえー。羨ましいな～」

「えつ、そつかな？私って人気あるかな？」

歩き始めてなお、四方から声を掛けられるイルサ。こいつが歩くだけでお祭り騒ぎだ。そして、俺には少し罪悪感が芽生える。ここまで、民衆に好かれているイルサを無理にクーレに喚び出してしまったことに対しても。

ふと、空から舞い降りて来る集団。その筆頭に立つ漆黒の鎧に身を包む男。

「パシクカダ、出迎えかい？」苦労だね？

「クレサイダ。そいつがイルサテカを召喚した野郎か？」

話が噛み合わないパシクカダが指を指した先には、ウエダさん。あまり友好的な態度では無い。機嫌も良さそうでは無い。

「俺がイルサを召喚しました」

自分の罪を人に擦り付ける気は無い。

「いい覚悟だ。なら、死ね」

俺の弁明を聞く気は無いらしく、剣を抜くパシクカダ。足が速い！こちらが抜く前に殺られる。居合いしか、選択肢は無い。力タナに手をつけた。

イルサが間に入らなかつたら、どちらかが殺られていた筈だ。

「駄目だよ。パシクカダ。リセスは私の友達だからね」

「イルサテカ、お前は甘過ぎるぜ」

剣を收めるパシクカダ。その敵意ある物言いに、イルサに忠実と言う訳では無い事を感じる。

「まあ良いか。クレサイダ、シユナアダがイルサテカの帰りを首を長くして待つてるぜ。急げよ」

それだけ言い、俺を一睨みして、城へと部下を引き連れ飛び去つて

行くパシクカダ。

「リセ君、大丈夫〜？」

「ああ」

ルクの声に冷や汗が垂れているのを感じる。イルサが止めに入らなければ、俺は確実に殺られていた。

「クレサイダ、何なんだ。あの野郎は？」

ウエダさんがクレサイダに訝しげに尋ねる。

「彼はカダ。軍隊の最高指揮官長つてところかな」

とんでも無い奴に目を付けられたものだ。

「カダって、名前の一部じゃないの〜？」

「違うよ。君達の世界では家名が名前に付くだらう。レッドラートとかネイストとか。ヘブルはその代わりに役職が付くんだ。僕なら名前のクレサに、魔導士長を意味するイダだ。これは職業によつて異なる」

なるほど、家名の代わりに職業名が使われているのか。

「ヘブルは実力主義。君たちの世界と違つて、どんな高貴なお家の出身だらうと実力が伴わない奴は上にいけない世界なのさ」

リストを名乗るには俺は力不足だ。決まつた家名で引き継がれるよ

り、実力によつて代わる名の方が確かに共感出来る。

「じゃあ、イルちゃんのテカつてのは、魔王つて意味なんだ~」

「うん、そうだよ。世界で一人しか名乗っちゃいけない名前なんだよ」

イルサが無邪気に自慢する。

少し納得がいかない。テガがイルサに相応しいのだろうか。兄であるカイムは何故テガを名乗れなかつたのか？

敵ながら一つの方があつてはいる気がするのだが？

クレサイダに聞きたいところでは有るが、今、聞くことでは無いだろ？

イルサの城は直ぐ目の前だ。

魔王の愉快な側近達

城の俺たちの背を遙かに凌駕する正面大扉がクレサイダが軽く手を触れただけで自動に開き出す。

その先はダンスホールだった。

外見が普通なら内装も普通だ。拷問器具が置いてあつたり、不気味な悪魔の像が飾られていたりしない。シャンデリアや綺麗な装飾、歴代の魔王だらう肖像画。そして、何やら催しがあるらしく忙しく動く人々。イルサの凱旋パーティーでもやろうと言うのか？

俺たち、イルサやクレサイダの登場に動きを止める従者達。

「ただいまー！」

イルサの大声に場は先程の五月蠅さを取り戻す。イルサへの歓声が凄い。大人気だな魔王様。

「時間がありません！全員、自分の仕事に戻りなさい！」

イルサに寄つて来た従者達に鋭い喝が飛ぶ。

「やつとお戻りになられましたか。イルサテカ様」

緑髪の目付きが鋭い男。口調は優しいがにこりともしない、どこか叱責を感じる語感。

「えっと、『めんなさい。シユナアダ』

あまりイルサを責めないでやつてほしい。俺がイルサを連れ回してしまったのだから。

「まあ、良いでしょう。そちらの御仁も反省なされてようですね」シユナアダの目が俺を見抜く。鋭い洞察力だ。何もかも見透かされている気持ち悪さを感じる。

「名乗りが遅れました。私はシユナアダと申します。イルサテカ様の元で執政を執り行つております」

シーベルトのロンタル執政官長はいつも笑顔を絶やさず捉え処がないが、このシユナアダは無表情で捉え処が無い。その表情の後ろに何を隠しているか分からず、此方がやりにくい事に関しては同等だが、執政官とはこういう人間こそが合っている職業なのか。どちらにしても、俺にはやりすらい相手である。此方も失礼にならない程度に軽く名乗るだけで良いだろう。

無表情に見つめられるプレッシャーの中、冷や汗を搔きながら俺が真っ先に、ウエダさん、ルクと続く自己紹介。

ルクが名前を告げた時だった。突然、僅かに見開かれるシユナアダの瞳。ルクの何かがこいつの無表情を打ち崩した事に俺は驚いた。何だ、この微妙な沈黙は？

「お久しぶりですね。セルツティン殿」

どうやら、シユナアダはルクの肩に留まるセルツに驚いたようだ。俺はシユナアダとセルツが知り合いだった事に驚く。こいつはヘブルにも行った事があったのか？

「シユナアダ殿、済まないけど、私には頬と会つた覚えは無いね？
どうも年せいが近頃、記憶が曖昧でね」

帽子を深く被り直し、明らかに虚言を吐くセルツ。

「呪嘆者に似て、惚けるのが、御上手ですね。あの事を忘れた等と
…」

「イルサさま～！」

耳をつんざく高い絶叫。凄い勢いでイルサに飛び付く女性。この女性の出現で聞き出したい話は中断される。

「イルサ様あ、私を置いて危険なクーレへ行つてしまつなんて！ イルサ様、お怪我はありませんか。クーレの野蛮な男どもにあんなことやこんなことをされたりしてませんか？」

「良いから、姫から離れろよ、カリサペク！」

イルサを頬擦りをしながら」とおしそうに愛でる女性。クレサイダの言葉は聞いていないようだ。かなり悦に入つていらつしゃる。

「カリサペク？ あんなことやこんなことって何？」

イルサの純粋な質問に固まるカリサペクちゃん。

「イルちゃん、それはまだ知らないって良いことだよ～

「ルク、良いフォローだ。

「いえ、そろそろイルサ様もそういう事を知らなければいけない時かも知れません。僭越ながら私めが、今晚じっくりとお教え差し上げ…」

「おい、据わった目が本気を表してるぞ。そして、今晚イルサが危ない。」

「いい加減にして置け、カリサ」

カリサペクの翼を引っ張る手。鎧を脱いで、Tシャツとジーパンのラフな姿になつたパシクカダ。

「ああ、イルサ様。何をするんです、パシク兄様！私はイルサ様と久々の熱い抱擁を交わしているというのに…」

「こいつら、兄弟だったらしい。」

「カリサペク。客人の前です。落ち着きなさい」

パシクカダに抑えつけられなあ、イルサに向かおうとするカリサペクにシユナアダが言い、正気を取り戻させる。

「イルサテ力様。お帰り早々ですが、お仕事があります。今夜、貴女様の御復帰の祝いを開きます。御準備の程を」

淡々と告げるシユナアダに首を傾げるイルサ。

「貴女様の不在はご病氣で臥せつていると言つことにしておきましたが、そろそろ地方有力者達が疑いを持ち始めた頃です。貴女様の

姿をお見せしませんといけません」「

王の不在による反乱を防ぐ為の顔見せと言つ」とか。政治臭いな。

「貴殿達にも今回の件に『協力を願いたいのですが如何でしょうか』

丁寧な態度だが、要は口裏を合わせて置けと言つ」のだ。その表情からはお願いではなく、脅しの色が濃いな。まあ、イルサ不在の責任の一端を担う俺が断ることはしないが、こいつは少し気に入らない。

「では、カリサペク。イルサテカ様の晩餐会での準備を。クレサイダは異界からの殿方達を客室に案内してあげてください。パシクカダはそちらのお嬢様を客室に丁重に案内して下さい」

パシクカダへの“丁重に”が強調された。

「おい、俺が野郎どもを案内するぜ」

「駄目です。貴方なら『クーレの剣士の実力がみたいぜ!』みたいな事を言って、喧嘩を売りそうですからね」

凶星だったのか、舌打ちをするパシクカダ。俺もこの人と剣を合わせてみたいが、今はやめておいた方が良さそうだ。

クレサイダの“行くよ”につられて、動き出す俺達。

そのクレサイダの背中に一言がかかる。

「クレサイダ、御苦労様でした」

「君もね」

シユナアダの一言だけの労いに、振り向かずに一言で返すクレサイダ。

今まで言葉らしい言葉を交わしていなかつた二人。この二人の僅かな信頼関係を会間見た気がした。

俺は少々羨ましく思つてしまつ。

魔王の愉快な側近達（後書き）

これは全年齢対象小説です。十五禁にランクアップするべきなのか
？本気で悩み始めた天見酒。

いけませんなあ～。カリサペクは、悪い意味で二ーセ様を越える存
在を生み出してしまったかも。

「セルツ、一つ聞いて良いか?」

「そう言つて一つですむ人はそうやう屈ないだろつがね。

「ハハハ、女の子の口説き方ならば、おじさんにこゝらでも聞きなさい」

「そんなどうでも良いことでは無い」

リセス坊、君にとつてはどうでも良いことでは無いと感づよ。ルク嬢が可哀想じやないか。少し人生(?)経験豊富なおじさんに聞いておいた方が良いんじやないかな。

「シユナアダさんと知り合ひだつたんだな」

やつぱり、そこをつづくのね。さてさて、どうするかね?

「頼む。教えてくれないか。そのあれだ。こいつの何だが。セルツに不信を持ちたく無い」

弱つたな。名前だけじゃなく、その真剣な眼差しもある坊やに似ているか。クレサイダ君はどうでも良いつて態度か。リセ坊に、あなたが隠した真実を明かさないように少しだけ教えても良いかね、主人?

「前を見たまえ。リセス」

私はウエダ君の肩から急に飛び移られて此方を見たりセス坊に言つ

ただけでは無い。の方があの坊やに言つていた、私自身が心掛けた言葉だ。

「クーレの歴史にリンセン・ナルスやレクスター・シークスは記されているかね？」

久々に口に出す名前だね。本当に懐かしい。

「もちろん、知つてゐる。魔王を倒した大英雄とその英雄を育てた男だ」

素晴らしい誤解に笑いが込み上げて来てしまつね。

あのはな垂れ小僧が大英雄とは傑作だね。しかも、主人にも誤解は生まれているらしい。まあ、遙か昔のこと、そんなものなのだろうね。

「という事は、彼等がクーレに召喚されたシールテカやシールテカの側近達と戦つた事は知つてゐるのだね」

「あ、ああ」

フフフ、鈍感なりセ坊も段々分かつて来たようだね。

「おじさんは、クーレに召喚された事が在るつて言つたよね。召喚者はレクスター・シークス」

何とか理解しようと考えるウエダ君と違つて、話を聞きながらも止める様子なく無言で進むクレサイダ君の背を、ただ見ている君にはもう語る必要は無さそうだね、セ坊。

「や、それじゃあ、セルツはクレサイダ達と」

クレサイダ君に遠慮してか、声を小さくなるリセ坊。

「紳士ならば、人の事情を機敏に察してあまり深くは立ち入らないものだよ」

そろそろ昔話はお開きにしないかね。

君の動搖も分からぬでも無いだらうけどね。

父上や母上が間接的に戦つた君やルク嬢と違つて、おじさんは当事者として、クレサイダ君の姿を見たのだからね。

クレサイダやシールテカがクーレで行つた許されざる非道をこの眼で見た。

でもね、もう遙か昔の事なんだよ。そつ、クレサイダや魔王は変わるぐらいに。だからね。

「リセス、前をしつかり見なさい

これからこの世界を変えるかもしれない若者達に、そう言い聞かせるぐらいしか私には出来る事は無いのだよ。

短いです。

初めてのセルツ視点如何でしたでしょうか。

書いていて、何故か渋めのミルクティーを飲みたくなつてきました。天見酒です。

ヘブヘル編は視点が「ロロロロ代わる短い話が続きそうです。落ち着きが無くなりますがご了承下さい。

ただいま、私の場所

城の三階。主の居ないお父様やお母様の部屋とお兄ちゃんの部屋に挟まれた静かな私の部屋。この階に住む、誰も待っていない一人取り残された私。

「姫と二人きり、あのクレサイダも今は居ない。フフフフ」

私の幼い頃からの世話係りのカリサペクがいるけどね。

「えつと、カリサペク？お留守番ありがとう~。」

「ひつ、姫~！もつ大好きです！」

クーレに召喚される前と同じで塵一つ落ちていない部屋。カリサペクが毎日お掃除してくれてたんだね。私も大好きだよ。

「それで、私はどうすれば良いのかな？」

「まずは、お風呂に入られて、お召し物を替えませんと。お背中をお流します。さあ、お風呂へ~。」

「えつと、一人で入るから良いよ。カリサペクはここで待つってね？」

カリサペクと入ると何故か凄く疲れちゃうから。

「ここでイルサ様の風呂上がりを待つ…。ハツ、ハイ！先にベッドの中でお待ちしておりますね！」

そろそろ日が暮れるのに、今からお風呂に浸かってたら、夜に寝れなくなつちやうじよ?

本当はのんびりお風呂に浸かりたかったけど、早めに出て、カリサペクが既に用意をしておいてくれた服を来てお風呂を出る。魔王の正装だつて言つ黒を基調にした服。動き難くてあまり着たく無いんだよな。

「カリサペク。起きなさい」

私のベッドで本当にお昼寝してるカリサペクを起こそうとしているシユナアダが居た。私はシユナアダが苦手。お父様の時から仕えてる優秀なアダなんだけど、笑ってくれた事無いんだもん。いつも私に仕事を持ってくるし。

「シユナアダ、カリサペク疲れてるんだよ。寝かせてあげてよ」

睨まないで、怖いよ。

「本当は解雇ですがね。まあ、彼女の主人が消えてから、彼女は毎晩殆ど寝ずに泣き明かしていましたからね?とにかく、起きなさい、カリサペク!」

シユナアダの声で起きるカリサペク、そんなに心配してくれたんだ。

「カリサペク、『めんね』

「な、何がでしうか!姫が私に何を謝る事が」

「カリサペク、私は忙しいので、用件を言いますよ。会場の準備が整いましたら鐘を鳴らしますので、イルサテカ様をお連れしてください。以上です」

それだけ淡々と告げると部屋を出ようとするシユナアダ。ドアノブに手をかけて振り返ります。

「イルサテカ様。お疲れと存じますが、今夜だけは頑張つて下さい。では、失礼します」

シユナアダは本当は優しいんだ。でも、とっても照れ屋さん。

「あの姫、申し訳ありません。姫を待つ間、姫のベッドで寝てしまうなど。在つてはならない事」

私に頭を下げるカリサペク困ったな。全然怒つて無いのに。それに

「カリサペクは私の心配して夜寝てなかつたんでしょう。『めんね』

そう、私が悪いんだ。でも、嬉しいな、そこまで心配してくれてたなんて。カリサペクやシユナアダが居るヘブルに戻つて来て良かつたよ。私の大切な人達だからね。

「本当にご心配しておりました。姫があのカイムと同時期に姿を消し、異世界に喚ばれたのでは無いかとシユナアダ様が御推察なされた時は怪我等をなされないか…」

「大した怪我してないよ。ちょっと擦りむいたぐらいだよ

リセスやクレサイダが守ってくれたもん。

「それだけではありません。全世界一の愛らしさを持つ姫が異世界でくそ野郎どもに捕まつてあんな事やこんな事をされるのではと、されてませんよね！姫は汚されてませんよね！」

勢い良く詰め寄つて来るカリサペクに一步後退。少し怖いよ。

「さつきも聞いたけど、あんな事やこんな事つて何の事？」

ルクちゃんはまだ知らなくて良いつて言つてたけど知りたいな。セルツさんが良いことも悪いことも知りなさいって言つてたもん。私の質問にカリサペクが言葉に詰まつてるつてことはかなり難しい事なのかな？

「良いですか、姫。男性に身体を触られてたり、過度に密着されたり、その一緒に寝たりしましたよね」

「したよ。リセスとギュッとしたりとか一緒に寝たりとか。でも、お父様が言ったように身体が腐つたりしなかつたよ？」

カリサペクが固まつちやつた。でも、私の身体に悪いことには無かつたんだよ。

「イルサテカ様？」

カリサペク、眼が怖い、胃から捻り出したような低い声でフルネームで呼ばないで。昔、いたずらした時に見た本当に怒ったカリサペクだ。私、悪いことしたの？

「そのリセスとかいうクソ野郎は今日姫が連れて来た輩のどちらか

で？」

「さうだけど、リセスはクソ野郎じゃないよ。ヒツヒツも優しくて、頼りになるんだよ」

「そうですか…、リセス様がそこまで…ね」

「な、何でそんなに、カリサペクは怒ってるの？ 私悪いことしちゃつた？」

「今のカリサペクは凄く怖いよー！ リセス、クレサイダ、ルクちゃん、誰でも良いから助けて！」

「いえ、姫は何も悪くありませんよ」

あっ、いつものカリサペクに戻った。

「ただ、そのリセス様には特別に丁重なおもてなししが必要なようですね。感激で息が出来なくなってしまひほどのおもてなしを…。後でご紹介下さいね？」

「うん、リセスにはお世話になつたから宜しくね」

優秀な世話役カリサペクの丁重なおもてなししかあ、是非やつてあげて欲しいな。リセス、喜ぶかな？

他の町にもこの世界を楽しんで欲しいな！

ただいま、私の場所（後書き）

いけませんな。カリサペクが俺の脳内で反乱を起こしました。一セ様の動乱の危機を何とか乗り越えた天見酒政権は、またしても更なる脅威に曝されています。このままで、サイト運営陣に抹殺されてしまつ。

皆様の天見酒政権への応援を宜しくお願いします。

まだ15禁には入つて無いですね？

俺にしては長いので切ります。

シユナアダの言う魔王の顔見せ会は確かに国を運営するために必要な行事なのだろう。衆目の前で、魔王の玉座に借りて来た猫の如く大人しく座っているイルサが引っ張られるのは仕方が無い。

しかし何故、他世界の俺たちまで引っ張り出されなければならないんだ！俺はこういう社交の場というのは苦手なんだ。勘弁してくれ。

「俺、晚餐会つて初めてだわ…」

先程から、同じことを繰り返すウエダさんと、早く抜け出したい旨を瞳にのせて、元凶クレサイダを睨んでいるのだが、我関せずに徹するクレサイダ。こそ、涼しい顔しやがつて。

「何かワクワクするねえー！イルちゃん挨拶とかするのかな～」

胆が座つているのか、家系がらこういつ場に馴れているのか、一人楽しむルク。

「恐らく、シユナアダなら魔王のスピーチは省くね」

『皆様、当祝いの席にお集まり頂きありがとうございます。本来ならここでイルサテカ様に歓迎の御言葉を頂きたいのですが、イルサテカ様はご病気から復帰されました。未だ喉を痛められ、お声が枯れちゃっていますので、御挨拶の方は控えさせて頂きます』

クレサイダの言つ通りだった。

「イルサに余計な事を喋るなってことね

ウエダさんの解釈は正しいのだろう。クレサイダが言い訳を出す。

「スピーチの原稿を覚える時間が無かつたし、姫の不在を知られる訳にはいかない。当然の判断だよ」

俺はその当然の判断、イルサは人形みたいに黙つて座つてれば良いと言つ考えは気に食わない。

「心底気に食わないって顔だね？だから甘ちやんなんだよ、君は」

久々に神経を逆撫でしてくれる発言だな。

「イルサは政治道具だって言つのか？」

「僕は言つた筈だよ。利用出来るものは利用するつてね。それはシユナアダも一緒だ。ここはそういう世界なんだよ」

『それでは、乾杯の前に、皆様先程からお気になられていると思いますので、御紹介させて頂きたいと思います』

俺たちの小声での会話の間に淡々と話を進めるシユナアダ。注目が魔王の玉座と傍らに立つシユナアダから、クレサイダを筆頭とする俺たちへと集まる。

『異世界から、イルサテ力様に仕える為に馳せ参じられた方々です』

「俺達はそういう設定なのね」

ウエダさんが紹介に預かり、恭しく会釈をするルクを真似ながら咳く。俺も不承ながら、クレサイダに視線で促されて頭を下げる。

「私達、魔王の家来になっちゃったね～」

弾む小声で喋りかけてくるが、お前はそれで良いのか？俺はかなり機嫌が悪化しているぞ。クレサイダの言つようつに俺は甘ちゃんだからか？

シユナアダの乾杯の合図で騒がしくなる宴会場。物珍しさで俺達に話掛けようと寄ってくる人々。

ウエダさんは早々に抜け出し、一人、一匹だけ難を逃れた栗鼠の待つ部屋へ帰つて行つた。

俺もとつとと消え去りたかったのだが、こいつが俺には似合わないモーニングの裾を掴んで邪魔をする。

「離せ」

「駄目だよ～、リセ君。こんな可愛いルクちゃんを一人置いてちゃうの～？」

小声でそんな事をほざきやがる。一抹の迷いも無く置いて行くぞ。

「もし、こんな美少女がこんな場所に一人で居たら、物陰に連れ込まれてキヤーな事になっちゃうよ～」

連れ込んだ奴が銃弾や火魔法でキヤーな事になるだろうな。

「…一人じゃ心細いんだよ。お願ひ

そんな弱々しい眼と弱々しい声で頼むな。いつもの黒いローブじゃないヒラヒラ付きの赤いドレス姿も助長し、普段より少し可愛く見えるが、これはルクのいつもの男を操る卑怯な手段だ。分かつていい。だから、引っ掛けた訳では無い。ただ、女性には優しくがネイスト家の家訓なのだから仕方が無い。

折れた俺に、ルクが露骨に勝利の笑みを浮かべる。やっぱこいつは可愛くない。

近寄つて来たヘブヘルのお偉いさん達に如何にも清楚な淑女という振る舞いで対応に切り換えるルクを眺めながら思つてしまつ。

ルクは、正真正銘の淑女の鑑である二ーセさんから、淑女のたしなみを少しほ受け継いでいるようだが、あの邪な精神は一体で誰に学んだんだ。

乾杯ようにグラスに注がれた葡萄酒を煽る。最高級品なのだろう。味は悪くない。しかし、俺としては、父上の好む麦酒か母上の好む米酒の方が良い。はつきりいつて、ルクの接待を眺めながら、酒の品評をするしかやることが無い。

イルサは玉座を立ち、シユナアダやカリサペクを脇に控えさせながら、誰かの話を聞いている。彼処に俺が行くのは憚れるな。

クレサイダは誰も寄せ付けず、壁際に控えてイルサに目を光らせている。クレサイダと一人きりだとしても、俺もあそこの方が居心地が良さそうだ。

「リセス・ネイスト殿」

「何でショウガ?」

逃げようとする俺に、見知らぬ男から待つたが掛かる。機嫌は悪いが、当たり障り無い対応は心掛けておこう。

「貴方はどちらの世界からお越しになられたのですか?」

「クーレですが」

早く解放して欲しい俺の気持ちの所為かも知れないが、この男の声には、何処か俺を見下しているような響きを感じる。

「そうですか。わざわざクーレからね?ところでイルサテカ様は何処でお会いに?」

こいつが俺から聞き出したい事は分かった。やはり、シユナアダの虚言を完全に信じる者ばかりでは無い。さて、どうするか?

「失礼ながら貴方様は?」

情報線は焦つたら敗けだ。まずは相手を焦らす。最小限の情報を与え、最大限の情報を引き出す。クーレ最高の諜報員の息子を舐めるなよ。

「これは失礼。私はラルシ地方を治めるラルシテキと言ひつ者です。それで、イルサテカ様とは何処で?」

一地方の領主か、なかなかの大物らしいな。最も自分の聞きたい事を語尾を強くし、脅しめいて優先させる時点で器は大した物では無いだろう。

「さて、何処だった事やう」

下手に嘘を吐けば、答えを出すも同じ。最も既にこいつはその質問に確信を持つて、俺に更なる確実を求めているのだろうが。今さら、何を言つても状況は変わらない。ならば、わざわざ俺を苛つかせるな。

「つまり、クーレで会つたと答えて宜しいのかな」

勝ち誇つた顔を浮かべる男。勝手に勝ち誇つてゐる。

「例えそつだとして、貴方はどうするのですか？魔王の不在に反乱でも企てるなど？」

ズバッと言つてやると表情を強張らせる男。少し軽率過ぎるの發言だが、してやつたりだな。

「私はシールテカ様に忠誠を誓つた、魔王の忠臣だよ。そんな事を企む訳が無いじゃないか」

冷静を装おうと頑張つてらつしゃるが、指が震えてらつしゃいますよ？

「ならば、イルサには忠誠を誓つていないと言つことか？」

出過ぎた真似だとは分かつてゐる。しかし、イルサはお前らのお飾りでは無いんだ。その点で俺はヘブヘルの奴等に、苛ついているのは確かだ。

「貴様こそ、イルサテカ様を呼び捨て等、無礼な事を！不忠では無いか！」

俺の鬱憤の捌け口になつた男は、怒りを隠す事を止めたようだ。俺はイルサに忠誠を誓つた事など無いからな。どうしようも無いイルサに紳士的に手を差し伸べているだけだ。

「そこまでにしておこうか、御両人。ラルシテキ殿、リセスはイルサテカの従者であると共に大事な客人でも在るんだ。余計なちょっかいは止めて貰おうか」

この男が馬鹿騒ぎをした所為で注目が集まつた俺達の間に、堂々と仲介に入つて来るパシクダ力。感謝するべきなのだろうが、つい睨んでしまつた。

「しかし、こいつは」

「一つ言つておこう。こいつは、俺の獲物だ。俺より先に手を出すなら覚悟しろ」

ラシリルテキを黙らせるパシクダ力。
鳥肌が立つ寒気が俺の全身を覆つ。これが、ヘブルの將軍の凄味か。実力のほどが窺える。

有無を言えなくなつたラシリルテキは、踵を返し、城の外へ。

「リセス、ちょっと付き合え」

機嫌の悪いパシクダ力は俺にも、有無を言わさせてくれない。
黙つてついて行くしかないようだ。

俺が何をしたって言うんだ。イルサの為に言つてやつたんだぞ！それとも、お前にとつてもイルサはお飾り魔王様なのか！

本当にここは最悪な世界だ。

魔王の役目、俺の役目 1（後書き）

予定していたより、大分長くなりそうです。

次の話で終わるのかな。

歩く中、少し俺の餓鬼のような興奮が冷めて、代わりにイルサに間接的に迷惑を掛けてしまった罪悪感が生まれる。俺ごときが他の世界の国政に口を出してはいけなかつた。

無言で俺の先を行くパシクダカ。まるで、死刑執行人に連れて行かれる罪人の気分だ。

連行された場所は他に誰も居ない城の暗い中庭。俺に向き合つパシクダカ。俺の処刑は執行される時が来た。

「坊主、この世界は力が全てだ。テメエの世界じゃどうだか知らねえがな。イルサテカがラシルテキに力で劣る様ならば、ラシルがテ力になるだけの事だ」

パシクダカは静かに怒りを露にする。

「つまり、イルサがあいつに劣ると? そりゃないだろ? イルサの方が王として」

「あめえよ、お前は。イルサテカにシールテカのような王としての器はねえよ。あいつはシユナアダやクレサイダ、カリサのお陰で玉座を護つて貰つて居る奴だ。あいつは、政略も戦略も戦術も自分の世話をやら出来ねえ奴なんだよ」

「こいつもシールテカの娘と言うだけでイルサを利用する奴なのか? くそ、とっとと、イルサをこの糞食らえな世界から連れ出してやる。

「…だがな」

俺から星空に眼を移すパシクダ力。

「あいつは、シールテカの野郎に似てるんだよ。まあ、シールテカに比べれば、全然弱えけどよ。でも、強えんだよなあ。何かが俺は敵はない。イルサを一瞬で殺れる俺がイルサテカから玉座を奪えない。何でだろうな？」

俺に聞かれても困る。俺には分からぬ。イルサの強さなんて。母上が父上の事を語る時に言つていた、弱いからこそ強い人間。イルサがそうなのだろうか。

「だからよ～、まあ、お前はヘブルのルールでも正しい事をやつたと思うぜ。まあ、少し過激だったが。ああ～！もう難しい話は無しだ！馬鹿な俺のする話じやねえ！後の御説教はクレサイダかシユナアダに聞け、以上！」

パシクダ力の御説教には共感が持てた。少しだけ、心が暖まった気がした。イルサを尊敬しては居ないだろうこの軍隊長に。

「リセス、パシクダ力。ここに居たんだ！」

噂をすれば影が差す。現れたイルサ。パーティー会場とうつて変わって、いつものイルサだ。

「おいおい、メインの魔王が抜け出して来て良いのかよ。シユナアダに怒られんぞ」

「病み上がりで体調が悪いって言い訳してきたから良いんだよ」

なかなか、抜け目のない奴だ。しかし、何だろう。イルサと普通にやり取りをするパシクダ力。何だか兄妹みたいに見えて、俺の中で先程までうなぎ登りだったこの人の評価が停滞する。

別にイルサとその家来が仲が良いのは良いことだ。少しだけ、イルサと仲良いパシクダ力が微笑ましく羨ましく思ってしまうのは、俺が甘い餓鬼だからだろう。

「俺はもう行くぜ。イルサテカの相手は任せた。ああ、後、明日練兵場に来い。クーレ剣士の実力を知りたいぜ。ああ、クソ、ナールスにリベンジしたいぜ」

俺にクーレ史上最強の剣士リンセン・ナールスの代わりが務まるとは思えない。彼を満足させられるのは、クーレ最強を競うアレンさん、カーヘルさんぐらいだ。でも、去り行くその人の背中には、自然と頭が下がる俺がいる。

「じゃあ、リセス、相手お願いね」

イルサが俺に満面の笑みを浮かべて来る。まあ、うん、あれだ。良く知らない奴の相手するよりはマシか。

魔王の役目、俺の役目 2（後書き）

まだまだ続いちやいます。この話。でも、一端切るのが天見酒の低クオリティ。

今日中に投稿しますので、もづちよい、お待ち下さい。

魔王の役目、俺の役目、そして従者の役目

イルサが指で差す方。円形の花壇を四方に囲むベンチ。

「座りうよ」

友人同士として普通の事だ。夜のベンチに唯の友人の男女二人並んで座った所で何が在るわけでは無い。全く問題は無い。俺がこういう状況に馴れていないだけで。

俺の右隣に腰掛けるイルサ。少し距離が近くないか。少し離れるべきではないか。

「久々の晩餐会で疲れちゃたよ。リセス、ごめんね。その、楽しめなかつたよね……」

卑怯だな。そんな顔で懺悔されたら、神だつて叱責出来ない。それにこいつの所為では無い。クレサイダやシュナアダに怒りを感じる。

「お前じゃ、楽しめたか？」

「ウーン、あんまり楽しく無かつたかな」

寂しそうに俯くイルサ。やっぱり、こいつに魔王は似合わないんだ。

「なあ、イルサ。クーレに住まないか?」

俺が側に居てやるよ、あんな奴等の代わりに。こんな利用されるだけの世界なんて嫌だろ?」

「何で？」

イルサの為に勇気を出して言つた台詞は、理解されなかつたようだ。こいつは、分かつていない。どれだけ自分が最低な世界に居るのか！だから、声を荒げてしまつた。

「お前は、利用されてるだけだぞ！魔王とか何とかで抱き上げられて！クレサイダやシユナアダに」

「そうかも知れない」

俺に言われる前に、薄々氣付いていたよつだ。俺を寂しげな瞳で見詰めるイルサ。しかし、イルサの眼は俺の遙か上を見る眼に変わる。

「でもね。クレサイダやシユナアダは、私の為に必死に頑張つて、私みたいな情けない魔王に必死に利用されてくれてるんだよ。私なんかの為に。だからね、クレサイダやシユナアダや皆の為に私は頑張らなきやつて思うんだよ。少しでも、皆の役に立ちたいんだよ」

幼稚な言葉を並べるイルサ。しかし、俺はイルサよりもお子様な考えしか持つていない。

「だからね、私はリセスやルクちゃんの為にも頑張るからね……ファ」

嬉しい限りだ。しかし、そこで可愛らしい欠伸が入つてしまつ所がこの魔王様なのだろう。

「眠いのか？」

「お酒飲んじやつたから…、眠い…」

酒が入ると寝てしまつタイプらしい。普段、酒だけは口にしない奴だからな。少なくとも、酔うと暴走し出す奴よりはマシだ。

「部屋に戻つて寝る」

「やだ、リセスともつと話す…」

その気持ちは大変嬉しいが。おい、寝るな。人の肩を枕にして！俺が動けなくなつてしまつたじやないか！

くそ、このイルサの寝息を立て始めた顔が、肩の上に乗つた状態の俺をクレサイダが見たら。

「こんな所で何やつてるんだい。リセス？」

タイミングが良いな、クレサイダ。自分の登場場面をしつかり分かつてるじやないか、ハハハ…。

じつくり、じわじわと迫つてくる死の恐怖の象徴。

「姫を起こすなよ

奇跡が起こる。クレサイダは空いている俺の左隣に腰掛けるだけ。お前、クレサイダだよな。また、観測者に乗つ取られてる訛じやないよな。

「煙草」

クレサイダから不機嫌そうに吐き捨てられる一言。一瞬戸惑うが、イルサを起こさないよう、細心の注意を払いながら、在庫が僅かになってきた貴重な煙草を差し出す俺。媚びを売るようで情けない。

「やっぱり、君はシユナアダのやり方が気に入らないかい？」

イルサの話を聞いてなお、俺はやはりイルサを弄ぶ行為は許せない。声に出す自信は無い。だから、首を縦に振る。

「やっぱり、君は甘いよ

自分でもそれを理解し初めている。でも、このイルサが可哀想で。

「君は、ライシス・ネイストが強いと思つかい？」

突然の質問。

「ああ」

肩に大切な荷物が乗つかつて居なかつたら、立ち上がつて力を込めて言つてやる所だ。

「確かにあいつは強いよ。僕は本当にムカつくけどあいつに勝て無かつたからしね」

当然だ。父上に敵う者など、どの世界にも存在しない。

「でも、あいつがアレンやラベルグのように剣を振れるかい？」「セのように、上級魔法が使えるかい？あいつにシユナアダのよつけ政略が行えるかい？」

「惑うしかない。父上は、ラベルグ氏は分からぬが、アレンさんは剣で敵わないだろうし、父上と並んで、最強の魔法使い——セさんには魔法で敵うのかは分かつたものでは無い。政治などに関わることを避けて来た父上の政略の実力を知る術は無い。

「シユナアダはパシクダ力のよつに剣は振れない。魔法はそこそこだけど、僕よりも劣る。姫のように王の器も無い。でもね、執政をやらせたら、ライシスにも負けないね。最強だよ、絶対にね」

身内自慢だ。とは言えない。

「シユナアダは、あいつの力を最大限に引き出せるよつに姫を利用していい。君の持つてる下らない正義には反するかもしれないけどね。君にあいつの力を否定する事は出来るのかい？」

煙を吐きながら語りクレサイダ。俺は甘ちやんだ。父上に憧れるだけの。イルサの為、頑張つたつもりだった。でも、シユナアダもイルサの為に自分の役目を貫き通している。俺が甘ちやんなだけなんだ。

「言い返す言葉も無いって？君は甘ちやんだねえ

クレサイダの嫌な笑みも今なら素直に受け入れられる。どうせ俺は、父上ばかりに憧れていただけの餓鬼だよ！

「でもね、それが君の強さだと…思ひ…よ。姫を少し甘やかせてあげられるし、君は甘ちやんで良いんじゃないかな」

少し救われた気がして見ると、煙草に夢中なフリをしているクレサ
イダ。月や星の明かりしかない暗い庭園内でも分かるほど耳が赤い。
この恥ずかしがり屋め。「クーレでも有名なヘブル最強の大魔導
士殿も、人を励ますのは苦手なようだな」

少しからかいたくなつた。

「クツ、別に君を励ました訳じゃないさ。馬鹿な事言つてると焼き
殺すよ」

焼き殺すか。今は、その言葉が少し嬉しくなつてしまつ。俺の頭は
そこまで変になつたらしい。

「つセ君何やつてるの〜！」

五月蠅い奴が来た。クレサイダと話しているだけだ。

「イルちゃんをこんな暗がりに連れ込んで〜！」

俺の肩にある重みを忘れていた。大声を出すな。もう、遅いか。イ
ルサが眼を擦り始めた。

「ホウホウ、なかなかやるね〜！リセス坊、イルサ嬢と雰囲気ばつ
ちりじやないか。クレサイダ君、邪魔したら駄目だよ」

「いや、少し暇だから、散歩しようと思つたんだけどな。お邪魔し
たか？」

大幅の誤解を伴つて、俺を裏切つて逃げた一人と一匹も集まつて來
た。

「ウギアー！姫～！そいつがリセスとか言うクソ野郎ですね！姫からとつと離れやがれクソ野郎！」

食事を乗せたお盆を持ちながら、全速力で駆けて来るカリサペクだつたか？俺は何故、罵倒されている。イルサが勝手に俺に寄り添つて、寝たのだ。そしてイルサ、寝惚け眼に俺に引っ付くのを止める。

「カリサ、五月蠅えぞ。別に良いじゃねえか。てめえらもイルサテ力も、ろくな飯食つてねえだろうと思つて、厨房からパクつて来たぜ。まあ、最高級の酒じやないが、これ無かつたが、この酒はなかなか行けるぜ」

琥珀色の液体の瓶とグラスを乗せた盆を持つたパシクダ力。気が利いてる。葡萄酒ではなく、麦酒を持って来てくれるとは。この人は確かに軍隊長としての素質がある。ジンさんにも劣らないだろ？。

「イルサテ力様、こんな所に居たのですか！主役がこんな所で！」

シユナアダ。俺の少し楽しい気分に水を差すように現れた。

「ごめんなさい」

カリサペクの持つて来た料理の匂いに完全に覚醒したイルサ。さつきまで、極楽気分な表情から一変して、しょんぼりと頭を下げる。クレサイダの言つた事は正しいだろ？。シユナアダは執政者として正しく王をたしなめている。でも、イルサのその顔を見て、俺は密かにシユナアダに敵意の籠る視線を送つてしまつ。

「…今日は許しましょう。一応、病み上がりと言つことで言い訳が立ちますからね。後は皆様と好きにしてください。しかし、あまり

騒がないで下さいね」

怒っているのか、笑っているのか分からぬ表情でそれだけ言つと去つて行くシユナアダ。

「ああいう奴なんだよ。シユナアダは」「ああいう奴なんだな、クレサイダが俺だけに聞こえるように言つ。ああいう奴なんだな、シユナアダは。

「クソ野郎、そこをお退き下されませ。姫のお隣は、姫の幼少の頃からの世話役であるこのカリサペクと決まっています」

「えー、リセスともつとお話したいよ」

「カリサペク、姫にベタベタするなって言つてるだろー殺すよー」

「じゃあ、可哀想なリセ君と、このルクちゃんがあつちのベンチに座つてあげよつかなー?うん、仕方ないからね」

「いやいや、青春だねえー?」

「おー、アースの兄ちゃん、良い飲みぶり。イケる口だねえー」

「そういうあなたもイケる口だろ?ほれ、『返杯』

わざやかで、騒がしい俺たちのパーティーが幕を開けてしまった。

先程までと正反対に翻して、少しの世界の人々が好きになつてしまつた。

めった俺は、はじめてこんなのがいいか?

魔王の役目、俺の役目、そして従者の役目（後書き）

長いーと思つのは、天見酒が天ちゃんせいかも知れません。

他の作者さん達と違つて、普段は一話を一千字程度で済ませる堕落
つぱりですからね。

どうぞ、少しばかり文を書けるように成長したと、生暖かい田で見
守つてやってください。

世界を観た男

ヘブヘルへは、休暇として立ち寄った筈だった。だからと言って、俺はダラダラと過ごす気は無かった。

しかしだ、俺はアースで負傷し、イルサの治癒魔法では、どうにもならない血液不足な身体を労るつもりであった。身体を鈍らせ無い程度の軽い運動のつもりだった。

「もつへばつてゐのかよ。情けない」

地面上に手を突き、空気をしきりに吸う俺のそんな事情を考慮しようとしない鬼教官。最も俺の身体が万全を期していても、こいつには敵わないということは手合わせをして、はつきりと分かった。くそ、パシクダカにせめて一太刀を浴びせたい。このまま、終わらせたくない。悲鳴を上げる身体を持ち上げる。

「ヘブヘルじやあ中々居ねえ、良い根性だぜ」

俺と違い大して疲れないパシクダカ。その余裕な笑みに父上譲りのクーレの根性を叩き付けてやる。

「君は何やってんのさ? 少しほ身体を休めるって事を考えられないのかい?」

せっかく復活した俺の闘志に水を差すクレサイダ。

「つむせえー男の真剣勝負に口を出すんじゃねえー」

全くだー！さあ、次こそはパシクダカから一本取る。

「君達のチャンバラども良いけど、リセスに用があるんだよ。後にしてくれない？僕も結構、真剣な話なんだけど」クレサイダにしては、陳情な態度だ。世間話では無いだろう。

いつの間にか俺の先生になっていたパシクダカに一礼をしてクレサイダとその場を去る事にする。

「それで、話とは何なんだ？」

城の一室。おそらく軍議を行う部屋に集まつた俺たち。

全員がこれからクレサイダが語ろうとするに集中しようとしている。机に突っ伏しているイルサ以外。朝食後シユナアダに執務室に引っ張られて行つて、まあ、色々と大変だったのだろう。

「それで、話とは何なんだ？」

イルサを何とか起こす事に成功したクレサイダに俺が代表して開口する。

「いい加減に君達も知つておるべきだと思つてね。世界の欠片について詳しく！」

イルサの隣に座るクレサイダ。辺りに満ちる重々しい空気。そして、一つの欠伸。魔王様、頼むから空気を読む事を覚えてくれ。

「まあ、僕が話しても良いんだけどね。ここには、もっと詳しく知

つてゐる奴が居るからね。そいつに喋つて貰つてじょつと細づく

クレサイダ以外の視線がイルサの後ろに立つてゐる男に向かつ。

「私はクレサイダよりは世界の欠片については知りませんよ」

シユナアダの否定に一同クレサイダへ目を戻す。一番博識に見えるシユナアダが違うなら、言つまでもなく俺たちの中にクレサイダ以上の知識を持つた人間は居ないぞ。俺たちの顔の動きを見て、した
り顔で自分の胸に指を向けるクレサイダ。

「ILに居るじゃないか」

いや、クレサイダが詳しくを知つてゐるのは知つてゐる。お前より、詳しく述べる奴が居ると言つから…。

「伯父さん？」

イルサの発言でクレサイダが自分を指した意味が分かつた。どうも俺にとってはその身体はクレサイダの物であるという意識が根付いてしまつてゐるらしい。

「えへ、でも、大丈夫なの？ イルちゃんの伯父さんに意識を与えるんでしょう？ また暴れちゃたりしない？」

「大丈夫さ。今回は僕も魔力が残つてるし、全てを明け渡す訳じゃない。こういう事も出来るしね」

クレサイダの背中から出る黒い霧状の物体。刃のように鋭い形に姿を変えて、自分の喉の前で止まる。

「クレサイダ、伯父さんに」そんな事しちゃ駄目だよー。」

「姫、これは仕方ない処置なのです。」いつが暴れないとも分から
ないですから」

イルサも見たはずだろ。観測者の実力を。しかも、奴は必ずしもこ
ちらの味方では無い。

「伯父さんはいい人だよ。話せば分かるもん」

まあ、イルサにはな。いや、クレサイダの処置は正しい。あの観測
者は姫のイルサにとつて危険思想者だ。

「まあ、あの観測者とか言う奴には、イルサが一番の抑止力になる
じゃねえか？何か合つたら、またイルサが泣き付いて懇願すれば良
いじやんか」

ウエダさんの言ひことが正しくもあるのだが。それは駄目だ。何か
駄目だ。そつだろ、クレサイダ。

「心配しなくても、姫にそんな事は僕が絶対させないよ」

ウエダさんに睨みを効かせるクレサイダ。全くその通りだ。及ばず
ながら協力するぞ。

「じゃあ、そろそろ出てきて貰つか」

クレサイダの首が力を失い落ちる。そして、直ぐに上がる。

「ふむ、クレサイダ、どうこう風の吹き回しだ

声質は変わらないが口調は変わった。観測者が現れたのだ。

「ちょっと前に世界の欠片についてご講義願おうと思つてね」

観測者の身体の何処からか聞こえるクレサイダの声。少しその声に安堵した。シャフトとは中々便利な生き物だな。

「世界の欠片だと? 何故、そんな事が知りたい。お前達の知つて良い事では無い」

クレサイダと同じことを言つ。確かに世界の欠片の存在など知らなければ、俺がこんな事態に巻き込まれる事はなかつた。

「ところがね、観測者君。マスナーがカイムを使って集めているのだよ。世界の欠片をね」

セルツが突然発言をする。それは明らかにマスナーについて何かを知つている事を示している。この栗鼠にはまだ俺たちに隠し事があるらしい。

そして、その内容に観測者は眉をしかめる。

「成る程な。あの介入者はまた良からぬ事を始めたか」

「その良からぬ事を止めたいんだよ、僕らは」

自らの身体から聞こえる声に、しばらく無言で俺たちの顔を見ながら考え込む観測者。

「伯父さん、お願ひ。私たちに教えて下さい」

「クッ、分かつたからそんな捨て犬のような眼で私を見るな。シルビーに似て可愛いと思つてしまつだらう」

「あんた、重度のシスコンだな。イルサ、こいつには気を付けるよ

ウエダさんの言つシスコンの意味は分からぬが、イルサが気を付ければいけないのは確かだ。イルサ、あまり近寄るなよ。

「まあ、まずはだな。私はクレサイダとシールテカにより、長期間眠られ、近況に疎い。情報を整理したい。まずはそちらから今何が起きてこるか話して貰おうか。私が話すかはその後に決める」

中々用心深い。こちらが情報を提供しても情報を出して貰るとは限らないと言つことか。ここでの判断はクレサイダに委ねるとしよう。

「じゃあ、私たちが話したら、話してくれるんだね。ありがと。伯父さん」

イルサ、お気楽に微笑みかけるな。此方は試されてる訳であつてな

…。

「ウツ、まあな。観測者として話してはならない事だが、姪に頼まれたのだ。少しば無理をしよつ」

姪の笑顔は観測者の職務より強いらしい。
つて、おい、今、イルサの頭を撫でやがつた！

「貴様、姫に気安く触れるなんて、その腕切り落とすよ…」
よし、問答無用でやつてしまえ。

「なつ、少し触れただけであらう。第一、実の姫に適度なスキンシップをして何が悪い！」

絶対的に悪い。くそ、イルサも嬉しそうに眼を細めてるんじやない。

「とにかく駄目なんだよー今度やつたら、只で済むと思つなんよ」

そうだ。とにかく駄目なんだ。

「何かよ、同じ身体で喧嘩するつて面白い光景だよな

ウエダさんが暢気な事を言い出し、場が静まる。

「取り敢えず、クレサイダ君。観測者君に現状を話さないかね」

セルツの大人な発言で場が収まる。

「その前に、一つ言つて起きたい」

落ち着きを取り戻した観測者。

「観測者は私だけを指す名前では無い。私の名前はクラフだ。まあ、好きに呼んで構わんが」

此方も自己紹介をした方が良いだろ?な。それにしても案外、イルサの言った通りに言葉が通じる奴だった。

「アツ、私はイルサテカです。よろしくね、クラフ伯父ちゃん」

太陽のように眩しい笑顔付きで即座に返すイルサ。その返答に僅かに頬が緩むクラフ。

「…クラフ伯父ちゃん。あつ、いや、イルサに呼ばれて氣に入った訳では無くてな。まあ、好きに呼べ」

俺の中で狼狽して訂正する男の評価は急流下りだ。いい加減に真面目に話し合わないか？後、クラフ伯父ちゃん。イルサの頭をまた撫でようとするな！

世界を観た男（後書き）

次回こそは、シリアスに世界の欠片について迫っていきます。

何かこの話はキャラ崩壊しまくりのような。きっと氣のせいですよ
ね。

「成る程な、マスナーめ。好き勝手にやつてくれているものだ」

一つの身体で話し合つて一人の会話は終盤を迎えて、一人不機嫌そうに呟くクラフ。

「一人漫才を見てるよつた気分だぜ」

ウエダさん、その一人漫才とは何ですか？

「さて、この状況、お前達を信用して話すべきかどうか迷う所だな」

「話しが違うんじゃないかな」

「クレサイダ。お前もある程度は世界の欠片について知ってるのだろう。これが本当はどういうものなののかを。だから、お前はこいつらに黙っていた。違うのか？」

さすがに易々と話してはくれないか。中々口が固い奴だな。職務に対して堅実なのだろう。クレサイダが話さなかつた眞実とは何なんだ。マスナーは何をやろうとしている。

「クラフ伯父ちゃん…」

「クッ、分かつたある程度は話してやう。そんなつぶらな瞳で私を見るな」

前言撤回だ。愛すべき姪に対しては、腐った木の皮よりも口が軟ら

かいようだ。愛妻愛娘家のジンさんと良い溺愛勝負できそうだ。

「何処から話すべきか。まずは、世界の欠片が出来た理由。いや、この6つの世界が出来た理由を話すとするか」

イルサの切ない瞳に崩された顔の綺まりが戻ったクラフ。やつと、本題に入れるようだ。

「最初はこの世界は一つだつた…」

衝撃のカミングアウトから始まるクラフの話。

これは、千才になる私が生まれる遙か昔の話だ。

大まかに6つの種族の住む一つの世界。科学を力とする種族。魔法を力とする種族。自然と共存し、自然の力を借りる種族。肉体を無くし、精神だけで生きる種族。全ての力を僅かに力とする種族。そして、全ての力を最大限に持つ種族。

この6つの種族間での争いの続く世界だつたらしい。

その世界を変えたのが、オシリス。彼は全ての力に優れた種族の中でも全ての能力に優れている人物だ。

彼はまず、世界の球を創った。それは手のひらに収まる球。しかし、それはその世界そのものだつた。世界の形を変える代物だつた。

次に創つたのは、世界の原理を封ぜし杖。オシリスの杖。そして、全てを切り裂く剣、ペグレシャン。

オシリスはペグレシャンにより、世界の球を六つに分けて、オシリスの杖で六つの世界を創つた。そして、六つの種族は六つの世界へ

と別れた。争いを起こさないようになつた。そして、いつかの日か、また世界を一つになる日を田指して。

「ハイハイ！クラフおじ様に質問で～す」

ルクはいつもながら、度胸があるな。話をぶち壊して、クラフさんにおじ様をつける度胸はお前かい爾サぐらいだぞ。

「つまり、その世界の球を割つた後が、世界の欠片で、オシリスの杖がドウーチの杖なんでしょう。何でそんな重要な物が各々の世界にあるの～？後、セレミスキーがクーレに来た理由やペグレシャンがヘブルの魔王様に渡つた理由も知りたいな～？」

俺の持つセレミスキー。アールからセイン・セレミスが召喚したものだと聞いているが、セレミスキーが今回の件と関係有るのか。

「セレミスキー？オシリスの鍵の事だな。それに関してはこれから話そう。それにしても、これだけの話でそこまで読めるとほ、中々賢い淑女だな」

クラフに褒められて、それほどでも無いですよ」と、笑つて誤魔化すルク。こいつは、普段何も考えていないうつに振る舞つているが、実は考えが深い。普段の振る舞いから誤解され易い奴だがな。少しだけそんな根は真面目なルクを見つめてしまふ俺が居た。

「リセ君。そんな私の事を尊敬し直した眼で見ないでよ～。私はいつも尊敬出来るレディだよ～」

「どこがだ？」

「あ～、二人ともそういうあれは後でやるうか。クラフさん、この二人のやり取りは無視して続けてくれや」

ウエダさん、今、ルクを見直さなければ、いつこいつを見直せて言うのだ。

クラフさんが話し出すのを止める気は無いがな。

まずは観測者の説明だ。私達の役目だ。端的に言えば、他世界を争いの無い世界に最低限の介入で導く事。直接的には手を下さない。その世界の統率するに値する人間に知識や力、世界の欠片を与える事。それを行うのが観測者の役割。アールから各々の世界に一人だけ送られる存在。私はヘブヘルの現観測者…だった。

しかし、二千年前のことだ。アールに介入者達が現れた。現世界を否定し、現世界を原初世界に今すぐ戻そうと、各々の世界に裏で糸を引き、動かす奴らがな。その代表がセルジオ、そいつに従う一人がマスナーだ。

まず奴らは各々の観測者に配られる異界への道を開き易くするオシリスの鍵と杖、ペグレシャンを奪つた。それは用いて、観測対象者に世界の欠片を集める為にそれを配つたのだ、各々の世界の力ある者に。

しかし、誤算だった。ペグレシャンと世界の欠片を得たヘブヘルのシールテカは、他世界に興味を持たず、ヘブヘルの統一に尽力を注ぎ、クーレのセイン・セレミスは有能であつたが、有能故に、そのオシリスの鍵を困窮する人の為にだけ使つた。介入者は使い方を間違つた。セレミスに世界を統一しようと催促する介入者の代表格セル

ジオに対して、セレミスはオシリスを召喚すると言つ最善の判断を取り、セルジオはオシリスの創りし異世界の牢獄へと封じられた。

それで、終わった筈だった。クーレの観測者だったマスナーが裏工作を始めなければな。

六百年前のクーレの動乱。クレサイダやそのシユナアダは良く覚えているだろう。あれはマスナーがクーレ人を唆し、魔王を喚ばせ、その魔王に欠片を集めさよとした事に起因する。結果はクーレ人の知る通り、その愚かなるクーレ人、リンセン・ナールスによつて失敗に終わつたがな。

「そして、最後に二十年前のクレサイダが勝手に起こしたクーレでの争乱。まあ、上手く利用しようとしたらしいが、ヘブヘルの観測者だつた私の妹が仕事を放棄して、魔王シールテカが、あのクソ野郎が！まあ、手を出してだなあ、うむ。その色々と合つて失敗したのだ」

最後の話でかなり重い話しが軽く感じてしまつ。

「えつと、お父様とお母様がどうしたの？」

「ソッ、それは、まあ、観測者として話す訳には如何のだ」

イルサ、クラフさんも伯父として大変なんだ。そこは突っ込んだ話を聞かないでやつてくれ。

「取り敢えず、マスナーの意図は分かつただろつ。世界を統一する事だ。カイムだつたか？あいつらがマスナーに操られる理由は分からん。まあ、シールテカの血を引いて、全世界の王になろうとして

いる辺りだらうが

「お父様もお兄ちゃんもそんな事しないよー。」

クラフさんの言葉を隣である程度清聴していたイルサが急に机を叩く。

「イルサテカ様。現にカイムはシールテカ様やシルビー・テラ様を殺害しました。もう貴女の兄では無いのです。そこをわきまえて下さい」

「イルサアダが魔王を諫める。それで顔を雨模様に曇らせて席に着くイルサ。シユナアダの言つている事は最もだと感じられる余裕が俺には生まれてはいる。しかし、それは魔王に対してだ。イルサの兄に対しても想いへの配慮は無い。こんな時に俺はイルサに何て声を掛けやれば良いのか。

「イルサ。まあ、今までのクラフさんの話が、召喚とか、異界の争乱とか半分も分からねえ俺が言つのもなんだけどよ

微妙な沈黙状態を破つて話し出すウエダさん。

「俺みたいに色んなバイトをやってりやあ、嫌でも知るんだけど、人には、立場つてものがあるわけよ」

俺もヘブヘルに来て学んだ。と、思っていた事。

「クラフさんにやあ、観測者として観測者の立場が在るし、シユナアダさんにやあ、魔王様の補佐官としての立場が在る。だから、お前の兄ちゃんにその立場から見ちまって、判断しちまつんだよ。そ

れが立場つてもんだよ。だから、この人の言つ事は間違っちゃいな
い」

ウエダさんの大人な意見に素直に納得出来ないのは、俺が子供で甘
ちゃんだからか？その立場上、正しいから従えと言つのか。

「でもな、お前にはお前の立場があるんだぜ。カイムの妹つて立場
がな。だから、無理にお前だけが意見を押し込める必要はねえよ。
俺はこの人の立場も尊重するし、お前の立場も尊重する。ただ、そ
れはこいつらの立場を汚して良いもの訳では無いぞ」

ウエダさんが、あれだ。あれなんだ。凄く大人らしく見えてしまつ。
そして、俺がとても子供みたいだ。

「いやあ、ウエダ君。成長したねえ。おじさん、育ての親として嬉
し涙が出て来てしまつよ」

「茶化すな。第一、お前に育てられた覚えはねえ」

世界の欠片についてよりも俺の立場でイルサの為に何が出来るのか。
そんな事を考えてしまう俺が居る。

1／6の世界（後書き）

少し説明文が長くなっちゃいました。

まあ、真相はこんな感じです。深く無い真相でしたが。

次話こそはリセスに語り部を外れて貰いましょう。

若いって良いね

夕食を堪能して、俺は部屋で食後の一服を楽しむ。先程から俺の同室者は、落ち着きなく、刀を弄つたり、道具の整理を行つてゐる。俺みたいにドカッと構えてりやあ良いのに。色々と頭の中を整理したい気分なのは分かるが、焦り過ぎんなよ。

「少し振ります」

刀を握んで、部屋を出て行つてしまつ。少しは腰を落ち着けて、身体を休めるといつ考えには至らない年頃らしい。いや、あいつが苦手なだけか。

「若いって良いね」

ビーナの栗鼠の口癖が移つたのか、そんな爺臭い事を呟いてしまつ。

「君も十分若いがね」

「まあ、そつなんだナゾ。あそこまで、純粹に行動は出来ねえ」

俺の身体は既にピークを越えて、老いる一方だしな。昨日のパシクダ力と飲んだ一瓶ほどで酒が頭痛に代わるものも年を喰つた証拠だ。

「ウエダ君、心掛け次第で人は若くなれるものだよ。おじさんだから、まだまだ若いんだから」

八百歳以上の栗鼠は、まだまだ若いのか。まあ、心が燃えていても身体が着いていかない年なのよ、俺は。

リセスは良い。若いし、実力がある。だから、考えに答えを求めず、身体で答えを求められる。

嫌だね。二十代でこんな事を考へるなんてねえ。どうやら、俺はセルツの言つ様に、身体よりも頭の中の方が年寄りだな。

「それじゃあ、人生経験豊富なセルツおじさんに若作りの仕方をお聞きしようか?」

まだ寝るには早いからな。リセスの様に身体を動かす気にならない俺は頭を動かして置くとしますか。

「フム、そうだねえ。まずは楽しむ事じやないかな?」

「ホウホウ」

分かりやすい心構えを簡単に言いますね。

「例えばだよ。君の今吸つている煙草はどんな状態だい?」

「この銘柄が一番上手いと感じる。つてことド良いのか」

そう言えば、アースに帰れない俺はこの銘柄を手に入れる機会はもう無いんだよな。リセスも吸つているから煙草事態はあるらしげが、愛着あるこの銘柄が無いと少し寂しくなつてくれるな。

「ちよつと、違うんだよ。おじさんが言つたかったのは、煙草の長さだよ」

煙草の長さ? もう半分ほど燃え尽きてるが?

「まあ、それ那儿の一本とも別れだな」

「でも、まだ吸えるよね？そこで何を思つたで君が楽しく過へせる
かどうかが決まるのだよ」

まあ、確かにまだ吸えるが、俺は煙草を楽しんでるぜ？

「その半分になつた煙草。もつ、半分しか残つていないと思つか、
まだ半分も楽しめると思つか。どちらが楽しめると思つかい？」

子供の為の単純な真理だな。しかし、いつこいつ事をスラスラと口から出るところがセルツの認めらる点なのだろう。

「ウエダ君、何においても同じなのだよ。楽しむ心構えが出来ていれば、残り物ですら楽しめる。楽しむ心構えが無ければ、どんな素晴らしい物ですら楽しめないのさ」

帽子を布で拭きながら楽しそうにセルツ。俺がこの栗鼠に脱帽したいぜ。

まあ、俺は教えに従い、今はこの残つた煙草を楽しむ事にしよう。今を楽しむこの栗鼠に負けない様に楽しめないとな。

半分になつた煙草か、後どれだけ楽しめるものか。俺の後五十年そこらの人生も。

若いって良いね（後書き）

人生は楽しく生きましょう。

おっさん達のほのぼのとした会話でした。

俺のするべき事

世界の事、観測者の事、介入者の事、カイムの事、イルサの事。そして、俺自身の事。

何から考えれば良いものか。俺はまず、そこから考えなければいけない。

ウエダさんは立場によって見方が異なると言った。それを考えれば、クラフ達観測者の見方は、世界を平和へ導こうとする正しくある。しかし、マスナー達介入者は元ある世界に戻そうとしている。これにどういう意味があるのかはクラフは語ってくれなかつた。介入者の立場から見てみないとその理念は分からぬのだろう。

同じくカイムが何を目指しているのかは分からない。イルサにしてみれば、不良兄貴の乱行を止めたいところだろうが、シユナアダやクレサイダからしてみれば、只の国家犯罪者でしかない。

この一連の騒動を俺の立場からは、どういう見方が出来るのか？そもそも、俺の立場ってなんだ？シーベル工騎士団員、賢者ライシス・ネイストの息子。ジンさんや父上の存在しない世界では全く無意味な立場だ。

つまり、今の俺には立場が無い。そう考えると俺は何故にここに居るのかが分からなくなつてしまつた。

振り上げたカタナが空を斬る。空に見えない直線を描くつもりが、実際に空に消えた線は明らかにぶれて曲がつてしまつた。

「大分心が乱れてますなあ。女の子の事でも考えてるのかなあ。
いけませんなあ」

間延びした声。月明かりで暗闇の背景から浮き出していく見辛い黒いロープ。代わりにはつきり見えるのは、意地の悪い笑顔の貼り付いた白い顔。

「こいつから、見てたんだ？」

「こちらは寝小便を見られたような気まずさだ。

「つこちつきからだよ～。リセ君が部屋を一人で抜け出したから、イルちゃんを夜這いしないように見張らないとね～」
カタナを収めた俺に歩み寄りながら、生き生きとした笑顔で生き生きと抜かスルク。

「俺がするとそんな事を思うか？」

「思つてないよ～。だって、リセ君は据え膳があつても手を出せないへタレだもん」

更に苦湯を飲まされた。俺はへタレではなく、お前と違つて節度を弁えているんだ。未婚の女性と過度な接觸は避けるべきだ。それが節度で有つてだな。まあ、こいつと言い合つても、理解されないだろうし、言ふに負かされるのが闇の山だ。

「それで、リセ君は何を悩んでるのかな～。ルクお姉さんが相談に乗つてあげるよ～？恋の悩みなら任せなさい

「別に大したことじやない」

ルクはたまに、お姉さんぶるが、たつた三月俺より早く産まれただ

けだらうが。そして、ルクにだけは恋の悩みとやらは、絶対に相談したくない。何処に漏れるか分かつたものじゃないからな。

「嘘が下手だな〜りセ君は。どうせ今日の話を聞いて、俺の立場ってなんだとか、俺はこれからどうすれば良いんだとか、生真面目な堅物が考えそうな事で悩んでたんでしょう。ルクお姉ちゃんにはお見通しなのだ〜」

確かに見透されていた。ロープに土が付くのも構わず、地面に座るルク。俺も隣に座れと手で土を叩ぐ。

「そんなに俺は分かりやすいか？」

「私には〜りセ君の心が手に取るように分かるんですよ。付き合い長いしね〜。ほら、その、結構、リセ君の事見てるんだよ〜、私は」
そうだな。昔からの家族ぐるみの付き合いで。この世界では、一番俺を見てきた人間だらつ。しかし、

「俺もルクを同じ時間だけお前を見ているが、お前の心は一向に見透かせそうに無いぞ?」

「なあ〜〜乙女の心の中は覗かなくて良いの〜特にリセ君は〜。この話は無し。本題に行こ〜！」

そんなんに焦らんでも、俺には覗けやしないぞ。

「え〜と、あれだね。リセ君の立場だね〜?はつきり言つて無いね、リセ君の立場。ここに居なきゃいけない理由も」

すつぱりと言ひてくれる。俺を落ち込ませたいのか？

「でも、私だつて無いんだよ」

「だから俺もルクのよう元氣むなと言こしたいのか？」

「違うよ。立場なんか必要なら、自分で作つちゃえれば良いって言いたいの」

立場を作る？自分自身の立場を作つても虚しく無いか？

「あのね、リセ君はさあ、イルちゃんの事、どう思つてるの？可憐いなあとか、その、恋人にしたいなあとか

「お、おい。話が飛びすぎだぞ！」

何で急にイルサが出てくる。イルサを恋人にしたいかだと？有り得ないな。

「良いから答えなさい！」

ルクの眼がかつて無いほど真剣味を帶びている。気迫に圧されそうだ。何故、話さなければならぬ俺より前に、ルクの方が顔を赤らめているんだ。

「まあ、あれだな。うん。イルサは恋人とかじやなくて、妹みたいを感じだな。見ててそのどうしようも無くほつとけ無い奴だ」

そう、あいつを一人にはさせたくない。面倒を見てやりたい。そんな奴なんだ。

「じゃあ、あれだよ。リセ君は、カイムの代わりにイルちゃんのお兄さん役割をしてあげれば良いんだよ。だから、イルちゃんを全力で守る。それがリセ君の立場になるでしょう？」

「ああ」

俺が兄代わりに妹を守る。そうか、そんなものなのだな、俺の立場なんか。そんな即席な立場に全力を尽くせる。俺のやるべき事が出来た。

「どうかな～？ ルクお姉ちゃんと相談して良かつたでしょ～？」

「ああ、ありがと～。ルクお姉ちゃん」

今回は素直に感謝して、お姉さんぶらせてやろう。

そのお姉さんは俺の感謝の言葉に照れて俯く。弟に照れるぐらうなり、お姉さんぶるには甘いな。

「えっとね、私の今の立場はね、リセ君のお姉さん代わりだからね、リセ君は強制的に私の弟と言つ立場でも在るわけなのですよ～」

俯いたまま、喋るルク。茶色い髪の合間から見える朱い耳。横顔がこちらを少し向き、茶色の瞳が下から遠慮がちに俺の顔を捉える。おねだりをするときのルクの可愛い視線。俺はこの卑怯な視線には甘い。

「だからね、弟のリセ君には私を守る義務があるんだよ～。うん、だから、私も守つてね～」

「ああ、任せる」

俺は平静心だ。今のルクの普段見せない姿に惑わされてなどいない。
そう、立場上守つてやるのだ。

「じゃ、じゃあ、私はもう寝るね～。お休み～

真っ赤に顔を見せなによつて頭を下げるルク。恥ずかしいなら言わなければ良い事だろ。全く訳の分からん奴だ。さつきのルクを見て、俺まで恥ずかしくなつて来てしまつただろう。

俺は顔の熱冷ましにもう少しカタナを振ることにじよつ。

俺のするべき事（後書き）

当初の予定では、この話はルクに視点を置いていたのですが、天見酒の書けない病が再発しました。

予定変更、やつぱりリセス。そしたら書ける書ける。主人公は偉大だなあ。

用意に背中を盗れてしまつものだ。盗らせたと言つのが正しいのだ
うひつ。翼の生えた背中が緩やかに振り返り、我を視認する。

「カイム様、何かご用命でしょつか？」

底の知れない素直な笑顔を向けてくる。その顔の裏は本当に底が知
れん。

「特に用は無い。こんな何も無き岩場に、一人で何をしているのか
と思つただけだ」

他が寝静まつた後に、一人で夜营地を脱け出すその行為の真意も知
りたいがな。

「羽根を伸ばしていただけでござります」

文字通りと言つことか。マスナーは羽根を出せる穴の空いた袖の無
いシャツから、急いでその純白の羽根を畳み、いつもの象牙色のロ
ーブを着込む。

「そんな物を着なければいいでは無いか？」

「翼と髪を隠すのは、クーレの観測者としての習慣でしたものでし
て」

この世界の人間には翼が無いのだったな。翼を有するアール人を天
使と崇め、ヘブヘル人を悪魔と蔑む。我はそんな愚かな視線など氣

にはならないがな。

その天使がこのクーレに戦乱を起こした元凶だと語つて、それを知らずに崇める。そんな輩に己の姿を偽るなど、下へりな過ぎだ。

「では、カイム様、皆様のところに戻りましょ！」

羽根をしまい込み、フードで髪を隠したマスナーが立ち上がる。

「まあ、焦るな。我にはお前に聞きたい事が幾つかある」

「何でじょうか？」

マスナーと一人で話せる機会はそうそう無い。我の配下共は必要以上に物を言わない奴ばかりだ。だからこそ、この機会にその笑顔の張り付いた裏側に何が在るのか見極めさせて貰うぞ。

「まずは、何故お前は世界を統一したいのか、だ」

ウーロに関して我に仕えているだけの事。ハシュカレは想い人の為だと聞いている。マバタについてはハシュカレに目的無く付き従い、今はあのリセスとか言う坊主を殺れれば別に構わないらしい。マスナーからは、我々と同じ目標は聞いた。しかし、その背後の目的は聞いていない。いや、明らかに目的を隠している。

「…そうですね、何故世界を統一したいのか。忘れてしました。そんな昔のことば」

その諫言でこの世界を動かして来た女、簡単に口を割るような奴ではない。

「理由も無く、こんな大それた事を続けられるものなのか？」

お前はその理由を見せないから、我の中に不信を生んでいるのだ。

「私は観測者を抜け、介入者になりました。しかし、セルジオ様を始め、主な介入者はゼロランドに送られ、私は残されました。クーレの観測者に戻れる訳もなく、故郷のアールに戻れる筈がありません」

マスナーの語る口元と声の抑揚は普段のように穏やかだ。だが、深々と眼元を隠しているフードを取り払つてやりたい。その中でこの女の眼は何を思つているのか？

「寿命も姿も違う私はクーレ人に紛れる事も出来なく、長い時を過ごすしかない私に残された物。それが、世界統一計画だけなのです」

目標無き計画の実行を進める女。哀れな人間だな。

「愚かだな。お前はせっかく自由を得たのだ。更にお前にはオシリスの杖という力がある。この世界の一国を乗つ取るほどの能があるのだぞ。何故、介入者で在ることに縛られる必要がある？何故、我のよつな童に仕えるふりをする？」

我より力を持つお前が、我の下で在ることが可笑しいのだ。

「それはカイム様の買ひ被りです。私は宿り木のように、誰かに寄生してしか、生きて行く術が無いだけの事です。誰かの養分を奪いながら、ですね」

唯一見える感情の指針である口が更につり上がる。我はマスナーと

言う宿り木に絡まれた大樹と言つことか。

やつと本性をさらけ出したか。

そうでなければ面白く無いではないか。笑いが込み上げてくる。それならば、此方は逆に宿り木の養分を吸い付くしてやるのみよ。

「あら、私の冗談がお気に召されたようですね？カイム様」

おどけた口調で抜かすマスナー。

「ああ、凄く氣に入った。我はお前みたいな従者を持てて幸せだぞ。お前に吸い付くされて捨てられないよう努力するishou。お前も我にその身体を引き剥がされないよう必死に絡みつく事だな」

マスナーからも笑い声が洩れる。

「私は決してカイム様を捨てたり致しませんよ」

「ホオ、信用に値しない言葉だな」

マスナーが急に我に顔を近付ける。フードの下に隠れていた黒い二つの眼が我の眼を映しているのが、分かる距離に。

「だつて、私はカイム様の事をとても氣に入っていますもの」

我の顔に付くかの距離でで妖艶に動く唇に、赤面して腰を退いてしまった。マスナーからの溢れる笑い声が音量を増す。

「フフフ、カイム様も色事に初な御様子で」

我は純情な青年のように、年上の女性の色香で遊ばれたらしい。

我ながら、情けない。

「さて、そろそろ戻りましょう。私は久しぶりに乐しげな話が出来て嬉しいのですが、樂しみ過ぎて少々疲れました」

私は少々不愉快だぞ。しかし、足取りがいつもより軽いマスナーを見ているとそんな不愉快さも薄れて行く。

今はまだお前の手のひらで動かされてやう宿り木よ。
しかしながら、私は欲しい物はどんな手を使っても、全てを手に入れる。全ての世界の全ての物を。
だから、私はいつかお前の全てを手に入れて見せるぞ。心から我に仕えさせてやる。

番外編 悪魔と天使（後書き）

純情な二十歳青年が年増な一千歳越えのお姉様に玩ばれるお話でした。

少しスピノフでカイム達の冒険も連載で書いてみたくなつてしましました。

まあ、今やると今後の魔冒のネタバレが続出しそうなのでやりません。やるとなったら、魔冒終了後ですね。

魔王の我が儘、執政官長の諫言と友の脅迫

休暇として与えられた五日間も、パシクダ力隊長の勝手な計らいにより、魔王親衛隊特別隊員なるものに任命されてしまった俺は、ヘブル式軍事訓練という名の鬼隊長の扱きに耐える日々だった。しかし、この鬼隊長の扱きに耐え、少しあは強くなれたと実感とともに、充実した休暇だったと思える。

しかし、ヘブルに休暇で寄つたことは、思わぬ問題を引き起す。それは次の世界へ渡る直前の現在に到つて発生する。

シユナアダが無表情で見る先には半泣き半睨みのイルサ。

「とにかく魔王ともあろう貴女が、職務をほつたらかして、他の世界に行く等、認められません」

俺たちの出発に水を差されたのだ。主にイルサに。しかし、シユナアダも正論である。一国の王が国をそう簡単に開けて良いわけではない。

「何で！私はちゃんと仕事を片付けたよ！」

確かにイルサはこの五日間ほとんど執務室に籠つていた。食事と寝る時以外。このイルサの努力を評して許してやつてくれないか？

「それが魔王として当然です。それに国の宝で魔王様を危険な地に、こんな少數な護衛だけで送り出す訳には行きません。カイムの事はクレサイダに任せて下さい」

確かに。イルサは国にとつて大事な存在。そいつを前線に引っ張り出す訳にはいかない。それにここに残つた方が安全だろう。

シユナアダの口を挟まないで頂きたい、の一言で発言を封じられた俺と異世界の余所者たち。俺としては、心の底ではイルサと一緒に来て欲しい、という想いまでシユナアダの正論で封じられてきている。非常に気まずい場面に立ち尽くすしか出来ない。

同じくイルサの半泣き顔に一度は心を折られたクレサイダも、イルサへの肩入れを止めさせられ、苦い表情で俺の渡したセレミスキーを指で弄っている。

見送りに来てくれたパシクダ力隊長は我関せずで腕を組み欠伸をしている。その隣で笑顔満開の妹さん、カリサペクは、愛しい主を引き留めるシユナアダを心の中で大応援している事だろう。

戦況はイルサが大劣勢。援護をしてやりたいところだが、俺が口を挟んでも、この戦況はひっくり返らない。

「でも、クレサイダもリセスもルクちゃんもセルツさんもウエダさんも行っちゃうんだよ。私だけ…」

「我が儘も程々にして下さい！」

相変わらず表情を変えずに声を荒げるシユナアダ。イルサの見開く眼から、普段怒鳴る事がない奴なのだろう。

「…失礼しました。しかし、イルサテ力様が我が儘を仰る所為で皆様の出発が遅れています。貴女の立場を弁えなさい。皆様と違うのです。貴女は魔王なのです。それを弁えずに、皆様の足を引っ張るのですか？」

俯くイルサの眼からは大粒の涙が地面へと落ちていく。

そのイルサを置いていくのは、すごく心苦しい。しかし、これがイ

ルサの為でもある。わざわざイルサが、実の兄と戦う必要もなくなる。そう口に納得させるつもりだった。雌雄は決した…。

「シユナアダさん、ちょっと良いかな？」

いや、俺の早計だった。イルサにはまだシユナアダの正論なんて叩き捨てて、己の邪論を押し通す強い味方がついていた。

「イルちゃんが行きたいって言つなら私はイルちゃんを連れて行くよ」

「…ルクちゃん」

ルクには纏まりかけた結論なんて何の意味も持たないらしいな。イルサの眼に期待が浮かぶ。

「イルサテカ様はこの世界の王です。勝手な事を抜かさないで頂きたい」

「だから～？」

ルクに目線を移したシユナアダの言つている事は常識的に正しいのだが、こいつには正しいだけでは勝てない。常識的に正しい事なんて、ゴミ箱に捨てるような奴だからな。

「イルちゃんが魔王なのは知ってるよ～。でもね、イルちゃんは私の大事な友達なんだよ？その大事な友達を泣かせて自由を奪う。そんなこと、このとっても友達想いなルクちゃんが見過こすと思ひ～？」

ルクがとっても友達想いだつたとは知らなかつたぞ。俺は可愛がるを名目に友達を玩ぶ奴だと思つてた。

「ルク・レッズラー様、この世界の事やこの国の事に口を出すのは…」

「そつ私は異世界の人間だよ。だからね、どうでも良いんだよ、こんな世界。イルちゃんの為に私が出来る事ない向でもしてあげちゃうんだ。この世界を敵に回しても、ね？」

ウエダさんが、生でそのセリフをしかも少女から聞く事になると、と眼を見張つている。確かに、なんか格好良い。イルサガルクをうつとりとした感じで見詰めている。少し俺も言つてやりたくなつた。

さておき、形成逆転なつたか。

「本当に貴女の実力で我々の相手が務まるとお思いですか？」

そう簡単には勝てない。

シユナアダは恐らく怒つてゐるのだろう。パシクダカ隊長も不穏な空氣に剣に手を掛けた。おい、力付くでは勝てないぞ。

「シユナアダさん。甘いよ。私にはリセ君がついてるんだよー？」

おい、俺に丸投げるなー無理に決まつてるだろー

「リセ君は、セノミスキーを持つてま～す。つまり、どの世界からもイルちゃんを喚びたい放題なんだよ。さらに、今すぐに色々な世界から、色々な生物を喚べるんだよ。何か、凶悪なのを喚んで

みる~?」

成る程な、ルクの脅しの材料は俺ではなくセレミスキーカ。良く考えれば俺はイルサをいつでもどこでも喚び出せたのだ。

「ルク嬢の勝ちだね、シユナアダ君?まさか、リセ坊からセレミスキーを取り上げる為に、我々で無駄な血を流す氣は無いだろう?イルサ嬢は我々が守る。どうか任せてくれないかね?」

鶴の一聲ならぬ栗鼠の一聲。

大きくなため息をつくシユナアダ。

「ルク様を相手にしていると、同じクーレ人だからでしょうか、セルツテイン様の主人を思い出しましたよ。分かりました。私の敗けです」

シユナアダの敗北宣言。ルクとイルサから歓喜の声。カリサペクからは悲観の声。

「イルサテカ様、リセス様、旅立つにあたってこれをお持ち下さい」

シユナアダが差し出す二つのペンダント。丸い板に埋め込まれた石。

「これは魔鉱石か?」

クーレで、魔具に使われて、魔法を増幅、蓄積する性質のある石に似ている。

「魔鉱石と似たようなのですが、それは伝想石です。伝想石は、

一つの石から欠片に分けると、どんなに遠くに離れて居ても、その欠片同士が惹かれ合い、使用者の声を送る事が出来るのです。世界を跨いでも使える事は六百年前に実証されています

「ファンタジーな携帯電話ってところか？」

ウエダさんの解釈にケイタイデングと首を傾げるシユナアダ。俺もアースに行つて初めて知った物だからな。

「まあ、とにかく。私が、もう三三日の伝想石を持っていますので、何かあつたらお知らせ下さい。本当はクレサイダの分なのですが、イルサテカ様は一日一回は連絡してください。リセス様はセレミスキーで喚ばれる時は一報をお願いします」

つまり、セレミスキーで喚び立てても良いつて事か？それは心強い。

「エッと、シユナアダ。ゴメンね

「先代から魔王の我が儘に耐えるのが私の仕事のようなものです。イルサテカ様、行くからには堂々と行きなさい。お気をつけて」

いつも何だかんだとイルサの自由を奪うシユナアダ。しかし、イルサがシユナアダを嫌いになれない理由が分かる。何だかんだ言っても、シユナアダは根は良い奴だからだ。

俺には嫌な事が多かつた。でも、良い人達に会えた。
このヘブヘルを離れるのも嫌に感じてしまう。ここが第一の故郷という感じだろうか。

魔王の我が儘、執政官長の諫言と友の脅迫（後書き）

この話を書きながら昔の缶コーヒーだけかのことを思い出してしまつた。

男が女性に向かつて

「お前の為なら世界を敵に回しても良い」

つて言つたら、急に自衛隊のヘリが飛んできて包囲されたり、テレビでその男の顔写真と共に米大統領が世界の敵〇〇とか言つ。汗だくになる男。

実力の伴わない奴が言つても格好のつかない台詞なのですね。

死の精神世界フォートン

眼が痛くなる光景と言おつか?田の前に広がるのは白と黒を交互に並べたタイル張りの地面。空は一面の白で塗り潰され、太陽どころか雲一つ浮かんでいない。直ぐ近くに見える、黒い建物の群れ。

「自然感の全く感じねえとこだな」

地面に敷き詰められたタイルを足で叩いて確認しながらぼやくウッドさん。

「IJの世界の住人には必要が無いからね。取り敢えず、向こうに行け」

クレサイダが元気が無い?何か今日は厳肅な空気を背負っているみたいだ。いや、何かに緊張しているのか。

「そう言えばクレちゃん、この世界の事全然話してくれなかつたよね~?歩きながら話してよ~」

「シユナアダに口止めされてたんだよ。姫が絶対に同行したって言つ出すからつて」

「何で? IJはそんなに良い世界なの?」

イルサにとつて魅力的な世界。食い物が只で食い放題とかか?

「IJの世界には肉体を持つ生物は全く居ないんだ。いや、正確には生き物が全く居ないんだけどね」

「じゃあ、この家はどういうのなんだ?」

ウエダさんの質問は「もつともである。目前に迫った黒い建物群。生き物の住処らしき物があつて生き物が居ないとはどういう事だ。

「ここに居るのは精神だけ。この世界は他の世界で死んだ者の精神を集めて閉じ込め、その精神を長い時をかけて、浄化する世界なさ」

そう言いながら、集落の中へ一歩踏み出すクレサイダ。

道を行く人達。道端に座り込む人達。服装に統一感がなく、クーレで見るような服を着ている者もいれば、アースの服もいる。人種もバラバラで肌、髪、瞳の色、翼の有無等も異なっている。しかし、一様に同じなのは活気とは無縁な街。静かに歩く生気を感じられ無い人達。死んでいるのだから当たり前なのだろうが、まるで影だけが動き回っているように。この世界の人達は、何もする事無いのだろうか?

「つまり、死人の住む世界って事なのだね?とても寂しいところだね。ところで聞きたいのだがね…」

セルツがイルサからクレサイダの肩に移つて聞く。

「僕も詳しくは知らないよ。浄化されてなければ会えるかもね。君の昔の仲間たちにね」

リンセン・ナールスやレクスター・シーカスに会える可能性があるのか。父上が知つたら大喜びしそうだ。

「ちょっと待つて!お父様やお母様に会えるのクレサイダ!」

イルサが期待を込めた瞳でクレサイダを見る。死んだ家族に会える。イルサにとつては魅力的な世界だな。

「淨化されていなければ可能性はあります。しかし、この世界は広いです。会えない可能性の方が大きいでしょう。当初の目的を忘れないように」

クレサイダが淡々と言つて聞かせ、頃垂れるイルサ。人生そう上手くはいかないつてものだ。

「姫、死んだ人間はもう会えない。それが常なのです。僕は会うことを必ず良いことだとは思えません」

そつ言いながら歩みを進めるクレサイダ。

「とにかく、欠片を探して、そつと帰る……」

「表に出やがれ！今日こそ決着を着けてやるぜ！それともなんだあ？テメエは取り巻きが居なきゃあ、末端軍人一人にも勝てねえてか？」

「身の程知らずが。我に対するその愚弄は高く付ぐぞ！」

その時だった。静まりかえる閑静な街に響く霸氣のある一つの声。

扉を蹴破り勢いよく出てくる大男。クーレの軍服。しかし、カーヘルさんの軍服に似ていることから旧ガンデア出身なのだろう。声の張りといい、体格といい、死とはかけ離れた健康そうな男だ。

その男の後から追つて出てきた男。羽が生えているから、ヘブヘルかアーレルなのだろうが、その男を見た瞬間に全身の毛が逆立つ思いをした。思わずカタナの柄を握んだ手が震えている。その男の顔を見ただけだった。俺がそいつに勝てないと悟ったのは。何なんだ、こいつは。こんなに俺の身体が震えるのはカイムと対面して以来、いやカイム以上の恐怖の存在。何なのだ、こいつの纏う怒りの雰囲気は。

隣に居る怖いもの知らずのルクの顔にさえも怯えの表情が見え、イルサは…。泣いてる？

「おどおさま～！」

泣き声で崩れ、良く聞き取れなかつたが、お父様と言つたのか？えつ、お父様つて？

死の精神世界フォートン（後書き）

出てきちゃいますよ。あんな人やこんな人が！

死せし英傑達との悲しき再会

勢いを付けてハグしようとするイルサと亡くなつた父親との感動の再会。そうはいかなかつた。父に全体重を預けるつもりだったイルサは、父の身体をすり抜けて、白黒の地面へ前のめりに倒れる。その触れぬ父がなればただ道端で転んだ女。

「… どうか、我に触れぬと言つことは、イルサはまだ死んで居らんと言つことだな？ 安心したぞ」

顔が涙で酷い状態のイルサの頭を撫でるふりをする前魔王。先程の見る者を恐怖に包み圧倒する雰囲気は既に無く、安心したの言葉とは裏腹に寂しそうな顔の父親と泣き続ける娘がその場に居た。

その親子に近寄りながら、俺の心に甦るクレサイダの先程の言葉。
『必ずしも会える事が良いことだとは思いません』こんな悲しき再会があるのだろうか。

「んなあーーーセカー！」

イルサの突然の登場で影となつていた前魔王の決闘相手の大男が、近寄る俺たちを見て驚きの大声をあげる。まあ、誰を見ての事だかは分かる。かの聖女様と容姿だけはそつくりだからな。しかし、聖女であり、国の重鎮であるニーセさんを平氣で呼び捨てにする人が、父上達の他に居たとは驚きだ。

「え～と、母に似て美人ですが～、私はニーセ・P・レッドラーートの娘のルク・レッドラーートです」

「ハア～！――セ・ロ・レッドラートつて！あいつ、嫁に行けたのか！」

いや、このおやじさんは何故にそんなに驚くんだ。――セさんと言つたら、クーレで知るものは居ない世界を代表する淑女だぞ。嫁にするなら聖女様のような人にしなさいと親が息子に言われるぐらいの女性だ。俺は両親に――セのような女には引っ掛かるなと意味不明な事を言われたが。

「しかも、レッドラートつて！敵軍の親玉格じゃねえか！何がどうなつてそつた？」

一人大混乱をきたすおやじさん。まあ、シーベル工騎士団で一番の紳士な男性と旧ガンデア軍で一番の淑女な女性が出会つた事は奇跡に近いのだろう。しかし、出合つてしまつたからには当然の結果。そういうものではないのか？

「あ～、一体世の中どうなつてやがんだ！おつと、悪い。色々聞きたい事はあるんからよお、取り敢えず中に入ろうぜ。なあ、魔王さんよお！お？お前、その坊主！学者に似てんな？もしかして学者の息子か？」

「学者つて。誰の事を指すかは何となく分かるが、俺は父上を学者と呼ぶ人間は初めて見た。

外観の全て真っ黒とは異なり、中身は全て真っ白な建物内。――で生活したら田がおかしくなりそうだ。

「ミシヤがシーベル工騎士団での坊主の隊に居るとはねえ。まあ、ある意味安心出来るちゃ あ出来るがよお。ミシヤは絶対ルー・シヤに

似て、美人になつてゐる。シーベル工の野郎共、手出してゐる輩は居ねえだろ？」

父上が英雄と称える二ーセさんの元上官ケルック・ラベルグさん。ミシャさんとレクス兄さんが密会しているのを田撃してしまつた事は、やはり胸の内にしまつておいた方が良いだらうな。

「まさかあのジンサに嫁の貰い手が出来るとは思ひませんでしたよ。しかも、こんなに可愛らしい姪まで作つて」

ジンさんの兄にして、シーベル工最大の反逆者として歴史に名を残すウォツチ・レッドラー。何と言つて、ルクを見る田は噂とは違ひ感じが良さそうな人だ。

「あのアレンが、第3独立遊撃隊隊長になつたか。こいつは面白れえ！なあ、ハヤセ？しかも、お前の想い人捕られちまつてるぞ？リセス君、実はなここに居る堅物君はな、生前君のお母さん！」

「ラス隊長！当人の子息の前でそつとつ話をするべきでは無いです！」

アレン・レイフォートを育てたのは俺だと豪語するラスウェル元第3独立遊撃隊隊長と、その少し興味をそそられる話を顔を真つ赤にして遮るハヤセ副隊長。

その母上にまつわる話を聞きたいところではあるが、イルサ達の話の方が重要である。

「… どうか。カイムがな。取り敢えずクレサイダ、『ご苦労だな』

シールテカの言葉に恭しく頭を下げるクレサイダ。

「全く、不良息子になってしまった者ね。あつ、セルツも娘を守つてくれてありがとね」

「いや、私はそこまでのことをしてないよ。彼ら若い者が頑張った結果だよ」

魔王妃でイルサの母にして、観測者クラフの妹、そしてセルツの知り合いらしい女性。何とも様々な立場をお持ちだ。

秘密多きセルツとの関係を聞いておきたいところだった。

質問は急に高笑いし出したこの男に遮られる。

「済まぬな。フッフッ、しかし、全世界征服とはカイムも立派になつたものよ」

何でこいつは至極楽しそうに笑える？お前を殺した奴だぞ。

目の前で笑う男、元魔王シールテカ。こいつの語る意味は俺より深いところにあるのは、まだ俺には分からぬ。元魔王と元王妃の話を聞くまでは。

「心底我が氣に入らないと、う面だな。小僧よ」

「ああ、氣に入らない。イルサの傷心も知らずに、カイム等を讃めるあんたは。」

「申したい事があるなら、言つてみよ」

「未だに高笑いの余韻を残しながら、俺に挑戦的に言つてくる。その喧嘩、買つてやる。」

「カイムはあんた達を殺して、イルサから魔王の証を力尽くで奪おうとしているんだぞ。あんたはそのカイムを認めるといつのか？」

「認めんな」

そら見るーへらへらと笑える事では無いだろ。

「我に力が有ればの話だ。カイムは我に力で勝つた。既にあいつは我を制して認めさせたのだ。全てをな」

「ならば、あんたは力が有れば何をやつても良いこと言つのかー！」

「ああ、その通りだ。力が有れば何をやつても良い。それが真理であつづ？」

また、愉しそうに笑い出すシールテカ。何故か、その笑いはラベルグさん、ラスウェルさん、シルビーさん、そしてセルツにまで伝染

する。ここまで、年上達に囮まれて笑われるときすがに立場が無い。

「申し訳ありません、シールテカ様。リセスはこういう奴なのです」

「まあ、良い。私は中々楽しめてもらつてる」

クレサイダの酷い物言いに、シールテカはご満足に頷く。

「どこか貴方は私の知り合い彼に似てるわ。ねえ、セルツ？」

「君もそう思うかい？いや、私にも常々そう思つて楽しくリセ坊を見ていたのだよ」

「おい、栗鼠公。俺は見せ物じゃないぞ。俺は見ていてそんなに楽しいのか？」

「昔、貴方と同じ事を言つた男が居たわ。武力で、世界を取るなんて許せないってね。それをたしなめた人が居た。ならば、お前はそいつから世界を護るために、武力を使わずして護れるのかつてね。彼はその人に返す言葉は無かつた。貴方には有るのかしら？」

俺を優しい眼で見詰めて来るシルビーさん。カイムにカタナを振るわざに、世界を護る方法が浮かぶはずもない。

「その人は、続けて言った。私達は力がなければ何も得られない。私達が選べるのは、その力で何を得るのかだ。お前はその力を持つて何を得たいのだ？ってね。どうかな、リセス・ネイスト君？」

シルビーさんの眼は昔のその人達を見ながらも、俺をしっかりと見据えている。シルビーさんの間に答えられない。その代わりに自然

とイルサの顔を素早く眼だけで確認してしまった。

「フフフ、それで良いの。イルサをよろしくね？」

あつ、いや、そういう訳では決して無いのだ。俺の十数年鍛えた剣技を何に使うか考えたら、勝手に眼がイルサの方に向いただけであつてな？

「イルサ？この男はお前の只の従者であるひづな？」

先程までの笑みが消えた元魔王様。“只の”に微妙なアクセントを置いて、イルサに鬼気迫る顔で聞く。

「違うよ、お父様。リセスはとっても仲の良い友達なんだよ。私達は一緒に御飯食べたり、一緒に寝たりするほど仲が良いんだよ」

イルサは両親に意氣揚々と友人の事を自慢する餓鬼。イルサの言っている事に虚実は全く無い。無いのだが。

「あら、もうそこまで？重ね重ねイルサをよろしくね。もう分かつてると思つけどこの子は結構、初だから

いや、貴女の勘違いする意味でイルサを任せられても困ります。

「おおー！あのヘタレな学者に似すこ、手が速いこつて

いえ、ラベルグさん、父上はヘタレでは無いです。俺も父上に似て女性とは清く正しい付き合い方をする人間です。

「クレサイダよ？」この小僧を焼き殺せ。今すぐに。くそ、我に肉体

があればこんな小僧にイルサを…」

俺の隣のクレサイダの耳に近付き囁くシールテカ。俺にはその殺意に満ち足りた声がはつきりと聞こえてるね。

「いやあ～、若いつて良いね～？そり思わないかね？リセ坊？」

俺がそんな年寄りの達観した考えに至るにはまだまだ遠いよしだ。

魔王の妃の話の話（後編）

久々の更新です。しかもいつも今までまして、短い。ちびっとシルビーさんに活躍して貰いました。

最近、戦闘書いて無いっす。でも、まだ戦闘シーンまで一、二話挟んじやいます。戦闘お待ちの方々暫しお待ち下さい。

寝れる訳がない。知り合いが多く積もる話も有るだつと一泊していく事になつたのだが、外は一向に日が暮れる様子も無く、日すら無い。時間と言つ概念が無い世界なのでと、レッドドーム元北方騎士団長は語つた。我々はただただ、存在するだけの存在だとも。

此處での再会の無い事とシールテカの睨みが酷い事で、俺とウエダさんが居辛い空氣から散歩に駆り出したのだが、日の前には何をするでも無く漂う存在達。

「俺も死んだらこうなるのかと思つとわびしいもんだな。酒も食い物も煙草も望めば簡単に手に入る。だからこそ、やる事、やりたい事が無いってな。死にたくないもんだな」

ウエダさんの眩きに黙つて首を縦に振つておく。

「ウエダと言つたな、その通りだ。此所には進歩は無く、過去に存在する者しか居らん。死んでいるのだよ、我々は

「あんた、居たんかい！」

死んだ人間に気配と言つものは無いのか、いつの間にか俺たちの背後を取つていたシールテカに、ウエダさんが恐るべき素早く応対。

「ハハハ…良いのだよ。どうせ我は娘と再会しても、妻に女同士の秘密の話と言われ追い払われ、そのやるせなき気を晴らす為に出た先で声を掛けたら、存在を否定される言葉を投げ付けられる…。そんな存在なのだよ、どうせ

妻子に冷たくされて拗ねてやがる。

「まあまあ、落ち着けよ、お父さん」

「貴様にお義父さんと呼ばれる筋合には無いー。」

ウエダさんの付け足した親切の一言に敏感に激怒する元魔王。俺には思春期の娘を持つ敏感な心の父親の相手は務まりそうに無いので、申し訳ないがここはウエダさんに任せしょー。

「昔は、我の姿を見ると、羽根を喜びにはためかせながら、世界一の笑顔で飛び付いて来たのに、今はシルビーばかり。あれか、我が仕事ばかりでイルサに構つてやらなかつたのが悪いのか？ 我は、家族を守る為に精一杯働いていたのだぞ！ その結果がこれなのか！ ちょっと眼を離した隙にどこの馬の骨か分からん男を作つて、久々に顔を合わせしたら避けられる……」

父上のお得意の「冗談だと思つていた。嫁を貰つてマイホームパパになつてしまつた魔王など。何だかカッコ悪いと言つたら、父上に、そんなことは無い、夫兼父親は偉大な職業だと力説された。

「まあ、シールテカさん。年頃の娘なんてそんなもんだって。まだクソオヤジとか、近寄らないでとか言われないだけマシだと思つぜ」

「イルサからそんな事を言われたら我は……死ぬ

心配するな。イルサはそんな事を言つて無いし、あんたは既に死んでいる。

「せつそう、あなたはまだ娘さんに愛されつてゐるって」

「そつそつか、本當か？適當な慰めでなかろうな？現に我はせつさ、イルサを妻に持つてかれたんだぞ」

ウエーダさんに詰め寄るシールテカ。その勢いにウエーダさんが一步後退る。

「ああ、えーと、俺の住んでた世界に心理学つて學問が有つてな、そこでエレクトラコンプレックスつて概念がある」

「シンリガク、えれくとらコンプレックスつ？何なのだ、それは」

慌てて考えたように語り出すウエーダさん。娘に溺れる者は藁では無く、ウエーダさんの襟を掴もうとする。

「ちょっと、落ち着け。あれだ、女の子は父親に無意識に惚れちまつもんだつてことだよ」

「適當な事を言つな！現にイルサは我よりもシルビーを選んだぞ。私は納得せんぞ！」

今回は俺の身近な女であるルクは父親に惚れてるようには決して見えんぞ。

「ああ、面倒くせえ！良いか、エレクトラコンプレックスには段階つてもんが有つてだな。幼い頃は父親の氣を惹こうと娘はベッタリ。でも、その内に無意識に気付いちまうんだよ。父には既に母という最愛の人が居ることに。そうすると娘は次なる父を愛する手段を無意識に取る。母親のような人間になれば、父に好かれるではないか

? そうすると、母と仲良くなり、父に辛く当たつてしまつ。これは、父を愛する気持ちが大きければ大きくなる。万人に当てはまるといかねえけど。どうだ、シールテカさん、イルサの行動に思い当たる節はあるだろ?」

「あるー。そ、うか、イルサは我を愛するが故にシルビーのよつな女性にならうと、まったくイルサはしようがない奴だな」

ウエダさんに丸め込まれて、浮かれる魔王。ルクにも当てはまる節がある。遙か昔はジンさんにベッタリだつたからな。

「それでウエダ、イルサはシルビーのよつな美女に育つて我の元に戻つてくるのだな」

眼を期待に輝かせ聞くシールテカ。

「ああー、うん、言いにくいくらいだけどね。その頃には実の父と付き合ひ事が出来ないつてのを知るつて言つたか」

ウエダさんの歯切れの悪い答え。

「なつーはつきつと言えー。我はどんな結果にも……」

「父親への愛を諦めて、別の父親と似た所のある男性を愛するようになる」

元魔王、異世界人の学問の前に、地にひれ伏す。

つまり所、イルサはこの魔王のような男に惚れ、ルクはジンさんのような男性に惚れるつてことか? 眉唾物だな。だが、ビことなく当たるような気がしないでも無い。

「あー、シールテカさん。子供は親を離れて行くもんだからさ。あんたもそろそろ子離れしないと。ああ後、これは類型論、大体の人当てはまるだけでイルサがそうやって成長するかはだな…」

ウエーダさんの最もな提言を耳に入れず、シールテカは白黒の床を眺めながら何やらぼやいている。と思えば急に立ち上がる。

「つまり、我はその小僧と似ていると云ひ」とか「二子が似てる…」など、「これはでたらめなのだ」

いや、俺とあんたが似ても似付かないことは認めるが、別にイルサは俺に惚れている訳では無いからな。

しかし、もしもイルサが惚れる男性はこういつ情けない男なのか？

イルサの兄代わりとしては、こんな男との付き合いは絶対に認めん！

ウエタ精神分析論（後書き）

一週も開けてしまい申し訳ない。

やうに今日は「メティ」。

ちなみに、エレクトラゴンフレックスの男の子バージョン、エディ
プスコンプレックスつてのがあります。母親を愛し、その内に父親
に似ようと努力するようになる。誰かさんの事ですね。

これって無意識の中の作用で誰でも起つているらしいのですが、
どうなんでしょう？

元魔王の恩返し

果たして、見るも無惨にウエダさんの前に屈服を喫したシールテカ。「で、あんた、まさか俺たちに愚痴を溢しに来た訳じゃないんだろ？」

「ああ、そうだ。そこの小僧に話が合つたのだ」

ウエダさんの呆れ混じりの声に顔をあげるシールテカ。俺に言いたい事、大体は想像が付いてしまうところだが。

「じゃあ、俺は外すわ。未来の親子同士仲良くなってくれ」

「我にはイルサとカイム以外の子は居ない！未来永劫、これ以上息子はいらん」

俺にこの男を押し付けて元来た道を戻るウエダさん。嫌な気の回し方をしてくる。こいつは既に話す事など何も無い。

「さて、小僧。じつくり腹を据えて話そうではないか？」

シールテカは地面に胡座を搔き、俺を見上げて居る。俺も肩を並べて座った方が良いのだろうか？

「率直に聞くぞ」

そんな俺の考えは余所に、俺に見下された事も気にせず、話し出す。

「お前はイルサはカイムより弱いと思つた？」

单刀直入過ぎる問い。その鋭き言葉は俺の脳を深く貫き声を出させない。ふざけている訳では無い。シールテカの瞳は鋭く俺を捉えている。

「お前は我に言つた。カイムはイルサに敵わん。カイムはイルサに戦うのは不~~合~~だと。我にはそう聞こえたぞ」

俺の中で~~否定~~の言葉を述べる事が浮かぶ。だが、俺の外にそれは出ない。

「我が娘を讐めるなよ、小僧。イルサはカイムに勝る力を持つている。貴様はそんな事も分からんのか？」

怒りでも嫌味でもない。シールテカは俺に諭すような語感を用いている。しかし、こちらが怒りを覚えるのは代わりがなかつた。

「我はイルサに我の全てを譲つたのだ。カイムより弱い筈がなかろう」

「そのあんたが譲つた力。魔王の証、魔王の地位がイルサを苦しめているのが、あんたには分からないのか？」

ここで、此方が激情しては負ける氣がする。煮えたぎる思いを抑える。

そして、元魔王はまた楽しそうに笑う。この男が笑う種が何なのか全く分からぬ。

「小僧、お前はあの小僧に考え方が良く似ている。本当にな

シールテカは本当にその小僧がお気に入りの様で、その俺に似ている小僧の話を嬉しそうに語る。

だが、俺にはどこがどう似ているのか分からぬのがつまらない。

「リセス・ネイスト。お前は弱いか？」

「ああ」

卑下ではない。俺は父上やアレンさん達には到底勝てない、この魔王の知るクレサイダ、パシクダカ先生にも勝てず、カイムやイルサにも勝てない。

「いや、お前は十分に強い。それが分かっていない。クレサイダが認め、イルサが認める者なのだぞ？」

「今度は慰めのつもりか？ 俺は、俺の実力がイルサやクレサイダに認められているとは」

「やう思ひのは、お前はお前の実力を認めて無いからだ」

また俺に反論の術は無くなつた。何故だかは分からない。シールテカに、俺は俺の中で何か怖いものに触れられた。

「己の力を侮る奴は他人の力を侮る。お前がイルサを強いと侮りながらも、イルサを弱いと侮るのは、お前が自身を強いと侮り、弱いと侮るからだ。それ故、側に居てもイルサの強さも分からぬ」

今ここでシールテカに反抗も出来ないという事は、俺は己の力量すらも計れていない。それを自分で感じていたのだろう。誰かに言わなければそんな事にも俺は気付けない。

「まずは、己の力を知れ。上に見ることも無く、下に見ることも無く、己の持ち得る力をな。そうせねば、カイムには勝てん。カイムは己を知っているからな」

それだけを言うと立ち上がり、満足そうに俺の顔を眺める魔王。

「ライシス・ネイストに伝えておけ。シールテカ、息子に借りを返したとな」

踵を返す元魔王。そのまま、呆然と立ち去る俺の前から悠然と去っていく。父上を知つていて然るべき。この元魔王は父上と死闘を繰り広げたのだから。

しかし、宿敵に借りた物とは何だつたのだろうか？一ーセさんの言う命乞いの話か？この元魔王が命乞いをする輩には見えんが……。

「一つ言つておぐが、イルサは貴様に渡す『氣はない』

前に進むのを止め、背中を見せながら語るシールテカ。俺も別に渡される『氣は無い』。

「欲しければ、我から力尽くで奪つてみる。そしたら、イルサとの仲を認めてやる。今のお前では無理だと思つがな？」

歩きを再開するその顔は見せない。ただ、シールテカは笑っている。そんな気がした。

元魔王の恩返し（後書き）

お久しぶりです。

大変お待たせしました。

次の更新もまた遅くなるかも知れません。

我が職場では、死走しづかと呼ばれる1~2月が迫っています。本当に死人が出ないか心配です。

せめて、週一更新は出来るように頑張りたいところです。

また、長くお待たせしてしまったかもしれませんが、どうぞ宜しく承下
さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0474m/>

魔王との冒険記

2010年11月24日11時49分発行